

独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
第5冊

旧練兵場遺跡V

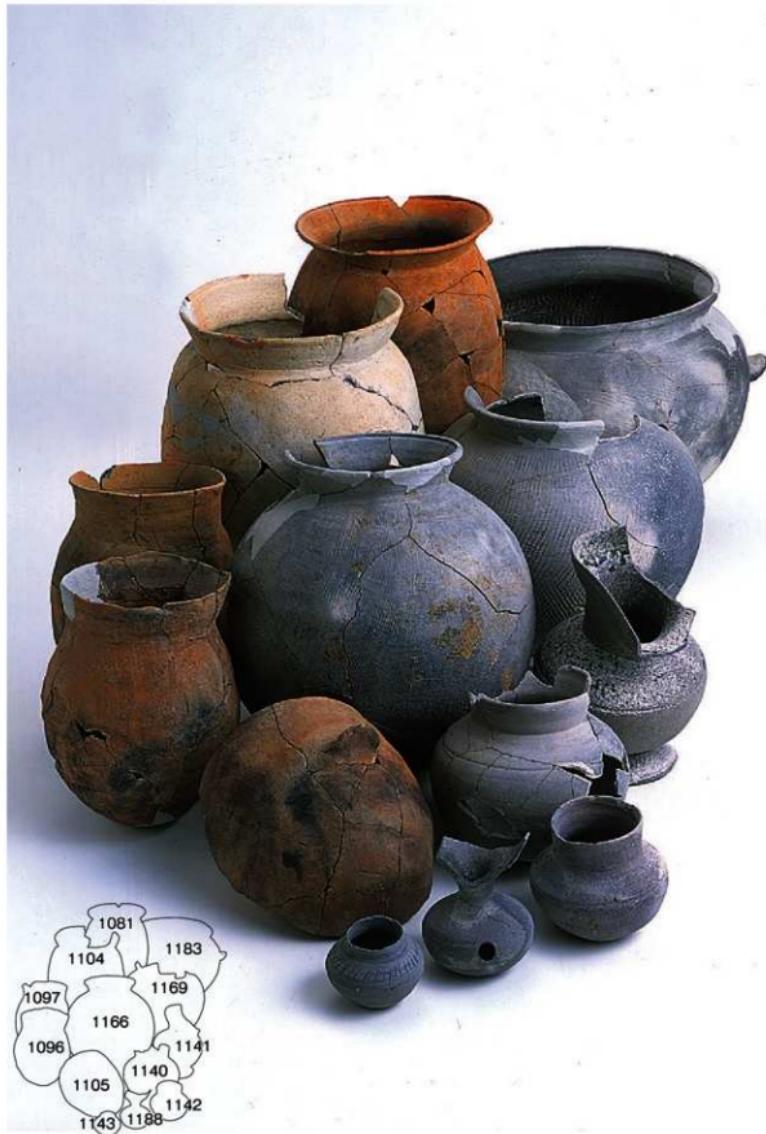
第一分冊

2015.2

香川県教育委員会
独立行政法人国立病院機構善通寺病院



絵画土器 (1673) SD0704 出土



7-8 区 SX02 出土土器



赤色顔料精製に関わる石器
石臼(1841)・石杵(1848)



管玉·勾玉

巻頭図版 4



7-2 区全景 北から



7-2 区全景 北西から



9・13 区全景 北から

巻頭図版 6



7-8 区 SX02 遺物出土状況 南西から



SR01 (7-13 区・7-14 区部分) 北から

序 文

本書は独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う平成 22 年度に実施した旧練兵場遺跡第 28 次調査の報告です。旧練兵場遺跡はすでに刊行されている 4 冊の報告書によって、弥生時代から中世にいたる集落遺跡で、特に弥生時代の集落跡としては西日本でも有数の規模を誇ることが明らかにされています。

今回報告するのは調査区の中でも西側の部分に当たり、他の調査区同様、弥生時代から中世にわたる数多くの遺構・遺物が発掘されました。特に弥生時代の建物を描いた絵画土器の出土により、弥生時代の建物についての手がかりがつかめました。また、他地域で製作された土器・石器・玉類の出土により、この遺跡に住んでいた人々がどのような地域の人々と交流していたのかがわかりました。これらの成果は当時の社会を復元するうえで重要な資料となるものです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました独立行政法人国立病院機構普通寺病院をはじめ関係機関並びに地元関係者各位に、厚くお礼申しあげますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともいっそうのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 2 月

香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋 昌宏

例　言

- 1 本書は、香川県普通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した調査は、独立行政法人国立病院機構普通寺病院から香川県教育委員会に委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。調査・報告書作成に伴う費用は、全て独立行政法人国立病院機構普通寺病院が負担した。
- 3 現地での発掘調査は平成 22 年 4 月 1 日から実施し、平成 23 年 3 月 31 日に終了した。整理作業は香川県埋蔵文化財センターにて平成 24 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日まで実施した。
- 4 現地での発掘調査の担当は以下のとおりである。

主任文化財専門員	森 格也
主任文化財専門員	木下晴一
文化財専門員	森下友子
文化財専門員	藏本晋司
文化財専門員	佐藤竜馬
文化財専門員	松本和彦
調査技術員	木全加珠美
調査技術員	白木 哲
調査技術員	東潤 愛
- 5 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の関係機関や多くの方々の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

白石 純（岡山理科大学）、藤田三郎（田原本町教育委員会）、宇垣匡雅（岡山県教育委員会）、長谷川一英（岡山市埋蔵文化財センター）、平井典子（総社市教育委員会）、仁木康治（津市教育委員会）、網 伸也（近畿大学）、石丸恵利子（広島大学総合博物館）、岡山真知子（徳島文理高校）、鈴木 圭（公財 愛媛県埋蔵文化財センター）、普通寺市教育委員会
- 6 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の整理作業において、遺構・土器については森下友子、石器・金属器、玉類については木下晴一、福集は森下が担当した。また、動物遺存体については広島大学総合博物館石丸恵利子氏より玉稿を頂いた。
- 7 本書で用いる遺構名は、基本的には現地調査で使用したものを踏襲するが、複数の調査区にまたがっている構造や河川は、現地調査の遺構名とは異なる遺構名で報告するものもある。

- 8 本報告書の測地系は、既往の調査区との整合を図るために旧来の日本測地系を使用し、平面直角座標は第IV系を使用した。標高は全て T.P.（東京湾平均海面）により表示した。
- 9 収録した写真や実測図、自然科学的分析については、下記のように委託した。
航空写真（株式会社 四航コンサルタント）、土器実測（株式会社 アコード）、遺物写真（岡村印刷工業株式会社）、赤色顔料同定（株式会社 パレオ・ラボ）、玉類材質分析（株式会社 古環境研究所）、金属器エッカス線撮影（株式会社 文化財サービス）
- 10 本報告書における弥生時代から古墳時代初頭の土器の年代観については、信里芳紀「弥生中期後半から古墳時代初頭の土器編年」（香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡II（第19次調査）』2011年）による。
- 11 発掘・整理業務で作成した実測図・写真などの記録は全て香川県埋蔵文化財センターで保管しているので、活用されたい。

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査の経過.....	1
第2節 整理作業の経過.....	2

第2章 遺跡の立地と既往調査の概要.....	5
------------------------	---

第3章 調査の成果

第1節 層序.....	11
第2節 遺構・遺物.....	25

第4章 自然科学的分析

第1節 動物遺存体.....	(第2分冊) 1
第2節 土器および石器付着赤色顔料の蛍光X線分析.....	(第2分冊) 16
第3節 土器付着赤色顔料の蛍光X線分析.....	(第2分冊) 25
第4節 玉類の材質分析.....	(第2分冊) 29

第5章 総括

第1節 遺構の変遷.....	(第2分冊) 32
第2節 絵画土器・記号土器.....	(第2分冊) 44
第3節 赤色顔料付着遺物.....	(第2分冊) 67

挿図目次

第一分冊			
図 1 調査区割図	4	図 44 7-8 区 SH01 (1)	57
図 2 旧練兵場遺跡の位置 (1/25,000)	5	図 45 7-8 区 SH01 (2)	58
図 3 既往の調査区	6	図 46 7-8 区 SH02	59
図 4 土壠断面図作成位置図	12	図 47 7-8 区 SH03 (1)	60
図 5 土壠堆積図	13	図 48 7-8 区 SH03 (2)	61
図 6 7-2 区・7-7～9 区・7-13 区・7-14 区遺構平面図	15	図 49 7-8 区 SH04 (1)	62
図 7 7-2 区遺構平面図	17	図 50 7-8 区 SH04 (2)	63
図 8 7-7 区遺構平面図	19	図 51 7-9 区 SH01 (1)	64
図 9 7-9 区遺構平面図	20	図 52 7-9 区 SH01 (2)	65
図 10 7-8 区遺構平面図	21	図 53 7-9 区 SH02	66
図 11 7-13 区・7-14 区遺構平面図	23	図 54 7-9 区 SH03	67
図 12 7-2 区 SH01	25	図 55 7-9 区 SH04	68
図 13 7-2 区 SH05	26	図 56 7-9 区 SH05	69
図 14 7-2 区 SH06	27	図 57 7-9 区 SH06	70
図 15 7-2 区 SH07	27	図 58 7-9 区 SH07	72
図 16 7-2 区 SH08	28	図 59 7-9 区 SH08	73
図 17 7-2 区 SH09	30	図 60 7-9 区 SH09 (1)	74
図 18 7-2 区 SH10	31	図 61 7-9 区 SH09 (2)	75
図 19 7-2 区 SH11	32	図 62 7-9 区 SH10	76
図 20 7-2 区 SH12	33	図 63 7-9 区 SH11	77
図 21 7-2 区 SH13	34	図 64 7-9 区 SH12	78
図 22 7-2 区 SH15	35	図 65 7-13 区 SH03	79
図 23 7-2 区 SH16 (1)	37	図 66 7-13 区 SH04	79
図 24 7-2 区 SH16 (2)	38	図 67 7-13 区 SH05	80
図 25 7-2 区 SH17 (1)	39	図 68 7-13 区 SH06・7-13 区 SH07	81
図 26 7-2 区 SH17 (2)	40	図 69 7-13 区 SH08	83
図 27 7-2 区 SH18	41	図 70 7-13 区 SH10	84
図 28 7-2 区 SH19	42	図 71 7-13 区 SH11	85
図 29 7-2 区 SH20	43	図 72 7-13 区 SH14・7-13 区 SH15	86
図 30 7-2 区 SH21 (1)	44	図 73 7-13 区 SH17	87
図 31 7-2 区 SH21 (2)	45	図 74 7-13 区 SH18	88
図 32 7-2 区 SH22 (1)	46	図 75 7-13 区 SH20	89
図 33 7-2 区 SH22 (2)	47	図 76 7-13 区 SH21 (1)	90
図 34 7-2 区 SH22 (3)	48	図 77 7-13 区 SH21 (2)	91
図 35 7-2 区 SX04	48	図 78 7-13 区 SH22	92
図 36 7-7 区 SH01 (1)	49	図 79 7-13 区 SH23	92
図 37 7-7 区 SH01 (2)	50	図 80 7-13 区 SH24	92
図 38 7-7 区 SH01 (3)	51	図 81 7-2 区 SB01	94
図 39 7-7 区 SH01 (4)	52	図 82 7-2 区 SB02・7-2 区 SB03	95
図 40 7-7 区 SH01 (5)	53	図 83 7-2 区 SB04・7-2 区 SB05	96
図 41 7-7 区 SH01 (6)	54	図 84 7-2 区 SB06	97
図 42 7-7 区 SH01 (7)	55	図 85 7-2 区 SB07	98
図 43 7-7 区 SH01 (8)	56	図 86 7-2 区 SB08	99
		図 87 7-2 区 SB09	100

图 88 7-1 区 SB01	101	图 135 7-7 区 SX04	145
图 89 7-2 区 SB11	101	图 136 7-7 区 SX05	145
图 90 7-2 区 SB12	102	图 137 7-7 区 SX06	146
图 91 7-2 区 SB13	103	图 138 7-8 区 SK01	146
图 92 7-2 区 SB14	105	图 139 7-8 区 SK02	148
图 93 G 区 SB0006	106	图 140 7-8 区 SK06	148
图 94 H 区 SB1003	107	图 141 7-8 区 SK04	148
图 95 7-7 区 SB01 • 7-7 区 SB02	108	图 142 7-8 区 SK07 (1)	149
图 96 7-7 区 SB03	110	图 143 7-8 区 SK07 (2)	150
图 97 7-7 区 SB04 • 7-7 区 SB06	111	图 144 7-8 区 SK08 • 7-8 区 SK09 • 7-8 区 SK10 • 7-8 区	
图 98 7-7 区 SB07	112	SK13 • 7-8 区 SK14	151
图 99 7-8 区 SB01	113	图 145 7-8 区 SK18 • 7-8 区 SK19	152
图 100 7-8 区 SB02	114	图 146 7-8 区 SP268	152
图 101 7-8 区 SB03	115	图 147 7-8 区 SX01	153
图 102 7-8 区 SB06 (1)	116	图 148 7-8 区 SX02 (1)	154
图 103 7-8 区 SB06 (2)	117	图 149 7-8 区 SX02 (2)	155
图 104 7-8 区 SB07	118	图 150 7-8 区 SX02 (3)	156
图 105 7-8 区 SB08	118	图 151 7-8 区 SX02 (4)	157
图 106 7-8 区 SB09	119	图 152 7-8 区 SX02 (5)	158
图 107 7-9 区 SB01	120	图 153 7-8 区 SX02 (6)	159
图 108 7-9 区 SB02	121	图 154 7-8 区 SX02 (7)	160
图 109 7-9 区 SB03	122	图 155 7-8 区 SX02 (8)	161
图 110 7-9 区 SB04	123	图 156 7-8 区 SX02 (9)	162
图 111 7-13 区 SB05	124	图 157 7-8 区 SX02 (10)	163
图 112 7-13 区 SB06	125	图 158 7-8 区 SX02 (11)	164
图 113 7-13 区 SB07	126	图 159 7-8 区 SX02 (12)	165
图 114 7-13 区 SB10	127	图 160 7-8 区 SX02 (13)	166
图 115 7-13 区 SB16	128	图 161 7-8 区 SX02 (14)	167
图 116 7-2 区 柱穴・小穴 (1)	129	图 162 7-8 区 SX02 (15)	168
图 117 7-2 区 柱穴・小穴 (2)	130	图 163 7-9 区 SK01	168
图 118 7-2 区 柱穴・小穴 (3)	131	图 164 7-9 区 SK02	170
图 119 7-7 区 柱穴・小穴	132	图 165 7-9 区 SK03	171
图 120 7-8 区 柱穴・小穴 (1)	133	图 166 7-13 区 SK10 • 7-13 区 SK14	171
图 121 7-8 区 柱穴・小穴 (2)	134	图 167 7-13 区 SK15	172
图 122 7-9 区 柱穴・小穴	135	图 168 7-13 区 SK17	173
图 123 7-13 • 7-14 区 柱穴・小穴	136	图 169 7-13 区 SK18	173
图 124 7-2 区 SK02	138	图 170 7-13 区 SK24 • 7-14 区 SD28	174
图 125 7-2 区 SK05	138	图 171 7-7 区 SX03	176
图 126 7-2 区 SK07	139	图 172 7-8 区 SE01 (1)	177
图 127 7-2 区 SK11	139	图 173 7-8 区 SE01 (2)	178
图 128 7-2 区 SK12	139	图 174 7-8 区 SE01 (3)	179
图 129 7-2 区 SK13 • 7-2 区 SX03	140	图 175 SD0201 • SD0202 • SD0212	181
图 130 7-7 区 SK01	142	图 176 SD0203 • SD0204	182
图 131 7-7 区 SK03 • 7-7 区 SK04	142	图 177 SD0206 • SD0207	183
图 132 7-7 区 SK05	143	图 178 SD0208	183
图 133 7-7 区 SK06 • 7-7 区 SK08	143	图 179 SD0213 • SD0214 • SD0215	185
图 134 7-7 区 SK02	144	图 180 SD0217	186

図 181 SD0220	187	図 225 SD23 (4)	229
図 182 SD0701・SD0702	188	図 226 SD23 (5)	230
図 183 SD0705・SD0709	189	図 227 SD0704 (1)	232
図 184 SD0711	190	図 228 SD0704 (2)	233
図 185 SD0713・SD0715	191	図 229 SD0704 (3)	234
図 186 SD0716	191	図 230 SD0704 (4)	235
図 187 SD0719・SD0720 (1)	192	図 231 SD0707	236
図 188 SD0719・SD0720 (2)	193	図 232 SD03・SD19	236
図 189 SD0719・SD0720 (3)	194	図 233 SD03	237
図 190 SD0801	194	図 234 SD19	238
図 191 SD0802・SD0805	195	図 235 SD0717	239
図 192 SD0803	196	図 236 SD06 (1)	240
図 193 SD0810	196	図 237 SD06 (2)	241
図 194 SD0817・SD0819 (1)	197	図 238 SD06 (3)	242
図 195 SD0817・SD0819 (2)	198	図 239 SD06 (4)	243
図 196 SD0817・SD0819 (3)	200	図 240 SD06 (5)	244
図 197 SD0820	200	図 241 SD06 (6)	245
図 198 SD0808・SD0809・SD0818	201	図 242 SD06 (7)	246
図 199 SD1302・SD1315	202	図 243 SD18	247
図 200 SD1304	202	図 244 SD08	248
図 201 SD1410 (1)	204	図 245 SD34 (1)	249
図 202 SD1410 (2)	205	図 246 SD34 (2)	250
図 203 SD1427・SD1429	205	図 247 SD34 (3)	251
図 204 SD1433・SD1440 (1)	206	図 248 SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816 (1)	
図 205 SD1433・SD1440 (2)	207		252
図 206 SD1435	208	図 249 SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816 (2)	
図 207 SD1436	209		253
図 208 SD1438	210	図 250 SR01 (1)	254
図 209 SD1423～SD1426・SD1430～SD1432	211	図 251 SR01 (2)	255
図 210 SX1409	212	図 252 SR01 (3)	256
図 211 SD06・SD0807・SD23の上部堆積層 (1)	214	図 253 SR01 (4)	257
図 212 SD06・SD0807・SD23の上部堆積層 (2)	215	図 254 SR01 (5)	258
図 213 SD06・SD0807・SD23の上部堆積層 (3)	216	図 255 SR01 (6)	259
図 214 SD06・SD0807・SD23の上部堆積層 (4)	217	図 256 SR01 (7)	260
図 215 SD06・SD0807・SD23の上部堆積層 (5)	218	図 257 SR01 (8)	261
図 216 SD03・SD06・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・ SD0704・SD0707・SD0717・SD0807	221	図 258 SR01 (9)	262
図 217 SD02・SD06・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・ SD0704・SD0707	222	図 259 SR01 (10)	263
図 218 SD03・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・ SD0704・SD0707・SD0717・SD0807	223	図 260 SR01 (11)	264
図 219 SD06・SD23・SD0807・SX02	224	図 261 SR01 (12)	265
図 220 SD06・SD23 (7-8区南東部)	224	図 262 SR01 (13)	266
図 221 SD06・SD23	225	図 263 SR01 (14)	267
図 222 SD23 (1)	226	図 264 SR01 (15)	268
図 223 SD23 (2)	227	図 265 SR01 (16)	269
図 224 SD23 (3)	228	図 266 SR01 (17)	270
		図 267 SR01 (18)	271
		図 268 SR01 (19)	272
		図 269 SR01 (20)	273

図 270 SRO1 (21)	274	図 292 弥生時代中期後半から後期初頭の遺構	36
図 271 7-2 区遺構に伴わない遺物	274	図 293 弥生時代後期前半から中葉の遺構	37
図 272 7-2 区・7-7 区遺構に伴わない遺物	275	図 294 弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺構	38
図 273 7-7 区遺構に伴わない遺物	276	図 295 6 世紀の遺構	39
図 274 7-8 区・7-9 区遺構に伴わない遺物 (1)	277	図 296 6 世紀末から 7 世紀中葉の遺構	40
図 275 7-8 区・7-9 区遺構に伴わない遺物 (2)	278	図 297 8 世紀の遺構	41
図 276 7-13 区・7-14 区遺構に伴わない遺物	279	図 298 9 ~ 11 世紀の遺構	42
第二分冊		図 299 12 ~ 15 世紀の遺構	43
図 277 旧練兵場遺跡出土の動物遺存体 (1)	12	図 300 建物を描いた絵画土器 (1673)	45
図 278 旧練兵場遺跡出土の動物遺存体 (2)	13	図 301 旧練兵場遺跡 (第 28 次調査) の絵画土器・記号土器 (1)	46
図 279 旧練兵場遺跡出土の動物遺存体 (3)	14		48
図 280 旧練兵場遺跡出土の動物遺存体 (4)	15	図 302 旧練兵場遺跡 (第 28 次調査) の絵画土器・記号土器 (2)	49
図 281 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (1)	19		49
図 282 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (2)	20	図 303 建物を描いた絵画土器 (1)	50
図 283 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (3)	21	図 304 建物を描いた絵画土器 (2)	51
図 284 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (4)	22	図 305 建物を描いた絵画土器 (3)	52
図 285 赤色顔料の生物顕微鏡写真 (1)	23	図 306 1 間 × 1 間の掘立柱建物と絵画土器 (建物) 出土地点	
図 286 赤色顔料の生物顕微鏡写真 (2)	24		53
図 287 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (1)	26	図 307 赤色顔料が付着する石器	67
図 288 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (2)	27	図 308 水銀朱が付着する遺物の出土地点	69
図 289 赤色顔料の生物顕微鏡写真	28	付図 1 旧練兵場遺跡 V 遺構平面図 (S=1/100)	
図 290 蛍光 X 線分析対象玉類	31	付図 2 旧練兵場遺跡 V 遺構平面図 (S=1/200)	
図 291 弥生時代中期以前の遺構	35		

表 目 次

第一分冊		表 11 絵画土器・記号土器一覧	44
表 1 発掘調査体制一覧表	1	表 12 掘立柱建物の規模	54
表 2 整理調査体制一覧表	3	表 13 絵画土器 (建物) 一覧表	55
表 3 既往の調査一覧	7	表 14 旧練兵場遺跡の掘立柱建物 (弥生時代中期後半)	59
第二分冊		表 15 香川県内の掘立柱建物 (弥生時代)	62
表 4 動物遺存体一覧	4	表 16 水銀朱が付着する遺物	68
表 5 香川県域出土動物遺存体一覧 (魚類・哺乳類など)	10	表 17 土器観察表	70
表 6 香川県域出土動物遺存体一覧 (貝類)	11	表 18 瓦観察表	131
表 7 分析結果一覧	18	表 19 石器観察表	132
表 8 分析結果一覧	25	表 20 金属器観察表	135
表 9 分析対象一覧	29	表 21 玉類観察表	136
表 10 分析結果一覧	30	表 22 木器観察表	138

写 真 図 版 目 次

第一分冊		1543	
巻頭図版 1 1673		巻頭図版 4 7-2 区全景 北から	
巻頭図版 2 1081・1183・1104・1169・1097・1166・1096・ 1141・1105・1140・1143・1188・1142		7-2 区全景 北西から	
巻頭図版 3 1841・1848・1941・1651・398・2275・1407・ 1523・1525・1526・1633・1652・1524・1637・ 1545・1636・1544・1634・1635・1537・1653・		巻頭図版 5 9・13 区全景 北より	
		巻頭図版 6 7-8 区 SX02 遺物出土状況 南西から	
		SRO1 (7-13 区・7-14 区部分) 北から	

第二分冊

図版 1 7-2・8・9・13・14 区
図版 2 7-2 区全景 西から
7-2 区全景 東から
図版 3 7-2 区北西部 北から
7-2 区西部 西から
図版 4 7-2 区全景 東から
7-2 区北東部 北西から
図版 5 7-2 区 SH05 西から
7-2 区南部中央付近 東から
図版 6 7-2 区 SH13・SH15・SH16 北東から
7-2 区 SH13 北東から
7-2 区 SH16 南から
図版 7 7-2 区 SH16・SH17 南から
7-2 区 SH17 南から
7-2 区 SH22 東から
図版 8 7-2 区 SH19・SH20 西から
7-2 区 SB08 西から
7-2 区 SB10 北西から
図版 9 7-2 区 SB09 西から
7-2 区 SB09-SP599 断面 南から
7-2 区 SB12-SX01 断面 南から
図版 10 7-7 区第1調査面全景 東から
7-7 区全景 南から
図版 11 7-7 区 SH01 土器集積状況 南から
7-7 区 SH01 南東から
7-7 区 SB03 南から
図版 12 7-8 区全景 南東から
7-8 区全景 北西から
図版 13 7-8 区 SH01 南東から
7-8 区 SR01 西から
7-8 区 SE01 南から
図版 14 7-8 区 SK07 南西から
7-8 区 SP268 断面 南から
7-8 区 SD17・SD19 東から
図版 15 7-8 区 SX02 南から
7-8 区 SR01 南東から
図版 16 7-9 区西部 北から
7-9・12・13 区全景 北から

図版 17 7-9 区 SH01 南から
7-9 区 SH02 南から
7-9 区 SH03 南から
図版 18 7-9 区 SH08 西から
7-9 区 SH09 西から
7-9 区 SB01 南から
図版 19 7-9 区 SH09・SH10 北西から
7-13 区全景 北東から
図版 20 7-12・14 区全景 北西から
7-14 区全景 北西から
図版 21 1966・2163・2171・2100・2095・2160・2117
図版 22 314・1214・1212・1216・418・1220
図版 23 1341・2172・1328・674
図版 24 308・1694・402・1644・401・858・593・310・1207・80
•1337・799・1644
図版 25 1399・375・1075・2254・2255・1818・2227・553・1957
•364・585・359・1349・602
図版 26 1349・2139・2163・1966
図版 27 1081・1104・1183・1166・1048・1510・1113・1169
図版 28 78・220・239・242・272・240・95・265・161
図版 29 304・289・333・341・305・343
図版 30 362・399・401・1449・990・1475・1892
図版 31 745・746・583・581・582・766・823・828・835
図版 32 1071・1076・1077・1078・1080・1090
図版 33 1097・1105・1109・1121・1142・1140・1143・1148
図版 34 1147・1150・1172・1186・1188・1170・1828・1292
図版 35 1159・1164・1161・1167・1160・1165
図版 36 1964・1967・1971・1623・2026・2069・2098・2071・
2303
図版 37 1838・1556・2239・1572・1255
図版 38 2004・1988・1960・1959・1961・2003・2002・2128・
2085・1958・2125・2086・2087・2127・2126・2155
図版 39 1533・1643・1575・1576・1577・1590・1528・1574・
1573・1532・1589・1659・1529・1530・1531・1551・
1563・1591・1642
図版 40 555・673・1959・2318・2283・2155・149・217・269・
556・1527・1934・1439・378・677

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査の経過

本書では「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 旧練兵場遺跡IV」(香川県教育委員会ほか 2014.3)で一部を報告した第28次調査のうち2区・7区・8区・9区・13区・14区(本書では『旧練兵場遺跡IV』と同様7.2区・7.7区と表記する)を報告する。

第28次調査は平成22年4月1日から平成23年3月31日まで実施した。発掘調査は4月1日から10月31日までは2班体制、11月からは1班が合流し、3班体制で実施した。調査面積は3,480m²で、1~14区の14調査区に分けて調査を行った。平成22年4月からは1区・2区、7月からは3区・4区・8区、10月からは6区、11月からは5区・12区・13区、12月からは9区・10区・11区、平成23年1月からは7区・14区の調査を実施した。

調査にあたっては日本測地系を使用し、基準杭を打設した。現地での平面測量は基準杭をもとにトータルステーションを使用し、「遺構くんCubic」(株式会社CUBIC)による図化を行った。また、断面図と一部の遺構の平面図は手描きした。遺構の写真撮影はデジタルカメラ、6×7cm判フィルムカメラ、4×5in判フィルムカメラを使用し、クレーンを使用した空中写真の撮影を行った。

旧練兵場遺跡第28次調査は善通寺病院統合事業に伴う7回目の発掘調査であることから、NZR7という略号を使用した。遺構名は調査区・遺構の種類ごとに1から順に番号を付けた。出土遺物は遺構・層位・出土年月日ごとに袋または整理用コンテナに収納し、遺物登録番号を付け、台帳を作成した。

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括	総括
課長 石垣 恵一	所長 大山 真充
主幹 藤好 史郎	次長 深谷 右
総務・生涯学習推進グループ	総務課
課長補佐 亀山 隆	課長 深谷 右(兼務)
副主幹 香西 としみ	副主幹 林 文夫
主任主事 西本 優子	主任 福井 良子
文化財グループ	主任 古市 和子
課長補佐 藤好 史郎(兼務)	調査課
主任文化財専門員 森下 英治	課長 西岡 達哉
文化財専門員 小野 秀幸	主任文化財専門員 森 格也
	主任文化財専門員 木下 晴一
	文化財専門員 森下 友子
	文化財専門員 藏本 晋司
	文化財専門員 佐藤 竜馬
	文化財専門員 松本 和彦
	調査技術員 木全加珠美
	調査技術員 白木 亨
	調査技術員 東潤 愛

表1 発掘調査体制一覧表

第2節 整理作業の経過

整理作業は平成24年4月1日から平成26年3月31日まで実施した。第28次調査で出土した遺物は28リットル入り整理用コンテナ1200箱程度であるが、本報告書で報告した調査区の遺物はこのうち650箱程度であった。平成24年度は遺物接合と実測対象遺物の抽出を行い、土器実測を業者に委託した。平成25年は土器実測（業者委託）、石器・金属器などの実測、遺構図面の整理、報告書編集作業を行い、遺物・図面を収納した。また、金属器のエックス線撮影を業者に委託し、一部の金属器の保存処理を委託した。そのほか、赤色顔料の分析・玉類の材質分析を委託した。

発掘調査時に付けた遺構名は基本的にはそのまま報告書に掲載したが、溝や河川については他調査区で検出された遺構との関連や連続などを考慮して、報告するにあたり、名称を付け替えた。溝や河川は複数の調査区にまたがって検出されている場合が多く、同一遺構に複数の遺構名が付いている場合もあった。これらの遺構については複数のうちの1遺構名を採用し、調査区名を付けずに報告遺構名とした。その他の溝については検出された調査区名を調査時の遺構番号の前に付けて、報告遺構名とした。例えば13区のSD01はSD1301とした。このように遺構名を付け替えたものに関してはその旨を本文中に明記した。

また、「旧練兵場遺跡IV」では第28次調査（NZR7）の調査区の一部と第27次調査（NZR6）とを報告したため、第27次調査（NZR6）の調査区の前に6を付け、第28次調査（NZR7）の調査区の前に7を付け、6-1区、7-1区のように表記した。本報告書では第28次調査だけの報告であるが、「旧練兵場遺跡IV」にならい、調査区の前に7を付け、7-8区というように調査区を表記する。

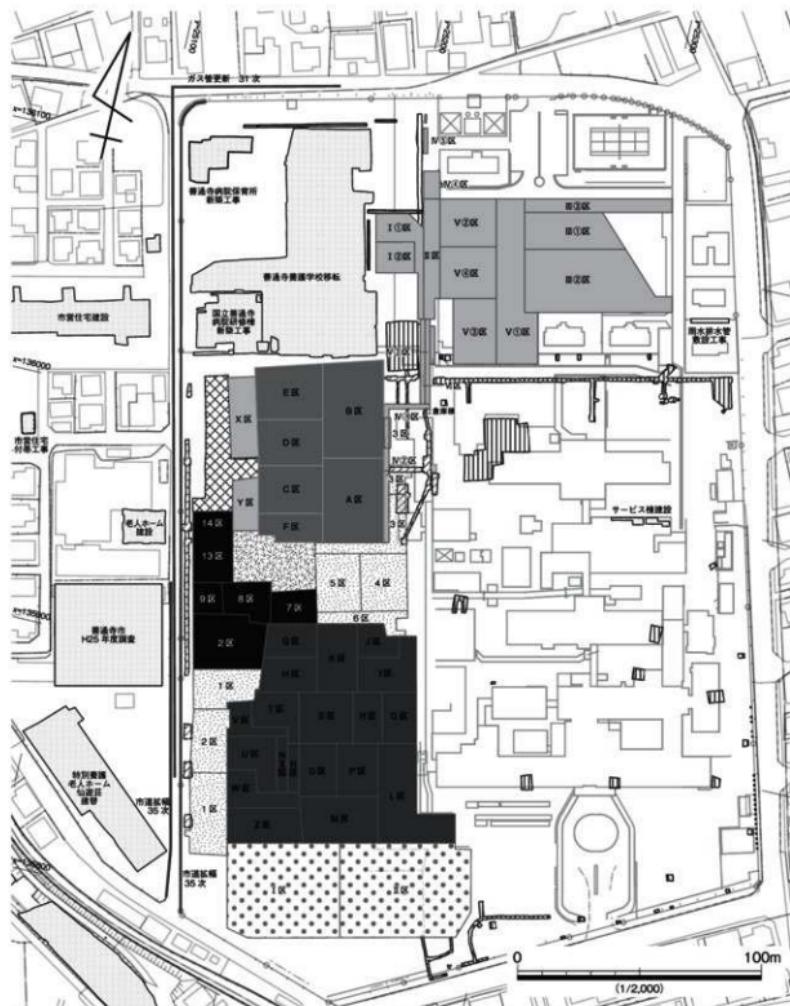
平成24年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	炭井 宏秋	所長	藤好 史郎
副課長	木虎 淳	次長	真鍋 正彦
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
副主幹	松下 由美子	課長	真鍋 正彦（兼務）
主任主事	丸山 千晶	副主幹	林 文夫
文化財グループ		主任	宮武 ふみ代
課長補佐	西岡 達哉	主任	中川 美江
主任文化財専門員	森下 英治	資料普及課	
文化財専門員	松本 和彦	課長	森 格也
		主任文化財専門員	木下 晴一
		文化財専門員	森下 友子
		嘱託	市川 孝子
			伊藤 真紀
			木下 美千代
			土居 乃里子
			徳永 貴美
			永森 彩佳
			森 后代
			矢口 敦子

平成 25 年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	増田 宏	所長	真鍋 昌宏
副課長	木虎 淳	次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課	
副主幹	松下由美子	課長	前田 和也(兼務)
主任主事	丸山 千晶	主任	宮武 ふみ代
文化財グループ		主任	侯野 英二
課長補佐	片桐 孝浩	主任	中川 美江
主任文化財専門員	山下 平重	資料普及課	
文化財専門員	松本 和彦	課長	森 格也
		主任文化財専門員	木下 晴一
		文化財専門員	森下 友子
		嘱託	市川 孝子
			加藤 恵子
			川井 佐織
			香西 栄理
			高橋 千恵
			徳永 貴美
			森 后代
			森國 愛子

表2 整理調査体制一覧表



「旧練兵場遺跡IV」及び本書では編集の都合上
第27次調査(略号NZR6)の調査区名は1区を6-1区、
第28次調査(略号NZR7)の調査区名は1区を7-1区と表記する

図1 調査区割図

第2章 遺跡の立地と既往調査の概要

遺跡周辺の地理的環境、歴史的環境については、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅱ』、『旧練兵場遺跡Ⅲ』を参照されたい。

これまでに調査が行われた地点、概要、文献一覧を図2・図3、表3に示す。



図2 旧練兵場遺跡の位置 (1/25,000)

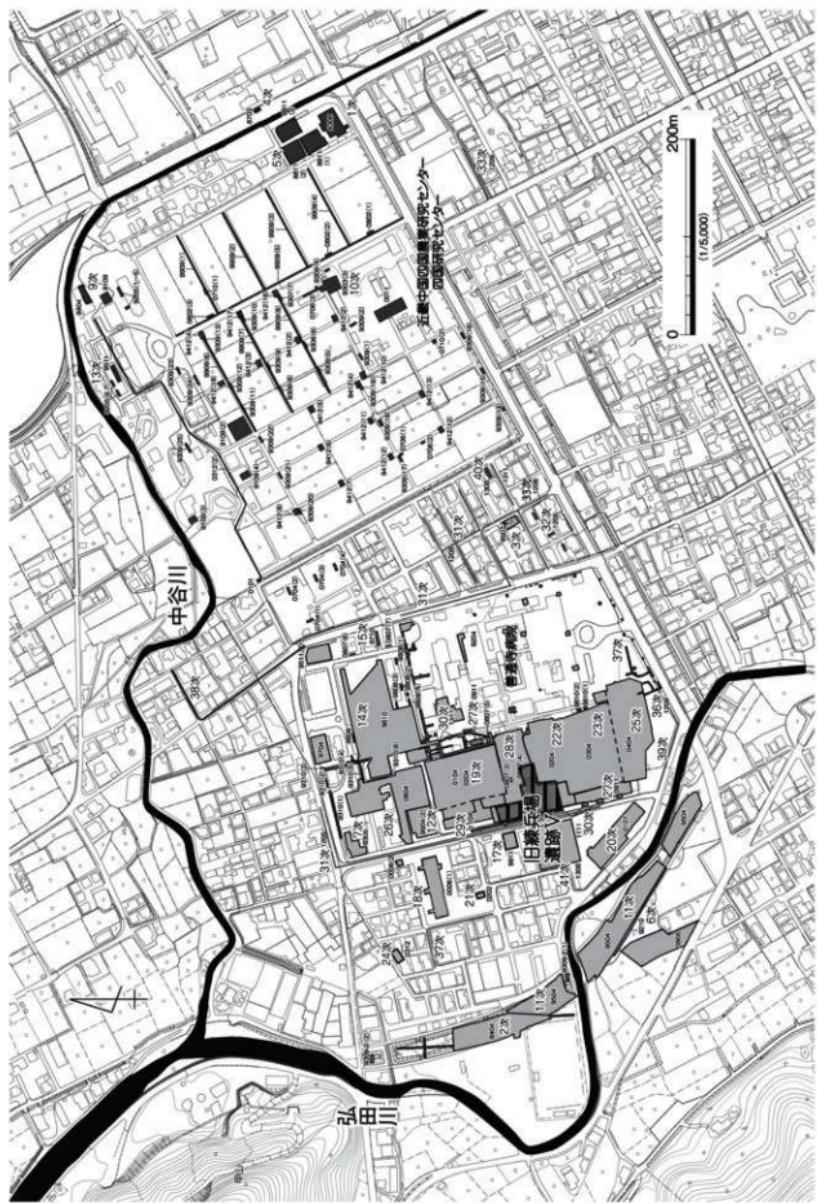


図3 既住の調査区

表3 既往の調査一覧

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1200	弥生終末期の堅穴住居1棟、古代末～中世の溝を検出	1.10	仲村庵寺
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	普通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の堅穴住居38棟、鏡片・銅鏡・ガラス玉出土	2.11	後ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	普通寺市教委	135	弥生後期後半の箱式石棺・土器棺墓を確認	3.11	仙進
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期～終末期の堅穴住居1棟・獨立柱建物を検出	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の堅穴住居、古墳時代の骨、弥生～古墳時代の土器等を確認	4.12	仲村庵寺
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の堅穴住居、弥生中期の獨立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代堅穴住居4棟、土坑、竹穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	普通寺病院サービス建設	県教委	41	古墳時代後期の堅穴住居、平安時代の骨、弥生～古墳時代の土器等を確認	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代堅穴住居多数、古墳群中から小鋼鏃片が出土。	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	普通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居14棟を検出	15.28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全城で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309.2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委		弘田川の堆積層を確認	28	
9310	h5		工事立会	普通寺病院水道管埋設工事	県教委	100	弥生前中期の貯藏穴2基、弥生後期の堅穴住居4棟を検出	28	
9310-2	h5		工事立会	普通寺病院下水道管埋設工事	県教委	120	弥生時代後期の堅穴住居5棟、中世の遺構を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	普通寺病院看護学校整備	県教委	150	弥生中期～終末期の堅穴住居9棟、古墳時代の獨立柱建物を確認	15.28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生中期の獨立柱建物1棟、弥生後期の堅穴住居2棟、古墳時代後期の堅穴住居1棟を確認	16.29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場バイオライン設置工事	県教委	100	全城で弥生～中世の遺構を確認	16.29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の堅穴住居62棟、弥生中期の獨立株建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	普通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～終末期の堅穴住居群、後期初頭の獨立柱建物群を確認	17.31	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タンパク機能解析実験棟建設	県教委	300	弥生後期の堅穴住居2棟、弥生中期の獨立柱建物1棟、古墳時代後期の堅穴1条を確認。	17.31	
9511-2	h7		工事立会	普通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の堅穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	普通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の堅穴住居・溝跡、条里型地界界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	普通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	普通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	普通寺病院看護学校付帯工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	20	
9808	h10		確認調査	確認調査	普通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	後ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水設備工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の堅穴住居を検出	21	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	普通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21.42	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	普通寺市教委	1068	弥生後期堅穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3250	弥生中期～後期の堅穴住居・獨立柱建物多数、旧河道検出	35.39	
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙霞庄建設	普通寺市教委	1430		7.23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	普通寺市教委	46	弥生後期の堅穴住居3棟を確認	8	
0206	h14		工事立会	普通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の堅穴住居・獨立柱建物・古墳時代後期の堅穴住居群を出土。鏡片出土。	24.44	
0504	h15	23	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の堅穴住居72棟をはじめ、獨立柱建物等を多数確認。扁平柱式銅鏡片、船形内行花文鏡片出土。	25.44	

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	善通寺市教委	70	弥生後期の堅穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の堅穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の堅穴住居、弥生中期の掘立柱建物群を検出。扁平板式銅鐸片、船形内行花文鏡片が出土	25,41,44	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備修理	県教委	6	弥生後期堅穴住居 1 棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	普通寺農業学校移転整備事業	県教委	3200	弥生中期～終末期の堅穴住居多数、豪華型埴輪に合致する大溝を検出。鏡片が出土。	51,52	
0905	h21		確認調査	個人住宅建設	市教委	107.5	弥生後期・古墳後期の包含層検出	43	弘田川西岸
0911	h21	27	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	840	弥生後期～終末期、古墳後期の堅穴住居、掘立柱建物を検出	47	
1004	h22	28	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3480	弥生中期～終末期、古墳後期、古代の堅穴住居、掘立柱建物、溝を検出	47	一部本書
1104	h23	29	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	907	弥生中期～古墳前期の旧河道、古代道路状遺構を検出	46	「旧練兵場遺跡 VI」に掲載予定
1111	h23	30	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	413	飛鳥時代の大型柱建物を検出	46	「旧練兵場遺跡 VI」に掲載予定
1205	h24	31	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1205	h24	32	本発掘調査	病院駐車場設置	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1206	h24	33	本発掘調査	ガス管新設	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑		
1209	h24	34	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1207	h24	35	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑		
1209	h24	36	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	40	中世の溝を検出	49	「旧練兵場遺跡 VI」に掲載予定
1304	h25	37	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	1009	弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	50	
1304	h25	38	工事立会	ガス管更新	善通寺市教委				
1307	h25	39	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委				
1308	h25	40	確認調査	集会場建設	善通寺市教委				
1308	h25	41	本発掘調査	老人ホーム建設	善通寺市教委				
1311	h25		工事立会	下水道建設	善通寺市教委				

参考文献

- 尽誠學園史学会 1959 「国立病院前庭道路発掘調査概報」『西譜史談』1
- 六草恵一 1956 「讃岐终生式土器集成図録」『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会
- 矢原高幸 1973 『善通寺市の中古文化』善通寺市
1. 善通寺市教育委員会「仲村廃寺発掘調査報告(旧練兵場遺跡内)」1984.3
2. 善通寺市教育委員会「後ノ宗遺跡・弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告~」1985.3
3. 善通寺市教育委員会「仙遊道跡発掘調査報告書・旧練兵場遺跡仙遊I地区」1986.3
4. 善通寺市教育委員会「仲村廃寺・旧練兵場道路における埋蔵文化財確認調査報告書~」1989.3
5. 善通寺市教育委員会「山南道路・後ノ宗遺跡発掘調査報告書~善通寺市内道路発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5~」1999.3
6. 善通寺市教育委員会「旧練兵場遺跡 市営西仙遊住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001.1
7. 善通寺市教育委員会「旧練兵場遺跡 特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2002.3
8. 善通寺市教育委員会「善通寺市内道路発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 旧練兵場道路」2002.3
9. 善通寺市教育委員会「善通寺市内道路発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 旧練兵場道路」2004.3
10. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」1984.12
11. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度~昭和62年度」1988.3
12. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度」1989.3
13. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度」1992.3
14. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度」1993.3
15. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度」1994.3
16. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度」1995.3
17. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度」1996.3
18. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度」1997.3
19. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度」1999.2
20. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度」2000.3
21. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度」2001.3
22. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度」2002.3
23. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成13年度」2003.3
24. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度」2003.11
25. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成15年度」2005.3
26. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成16年度」2006.1
27. 香川県教育委員会「香川県文化財年報 平成19年度」2009.2
28. 香川県教育委員会「旧練兵場道路・平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告」J 1994.3
29. 香川県教育委員会「旧練兵場道路II・平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告」J 1995.3
30. 香川県教育委員会「旧練兵場道路III・平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告」J 1996.3
31. 香川県教育委員会「旧練兵場道路IV・平成7年度四国農業試験場内発掘調査報告」J 1996.3
32. 香川県教育委員会「旧練兵場道路V・平成9年度国立善通寺病院内発掘調査報告」J 1998.3
33. 香川県教育委員会「広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 弘田川西岸遺跡」2008.1
34. 香川県教育委員会ほか「善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場道路I」2009.2
35. 財团法人香川県埋蔵文化財調査センター「国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場道路発掘調査概報1-平成13年度・平成14年度上半期の発掘成果概要報告」J 2003.6
36. 财团法人香川県埋蔵文化財調査センター「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度」1997.5
37. 财团法人香川県埋蔵文化財調査センター「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成9年度」1998.6
38. 财团法人香川県埋蔵文化財調査センター「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成13年度」2002.6
39. 财团法人香川県埋蔵文化財調査センター「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成14年度」2003.6
40. 财团法人香川県埋蔵文化財調査センター「財团法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成15年度」2005.3

41. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 16 年度』2006.10
42. 篠川徹一ほか「平成 11 年度旧練兵場遺跡の調査概要について－普通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査－」『普通寺市文化財保護協会報第 29 号』普通寺市文化財保護協会 2010.3
43. 香川県教育委員会『香川県文化財年報 平成 21 年度』2011.2
44. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 2 番 旧練兵場遺跡Ⅱ』2011.2
45. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 3 番 旧練兵場遺跡Ⅲ』2013.2
46. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 23 年度』2012.9
47. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 番 旧練兵場遺跡Ⅳ』2014.3
48. 普通寺市教育委員会『普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 14』2014.3
49. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 24 年度』2013.9
50. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 25 年度』2014.10
51. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 20 年度』2009.8
52. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 21 年度』2010.9

第3章 調査の成果

第1節 層序

旧練兵場遺跡の基本層序については、既刊の報告書に詳述されており、本書で報告する調査区の層序も基本的に同じである。『旧練兵場遺跡Ⅲ』は本書に報告する調査区の南東部に隣接する調査区の報告書であるが、ここに掲載された基本層序は、以下のとおりである。

I層 現代の盛土及び擾乱土

II層 灰色シルト（中世から近世の耕作土・遺構埋没土）

III層 黒褐色粘土シルト～粘土（弥生時代中期から古代の堆積土・遺構埋没土）

IV-1層 黄灰色細粒砂～シルト

IV-2層 黄褐色粗砂～シルト

V層 砂礫

図5は本書に掲載する調査区の土層堆積図で、図4は土層堆積図の作成場所を示す図である。A-A'は調査区西端の西壁の土層図で、南北の長さは140mである。この土層図の南半分は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告した6-1区・6-2区（第27次調査）にあたる。最南の6-1区では地表面の標高は24.3mで、北に向かうに従い低くなり、6-2区の北端では24.0m、7-14区（第28次調査）の北端では23.5mとなり、6-1区から7-14区に至る140mで0.8m低くなっている。B-B'はA-A'ラインの中央やや北寄りにあたる7-2区の北端から7-8区・7-7区・7-6区にかけての東西の土層断面図である。長さ80mほどの土層断面図であるが、この図をみると現地表面の標高は東西では大差ないことがわかる。また、C-C'は7-2区・7-8区・7-12区の東壁土層断面図である。

いずれの調査区でも現地表面の下は盛土・擾乱土が分厚く堆積し、大部分の調査区では厚さ0.2～1.0mの盛土・擾乱土（I層）がみられたが、病院の建物基礎の掘削による擾乱土の堆積が現地表下2m近くまで及ぶ箇所もあった。盛土・擾乱土の下には中世から近世の耕作土である灰色シルト層（II層）が堆積するが、上部の擾乱が深く及ぶ調査区もあり、灰色シルト層（II層）が存在するのは、本書報告の調査区の中では7-2区・7-7区・7-8区だけであった。中世から近世の耕作土である灰色シルト（II層）の上面は削平を受けており、本来の高さは不明であるため、下面の標高を比較すると、A-A'ラインの南部の6-1区・6-2区（第27次調査）では23.4～23.6m、7-2区では23.1m、7-2区の北部に位置する7-7区・7-8区では22.8～23.0mで、灰色シルト（II層）の堆積も南から北に向かって下がることがうかがわれる。

灰色シルト（II層）の下には黒褐色粘土シルト～粘土（III層）が堆積する。本来はかなり分厚く堆積していたと思われるが、上部は後世の耕作により削平されたと考えられる。III層の堆積は弥生時代に埋没する河川SR01による凹地の堆積層及びおびただしい数の遺構の形成に伴うものと考えられるが、遺構密集度が高く、SR01の堆積層と遺構埋土の土質が近似しているため、SR01の凹地に堆積した土層の堆積時期と遺構の形成時期の関係について十分な検証ができなかった。

調査はI・II層を機械掘削し、III層上面・IV-1層上面で精査を行い、遺構を検出した。さらに、IV-1層上部を掘り下げ、精査を行い、遺構の有無を再確認した。

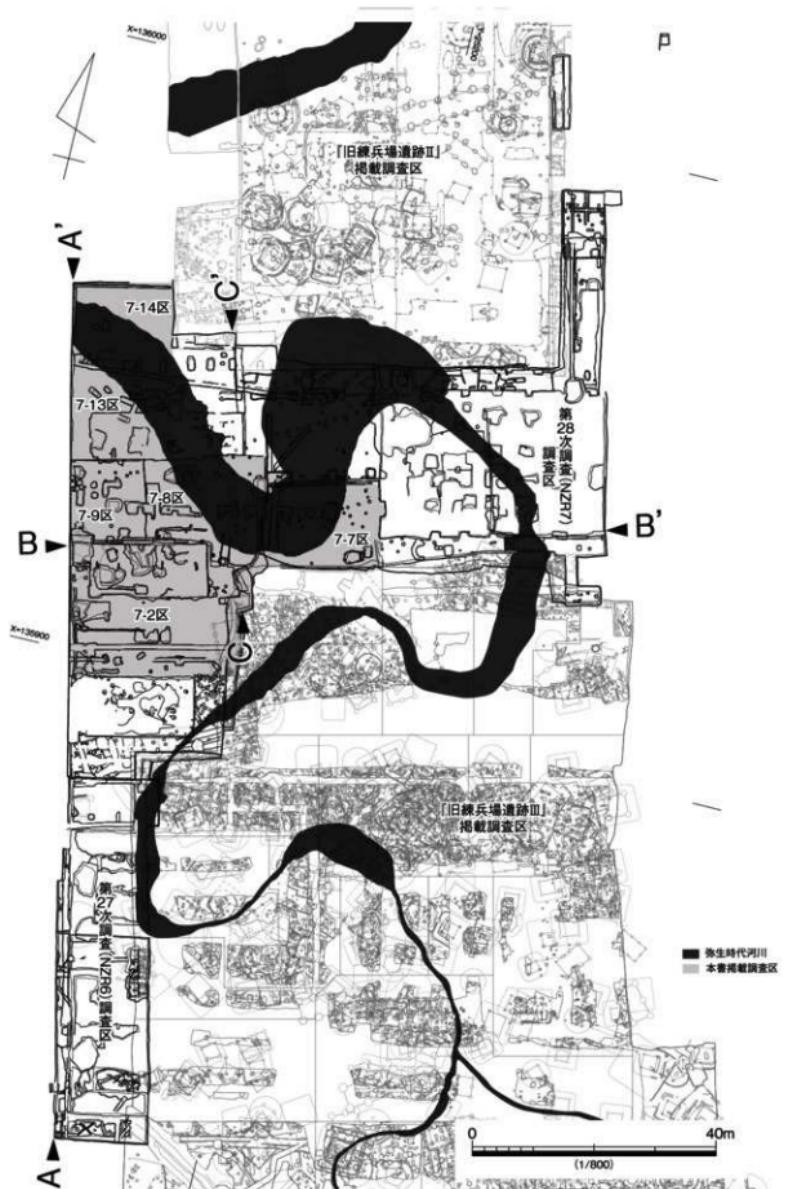


図4 土層断面図作成位置図

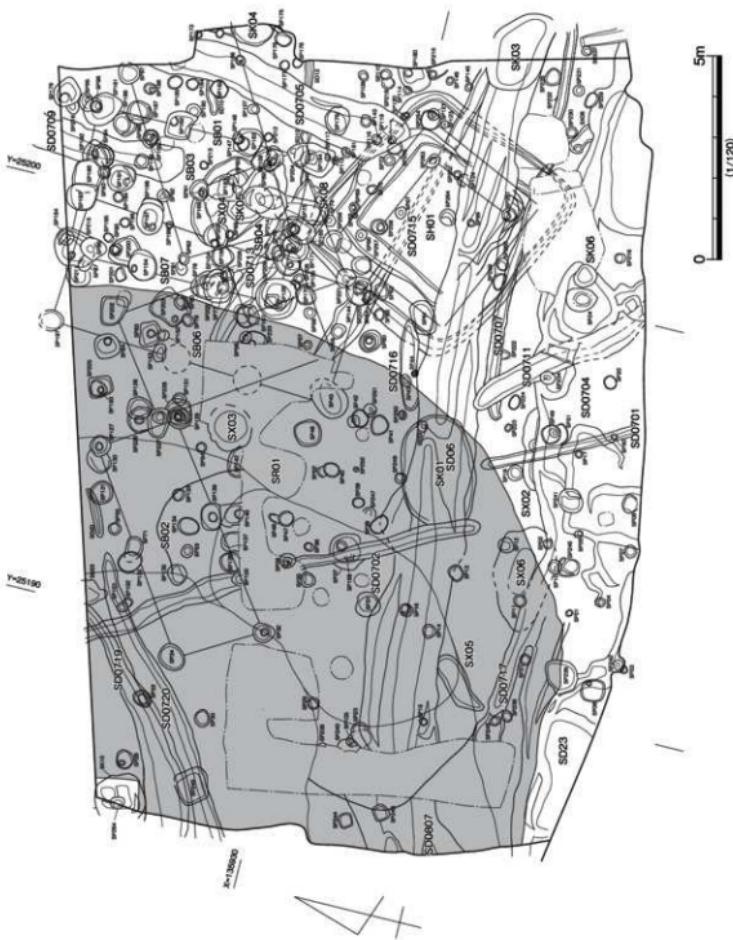


図8-7 江東区遺構平面図



図 9 7-9 区遺構平面図

第2節 遺構・遺物

1. 壑穴建物

7-2区 SH01 (図12)

7-2区西端で検出された壠穴建物である。建物の北部と南部は配管設置のために削平され、建物の西部は調査区外に連続しているため、全体は不明である。残存部分から平面形は隅丸方形と考えられる。壁沿いには幅0.2m、深さ0.1mの壁溝がある。主柱穴は2個検出されたが、本来は4個であろう。主柱穴は径0.3~0.4m、深さ0.3mである。主柱穴の位置から壠穴建物の1辺は4.2m前後と推定される。遺物は土器・須恵器が整理箱（容量28ℓ、以下省略する）半分程度出土した。いずれも小破片である。遺物の中には弥生土器もかなり含まれていたが、須恵器蓋（2）・壺（3）は陶邑須恵器編年TK209型式に属することから、SH01は6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

7-2区 SH05 (図13)

7-2区西部で検出された壠穴建物である。北部は擾乱によって削平され、北東部は古墳時代の壠穴建物SH19、南西部はSH01と重複し、一部が削平される。また、建物の中央部を東西に古代の溝SD0201が走るため、一部が削平されるが、建物の床面には達していない。平面形は方形で、長軸4.6m、短軸4.4m

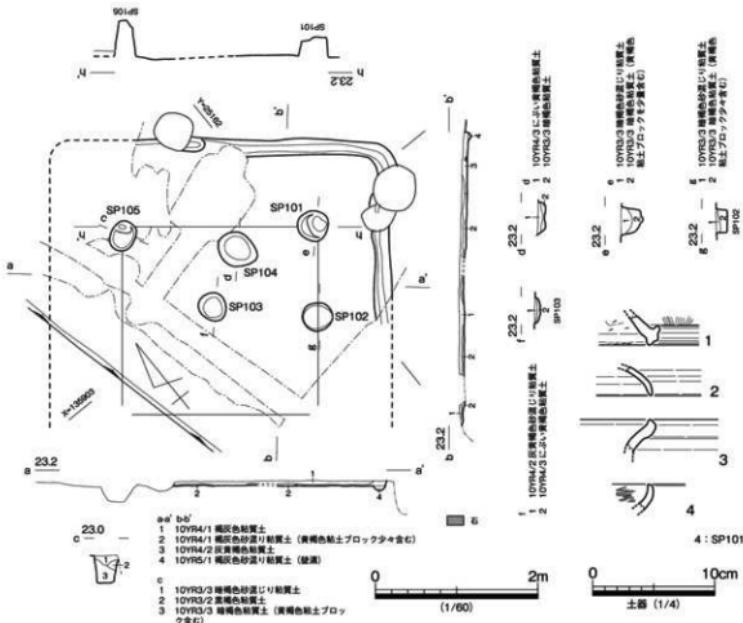


図12 7-2区 SH01

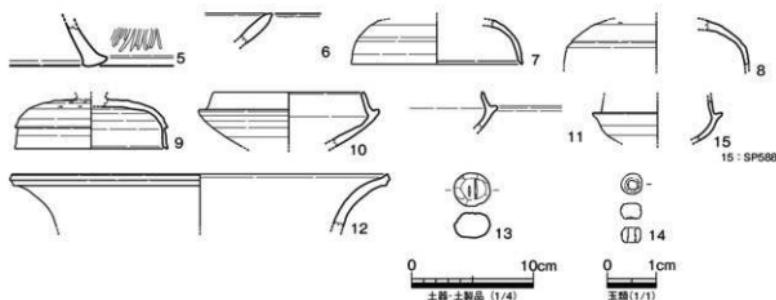
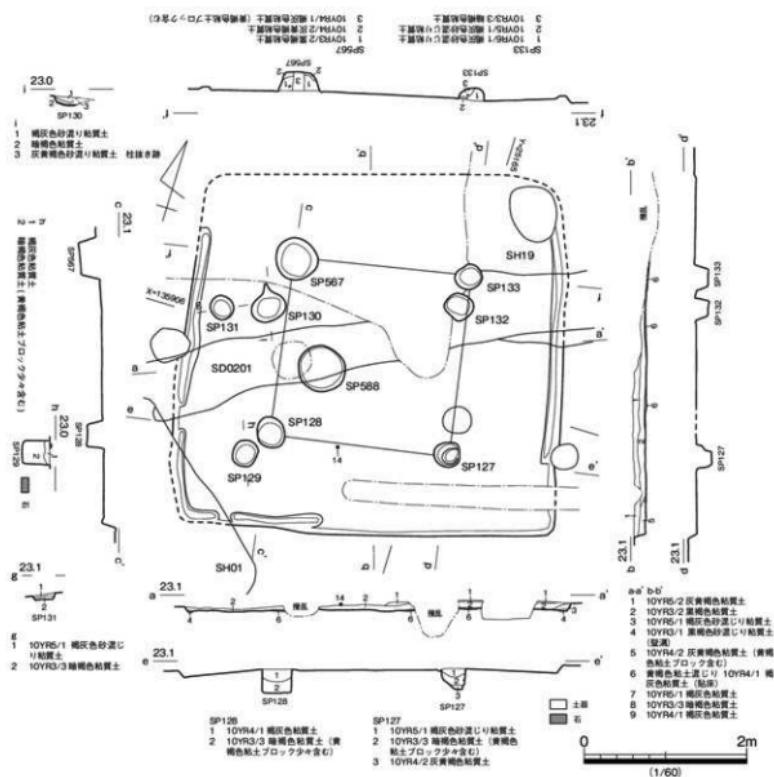


図 13 7-2 区 SH05

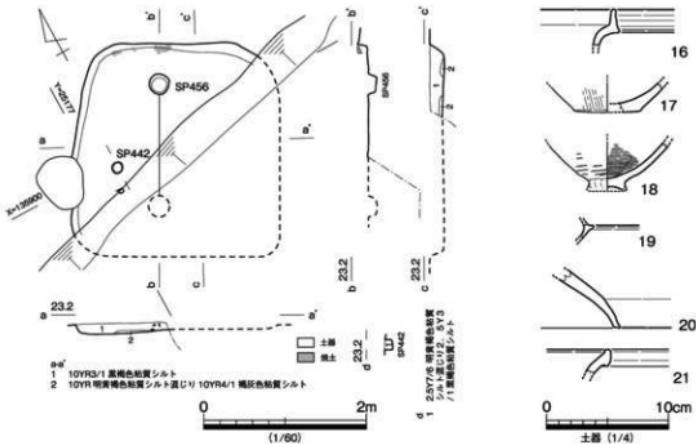


図14 7-2区SH06

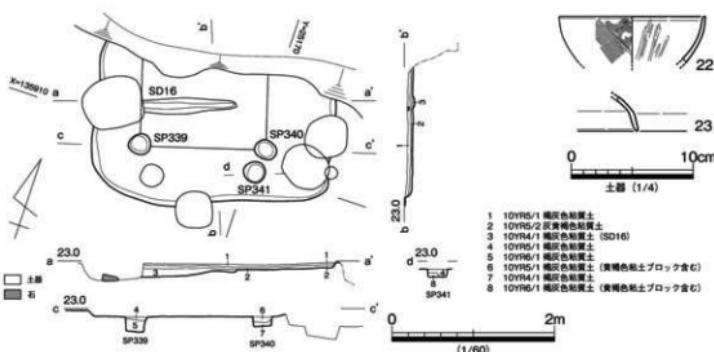
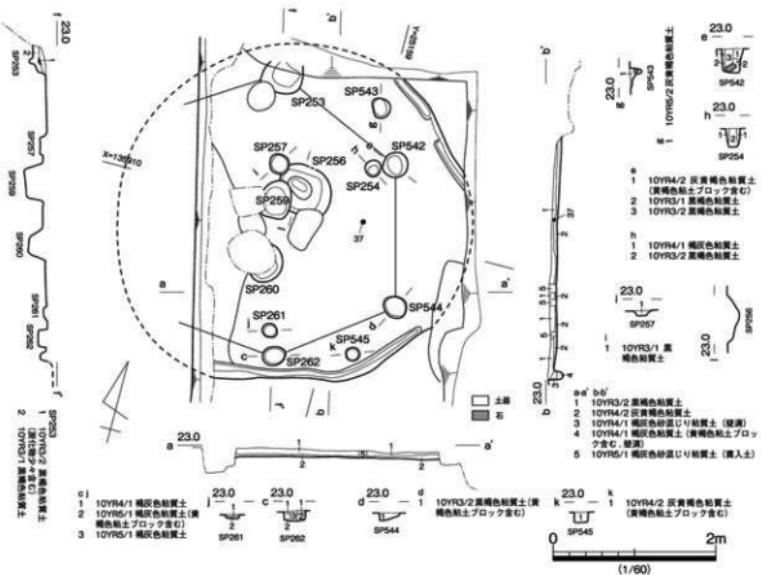


図15 7-2区SH07

と推定される。壁沿いには幅0.15m、深さ0.05mの壁溝が巡る。主柱穴は4個と考え、SP567・SP133・SP127・SP128を固化したが、SP130・SP132・SP129(いずれも深さ0.2m)の3個も別の組み合わせの主柱穴の可能性が高い。遺物は土器・須恵器が整理箱半分程度出土した。13は土製品で、14はガラス製の小玉である。遺物の中には弥生土器もかなり多く含まれていたが、土師器甕口縁(6)、須恵器蓋(7~9)・杯(10・11)・甕(12)がみられる。これらの須恵器は陶邑須恵器編年TK10型式に属することから、SH05は6世紀後葉のものと考えられる。

7-2区SH06(図14)

7-2区南端で検出された竪穴建物である。南部は現代の建物基礎によって削平される。残存する部分から平面形は隅丸方形で、一辺2.5m前後、主柱穴は2個と推定される。壁溝はみられない。建物の北



東の壁には径 10cm 前後の焼土塊が少量貼り付いていた。建物の壁土が焼けて、壁沿いに落ち込んだものであろう。遺物は整理箱半分程度出土した。弥生土器もかなり含まれるが、須恵器杯（19）・蓋（20）・甕（21）がある。19は陶邑須恵器編年 TK209 型式から TK217 型式に属することから、SH06は6世紀末から7世紀中葉のものと考えられる。

7-2 区 SH07（図 15）

7-2 区中央部で検出した竪穴建物である。北半分は現代の建物基礎によって削平される。残存する建物の南部から平面形は隅丸方形で、一辺 3.0 m 前後と推定される。主柱穴は 2 個検出されたが、本来は 4 個であろう。遺物は整理箱半分程度出土したが、小破片が多い。22 のように弥生時代の土器も少量出土したが、須恵器蓋（23）のほか須恵器片が含まれている。23は陶邑須恵器編年 TK209 型式から TK217 型式に属することから、SH07は6世紀末から7世紀中葉のものと考えられる。

7-2 区 SH08（図 16）

7-2 区北西端で検出された竪穴建物である。北部と東部は現代の建物基礎の攪乱により削平され、西部は調査区外に連続する。平成 23 年度（第 30 次調査）に西方 0.8 m の地点を調査しているが、この建物の続きは検出されておらず、SH08 の西部は第 30 次調査調査地点の東側で終結すると考えられる。SH08 は残存部分から平面形はほぼ円形で、径 4.2 m 程度と推定される。なお、建物の東端にはわずかな張り出しがある。建物内部の壁沿いには柱穴（径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m）が巡る。主柱穴と考えられる柱穴は 4 個検出されているが、本来は 6 個程度と推定される。遺物は土器・石器・鉄製品・玉類や少量の焼土などが整理箱半分程度出土した。37 はガラス製の小玉で、緑色である。38 は鉄鎌の先端である。35 は古墳時代中期から後期の土師器高杯である。35 は埋土上位から出土し、他に須恵器などの古墳時代の遺物はみられないことから、混入したものと考えられる。弥生時代中期後半古段階の土器もみられるが、弥生時代後期前半古段階から中段階の土器が数多く出土していることから、SH08 は弥生時代後期前半古段階から中段階のものと考えられる。

7-2 区 SH09（図 17）

7-2 区中央部で検出された竪穴建物である。南部は攪乱され、全体は不明である。残存部分から平面形は方形で、短軸 3.5 m、長軸 3.8 m と推定される。建物の北西部には突出部がある。突出部の東壁には焼土塊や炭化物が張り付いていたことから、竈と考えられる。焼土塊や炭化物が出土した付近からは土師器高杯（53）が口縁部を下に向けた状態で出土した。竈の支脚として使用された可能性が高い。なお、竈の天井部は確認できなかった。建物の壁沿いには 0.5 ~ 0.8 m おきに径 0.15 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m の小柱穴が検出された。壁沿いにはばく等間隔で並んでいることから、壁を支える柱を設置するための柱穴の可能性が高い。また、主柱穴は SP382 を含む 4 個と考えられるが、古代の柱穴跡や攪乱による削平のため、他の 3 個は検出されていない。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片・玉類・金属製品が整理箱半分程度出土した。55 は鉄鎌で、建物内東部の土坑 SK03 から出土した。また、滑石製白玉（58・59）とガラス製小玉（60）が建物の東壁付近で出土した。60 は緑色である。SP382 からは須恵器蓋（57）が出土した。57 は陶邑須恵器編年 TK47 型式から MT15 型式に属する。竈の支脚として使用された土師器高杯（53）もほぼ同時期であることから、SH09 は 6 世紀前葉のものと考えられる。

7-2 区 SH10（図 18）

7-2 区南部で検出された竪穴建物である。北部は古墳時代の竪穴建物 SH09、南部は SH11 によって削平される。また、中央部と北部は攪乱により削平される。残存部分から平面形は方形で、長軸 4.2 m、

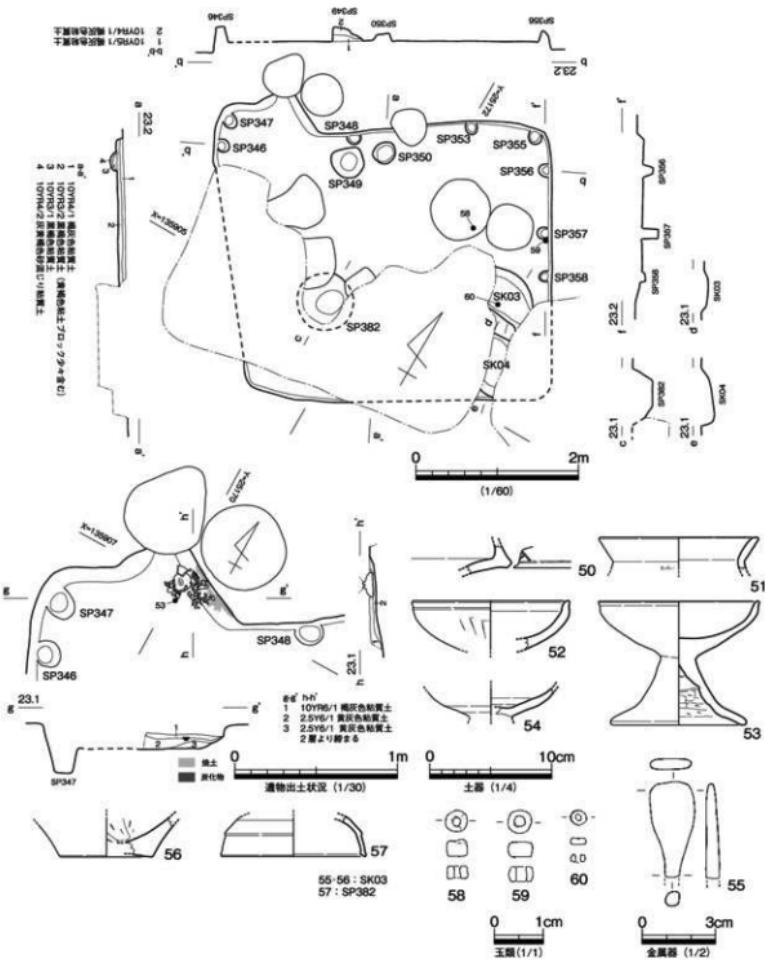


図 17 7-2 区 SH09

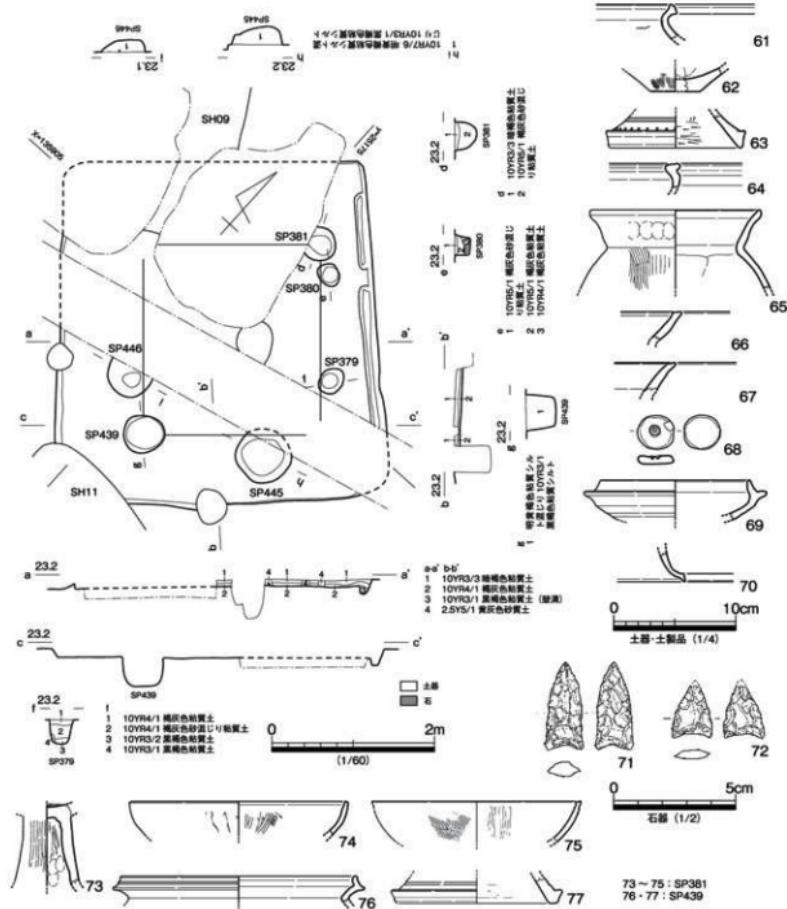


図 18 7-2 区 SH10

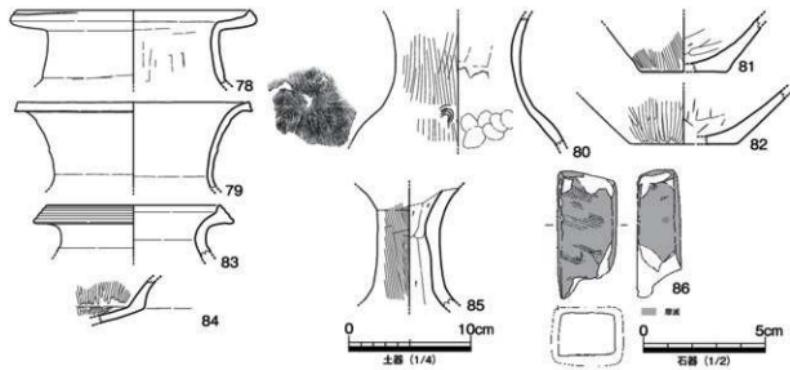
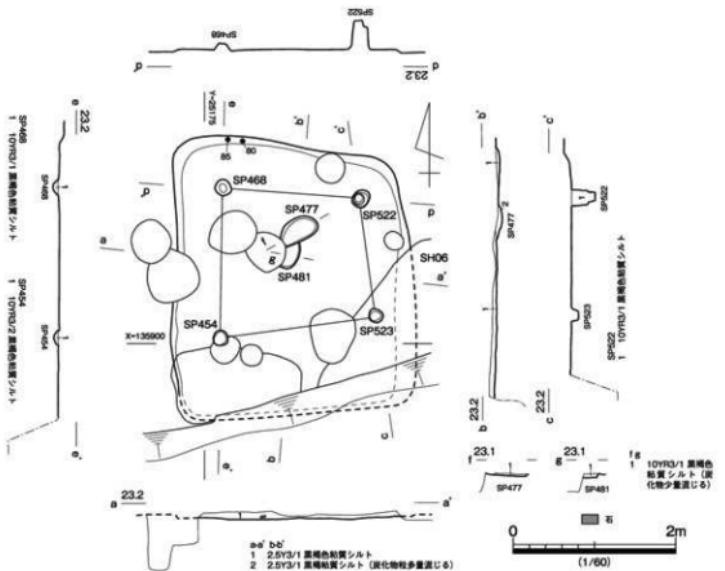


図 19 7-2 区 SH11

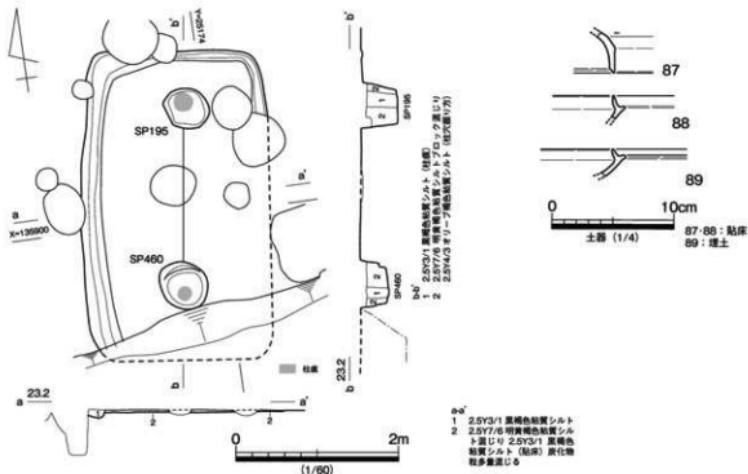
短軸 4.0 m と推定される。東壁沿いには幅 0.15 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。主柱穴は建物の対角線上にある SP381・SP439 と考えられるが、その他の柱穴は攪乱などのため未検出である。SP381・SP439 は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器など整理箱 1 箱程度出土した。(68) は土製品である。円盤状で片面には竹管による凹みがある。これらの中には弥生土器も含まれているが、古墳時代の土師器甕 (65 ~ 67)、須恵器杯 (69)・高杯 (70) もみられる。69 は陶邑須恵器編年 TK209 型式に属することから、SH10 は 6 世紀末から 7 世紀初頭のものと考えられる。

7-2 区 SH11 (図 19)

7-2 区南部で検出した竪穴建物である。古墳時代の竪穴建物 SH06 と重複し、さらに南部は現代の建物基礎によって削平される。平面形は隅丸方形で、長軸 3.6 m 以上、短軸 3.0 m である。主柱穴は SP468・SP454・SP523・SP522 の 4 個である。いずれも径 0.15 m と小さい。建物中央付近には埋土に炭化物を含む平面形楕円形の浅い凹み (SP477・SP481) がある。炉であろう。遺物は弥生土器片や石器などが整理箱 1 箱程度出土した。78 は弥生時代土器壺で、弥生時代終末期のものであるが、その他は後期前半に属する。後期前半の遺物のはうが多いが、建物の平面形が隅丸方形であることから、SH11 は弥生時代終末期のものと考えられる。

7-2 区 SH12 (図 20)

7-2 区南部で検出された竪穴建物である。南部は現代の建物基礎によって削平される。平面形は隅丸長方形で、長軸 3.7 m 前後、短軸 2.4 m である。壁沿いには幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。主柱穴は SP195・SP460 の 2 個である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器などが整理箱半分程度出土した。87・88 は貼床から、89 は床面付近から出土したものである。89 は小破片であるが、陶邑須恵器編年 TK217 型式に属することから、SH12 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。



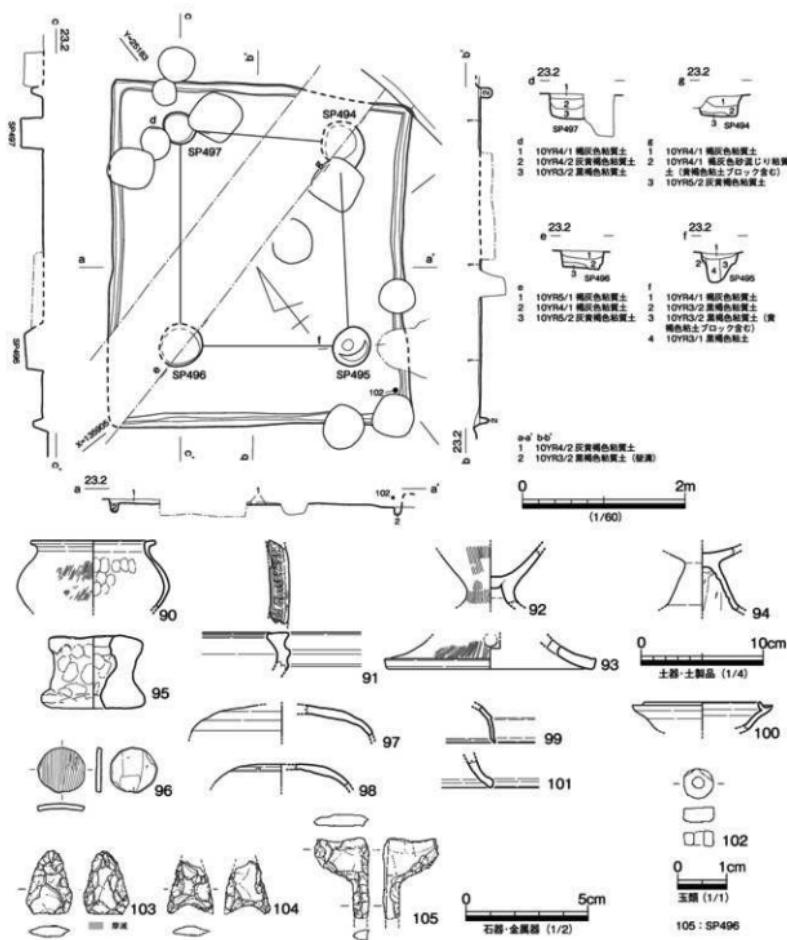


図 21 7-2 区 SH13

7-2区 SH13 (図21)

7-2区南東部で検出された竪穴建物である。建物の中央は配管設置の搅乱により削平される。平面形は長方形を呈し、長軸4.2m、短軸3.6mである。壁沿いには幅0.15m、深さ0.1mの壁溝が巡る。主柱穴はSP497・SP494・SP495・SP496の4個である。平面形は円形で、径0.4~0.5m、深さ0.3~0.5mである。遺物は弥生土器・土師器・石器・玉類など整理箱1箱程度出土した。弥生土器(90~93)や弥生時代のサスカイト製石器(103~105)も含まれるが、古墳時代の遺物もあり、土師器高杯(94)・須恵器蓋(97~99)・杯(100)・高杯(101)や滑石製白玉(102)がみられる。一部古い様相をもつ須恵器もあるが、須恵器杯(100)は陶邑須恵器編年TK217型式に属することから、SH13は7世紀前葉から中葉のものと考えられる。

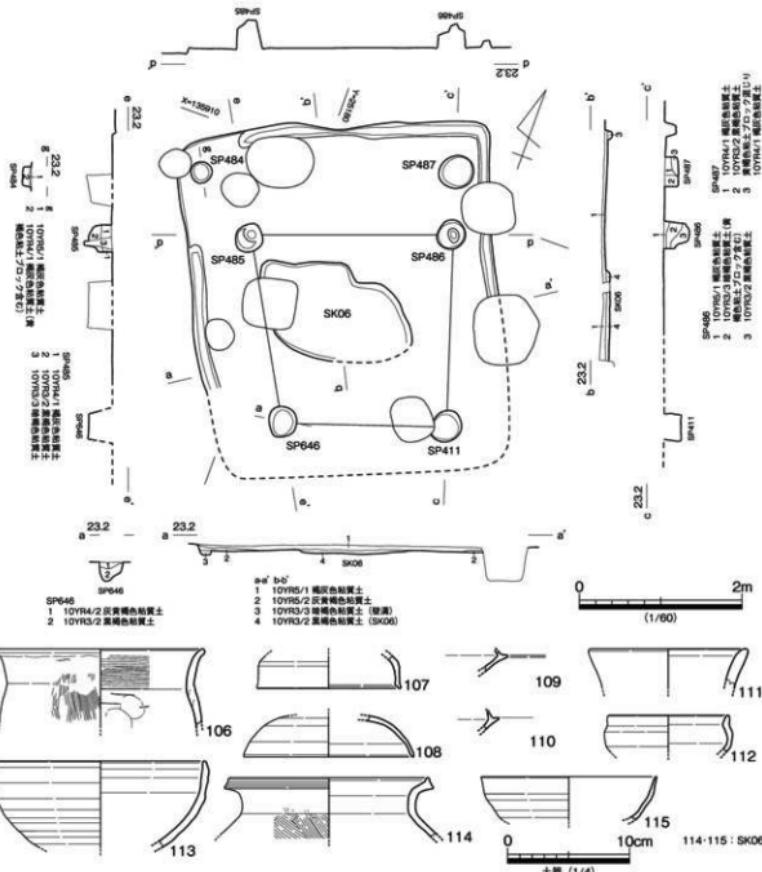


図22 7-2区 SH15

7-2 区 SH15（図 22）

7-2 区東部で検出された竪穴建物である。竪穴建物 SH16 と重複する。調査時には SH16 のほうが新しいと考え、調査を行ったが、整理時の検討で SH15 のほうが新しいと考えた。SH15 の平面形は方形で、1 辻 3.8 m である。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m の壁溝が巡る。主柱穴は SP485・SP646・SP411・SP486 の 4 個で構成される。これらの柱穴は径 0.3 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m である。建物中央には土坑 SK06 がある。SK06 の平面形はいびつで、長軸 2.0 m 前後、短軸 1.0 m 前後、深さ 0.05 m である。SK06 の埋土からは焼土・炭化物は検出されなかった。遺物は整理箱半分程度出土した。弥生土器片のはか土器器窯（106）・須恵器（107 ~ 113）がある。108 ~ 110 は陶邑須恵器編年 TK217 型式に属することから、SH15 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

7-2 区 SH16（図 23・24）

7-2 区東端で検出された竪穴建物である。攪乱によって削平されているため、建物の東部は不明である。また、古代の掘立柱建物跡 SB05・SB06・SB07、古墳時代の竪穴建物 SH13・SH15 と重複しており、これらの遺構に削平される。SH16 の平面形は方形で、長軸 6.0 m、短軸 5.6 m である。壁沿いには幅 0.15 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m の壁溝が巡る。主柱穴は 4 個と推定されるが、SP671・SP648 の 2 個以外は未検出である。遺物は弥生土器・土器・須恵器・石器などが整理箱 1 箱程度出土した。119 は壺口縁部で、形態は備後地方のものと類似するが、胎土は在地のものと類似する。139 は器台の脚部片で、外面に数条の凹線を巡らす。吉備から搬入品で、弥生時代後期前半のものである。また、床面付近からはガラス製小玉（147・148）、銅鏡（149）が出土した。147・148 は青色である。149 は中央に稜をもち、赤色顔料が付着する。これらの土器の中には弥生時代中期後半から後期前半のものもみられるが、大半は弥生時代後期前半新段階から後期後半古段階のものである。だが、少量ではあるが、埋土下部から土器小型丸底壺（132）や、数点の須恵器片が出土していることから、SH16 は古墳時代中期から後期の竪穴建物と考えられ、弥生時代後期前半新段階から後期後半古段階の遺物は下部に重複する竪穴建物 SH22 に伴うものである可能性が高い。

7-2 区 SH17（図 25・26）

7-2 区東部で検出された竪穴建物である。建物の中央部と北西部は攪乱で削平される。また、中央部やや東寄りは古墳時代の溝 SD0213、西部は古墳時代後期の竪穴建物 SH10、東部は古墳時代後期の竪穴建物 SH16、南部は弥生時代終末期の竪穴建物 SH11 と重複し、これらの遺構に削平されるが、検出面から建物の床面まで 0.4 m と深く、建物の床面付近は残存していた。SH17 の平面形は隅丸方形で、長軸 5.3 m、短軸 4.9 m である。建物の床面は壁沿いに幅 0.1 ~ 0.3 m の平坦面が巡り、内側は平坦面よりも深く、床面は二段掘りになる。中央の一段低い部分の端には幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。主柱穴は壁溝の内側にあり、SP662・SP657・SP667・SP664（径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.4 m）の 4 個である。建物の中央部やや東寄りの床面には厚さ 3cm 程度の炭化物層が広がる。遺物は弥生土器片・石器が整理箱 2 箱程度出土した。162・163 は弥生土器壺である。接合しなかったが、同一個体の可能性が高い。玉ねぎ形の体部をもつ長頸壺である。176 は器台の脚部で、外面に数条の凹線を巡らす。吉備からの搬入品で、弥生時代後期前半のものである。183 も器台の脚部である。胎土は茶褐色で、赤彩がみられる事から吉備の中でも備中地方からの搬入品と考えられる。弥生土器は弥生時代後期前半に属するものも多量に含まれるが、160 ~ 163・174・175・181 は弥生時代後期後半に属する。これらは埋土下部からも出土していることから、SH17 は弥生時代後期後半のものと考えられる。

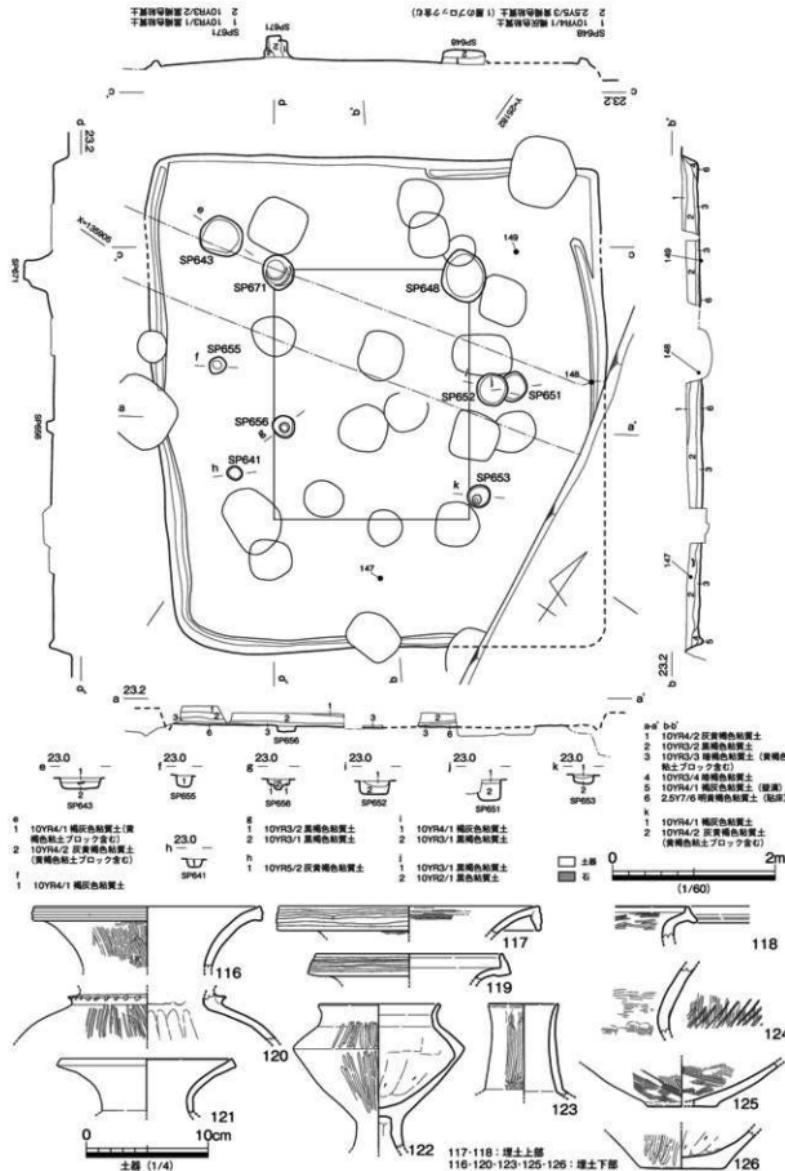


図 23 7-2 区 SH16(1)

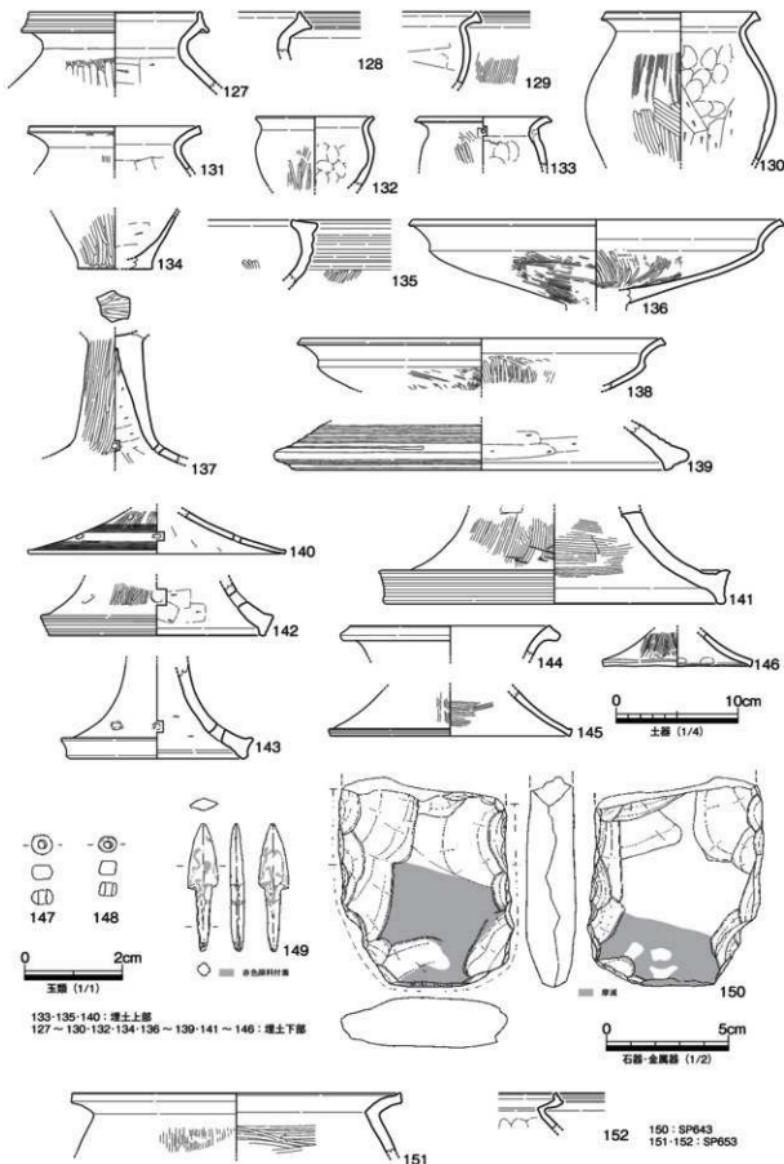


図 24 7-2 区 SH16(2)

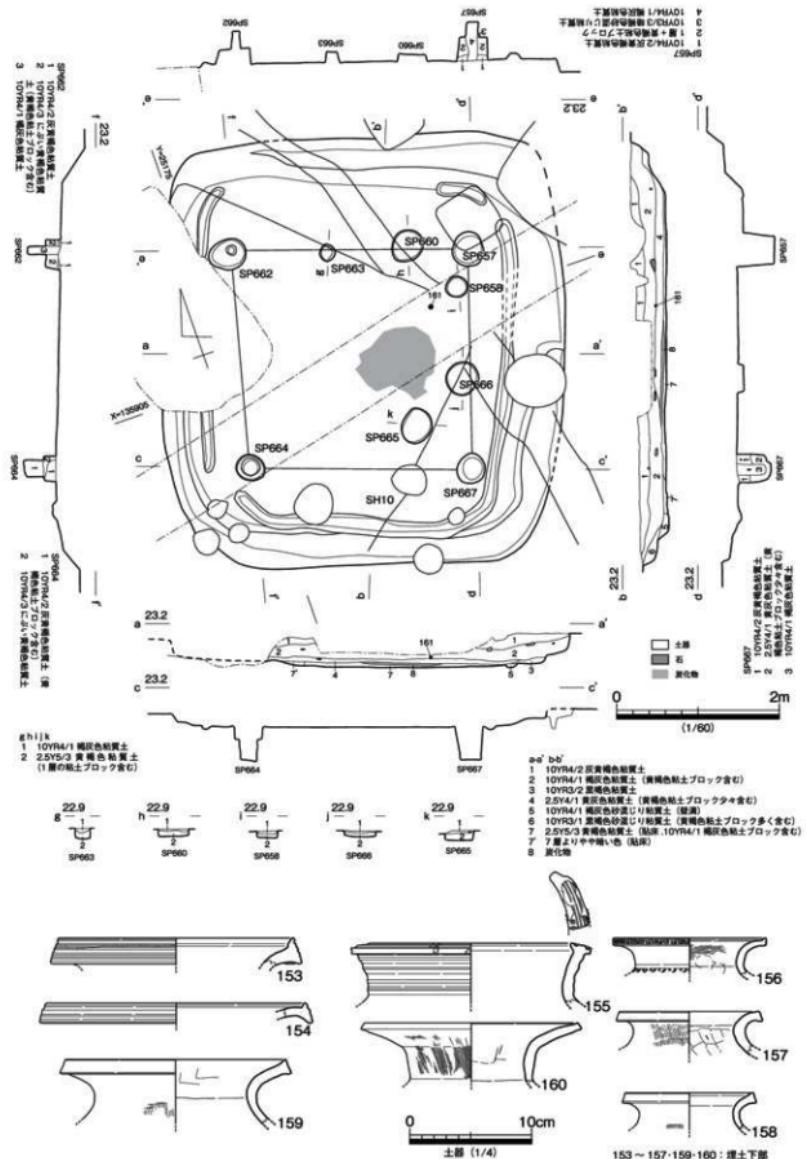


図25 7-2区SH17(1)

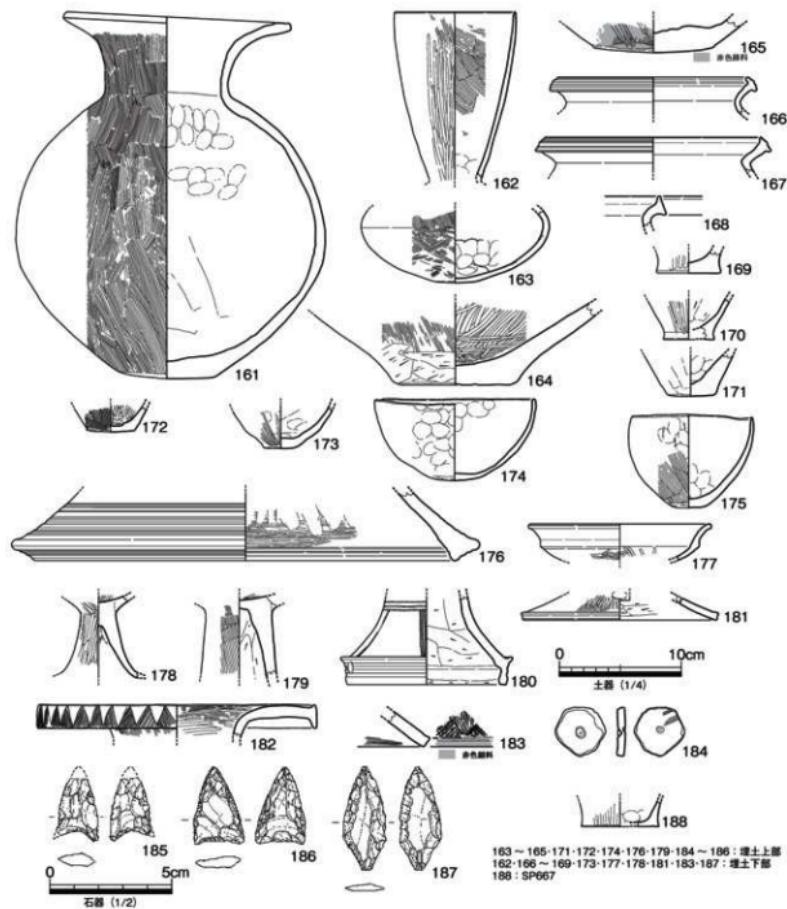


図 26 7-2 区 SH17(2)

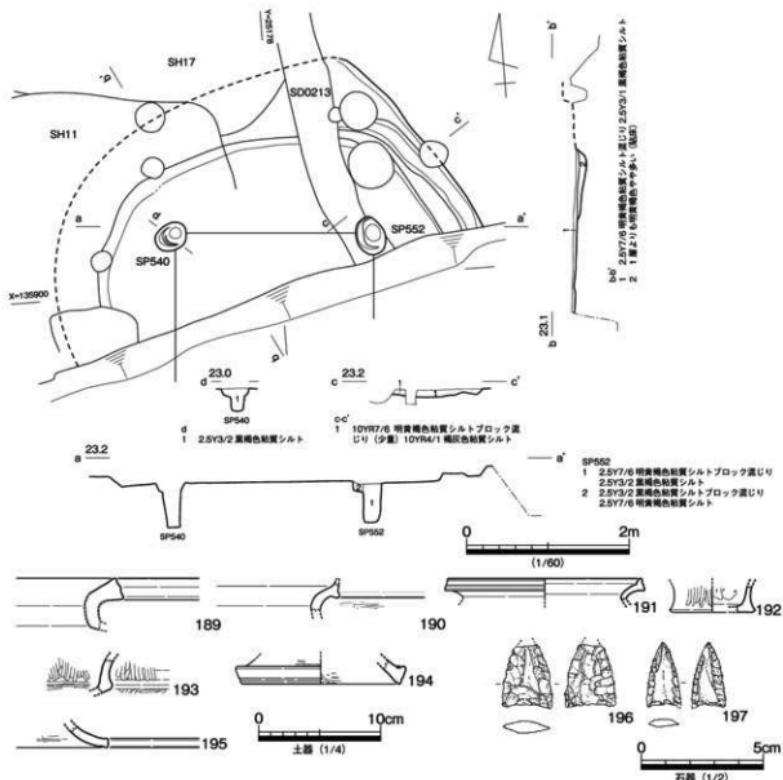


図27 7-2区SH18

7-2区SH18(図27)

7-2区南東部で検出された竪穴建物である。南部は現代の建物基礎の攪乱と古墳時代の竪穴建物SH06、東部は古墳時代の溝SD0213、北部は弥生時代の竪穴建物SH11・SH17によって削平されるため、全体は不明であるが、SH18の平面形は隅丸方形または円形で、径または一辺5.3m前後と推定される。壁沿いには壁溝が巡り、壁溝の内側は一段床面が下がる。主柱穴は2個検出されたが、本来は4個と推定される。遺物は弥生土器・石器が少量出土した。これらの中には弥生時代中期後半の土器もみられるが、弥生時代後期前半に属するものが多いことから、SH18は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-2区SH19(図28)

7-2区西北部で検出された竪穴建物である。北部は現代の建物基礎の攪乱、西部も攪乱によって削平される。南部は古代の溝SD0201と重複するが、SD0201は浅いためあまり削平を受けていない。残存部分からSH19の平面形は方形を呈し、1辺4.3m前後と推定される。壁と床面は垂直ではなく、建物

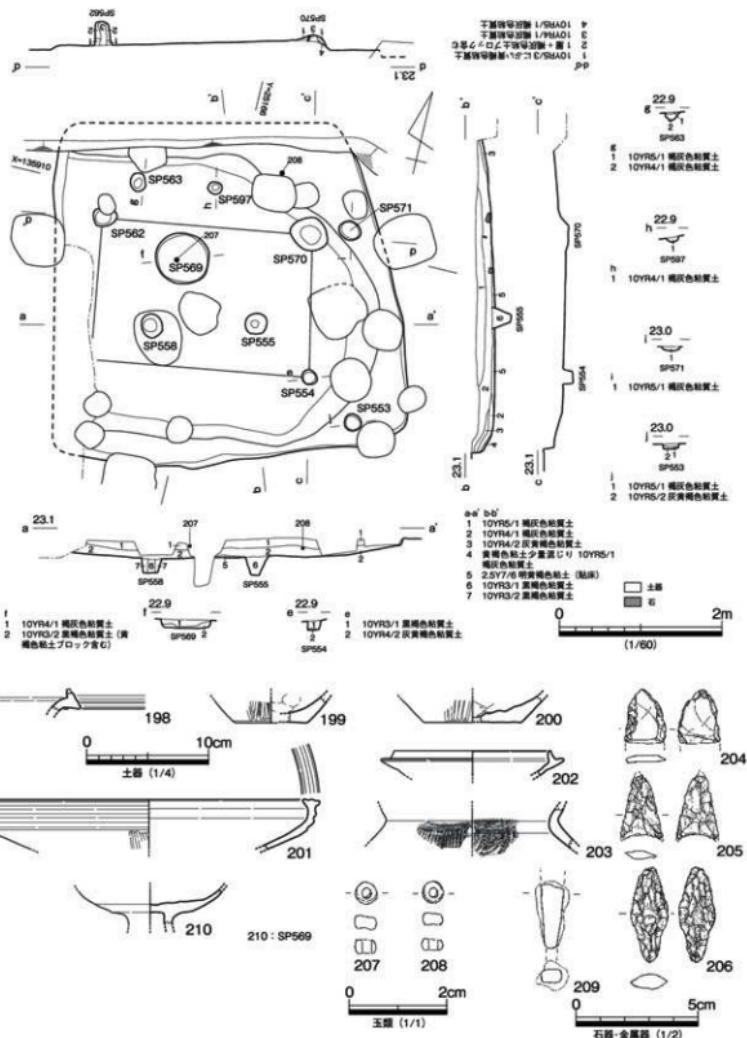


図28 7-2区 SH19

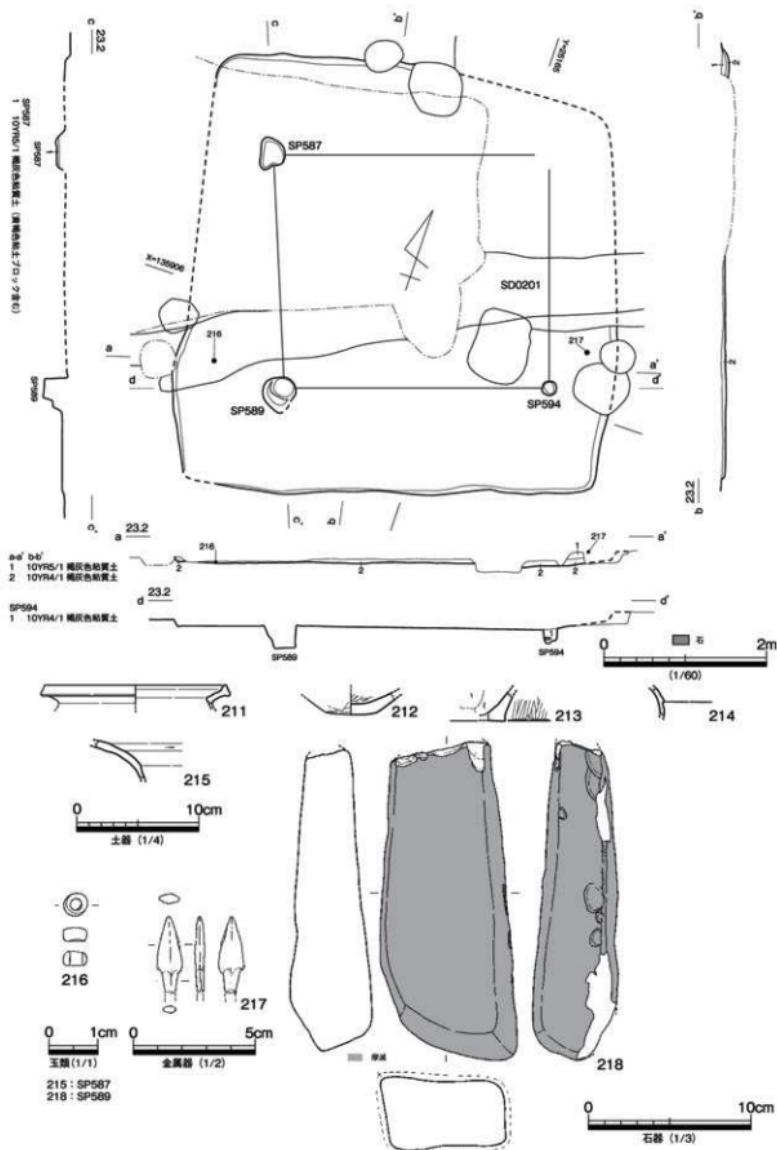


図29 7-2区SH20

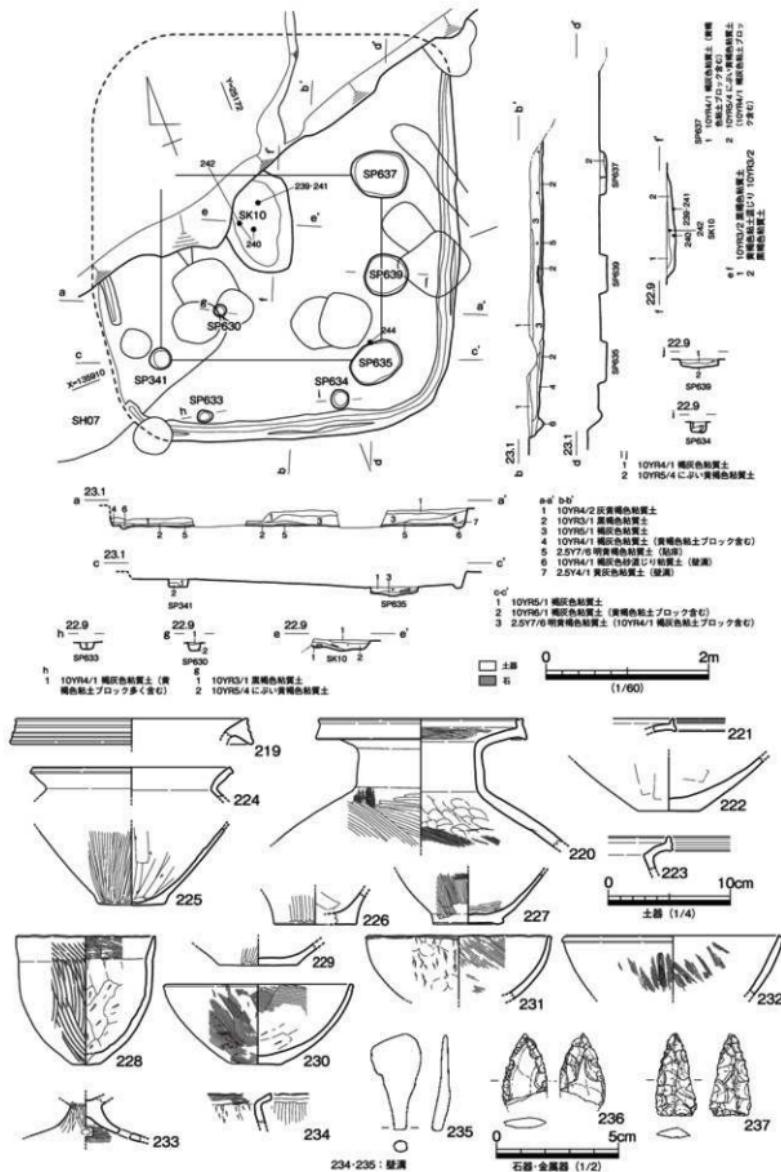


図 30 7-2 区 SH21(1)

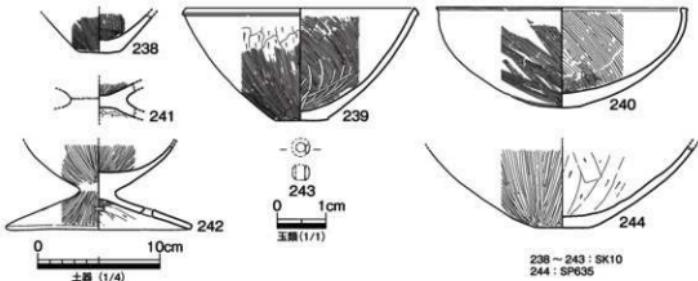


図 31 7-2 区 SH21(2)

中央部に向かって緩やかに傾斜する。主柱穴は4個と考えたが、壁沿いに巡る径0.2m、深さ0.1~0.2mの柱穴も建物を構成する柱穴であった可能性が高い。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・玉類・金属器・石器などが整理箱1箱程度出土した。207・208は滑石製の白玉である。209は鉄釘であるが、混入品の可能性が高い。弥生時代の土器も含むが、出土遺物の多くは古墳時代後期のものである。須恵器杯(202)は陶邑須恵器編年TK217型式に属することから、SH19は7世紀前葉から中葉のものと考えられる。

7-2 区 SH20 (図 29)

7-2 区西部で検出された堅穴建物である。北部は現代の建物基礎の攪乱、東部から南部にかけては古墳時代の堅穴建物 SH19・SH05、古代の溝 SD0201 と重複し、削平されたため、建物の北西部と南部が残存するにすぎない。平面形は方形で、長辺5.4m、短辺5.2m、深さ0.2mである。壁沿いには壁溝はみられなかった。主柱穴はSP587・SP589・SP594である。本来は4個と考えられるが、残りの1個は未検出である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器・玉類・銅鏡が整理箱半分程度出土した。216は滑石製の白玉である。217は銅鏡で、基部の先端を欠損する。中央に稜があり、かえりは短い。弥生土器も出土したが、須恵器・土師器や白玉がみられることから、SH20は古墳時代後期のものである。215は柱穴からの出土遺物であるが、陶邑須恵器編年 TK10 ~ TK43 型式に属することから、SH20は6世紀中葉から後葉のものと考えられる。

7-2 区 SH21 (図 30・31)

7-2 区中央部で検出された堅穴建物である。北部は現代の建物基礎の攪乱によって削平され、南部は古墳時代後期の堅穴建物 SH07、中世の掘立柱建物跡 SB03 と重複し、削平される。SH21 の平面形は隅丸方形で、1辺4.5mである。壁沿いには幅0.1~0.15m、深さ0.05mの壁溝が巡る。主柱穴はSP341・SP635・SP637の3個で、本来は4個で構成されると考えられるが、1個は攪乱による削平のため、未検出である。床面中央部には土坑SK10がある。SK10の平面形はややいびつな楕円形で、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.1mである。埋土には炭化物はみられなかった。SK10からはガラス製の小玉(243)、SK10の底面付近からは弥生土器鉢(239・240)、弥生土器高杯(241・242)が出土した。そのほか、SH21の埋土からは弥生土器・石器・金属器などが整理箱半分程度出土した。235は鉄釘である。湾曲しており、縁部の一部を欠損する。埋土には弥生時代中期後半の土器も含むが、大半は弥生時代後期後半に属することから、SH21は弥生時代後期後半のものと考えられる。

7-2 区 SH22 (図 32~34)

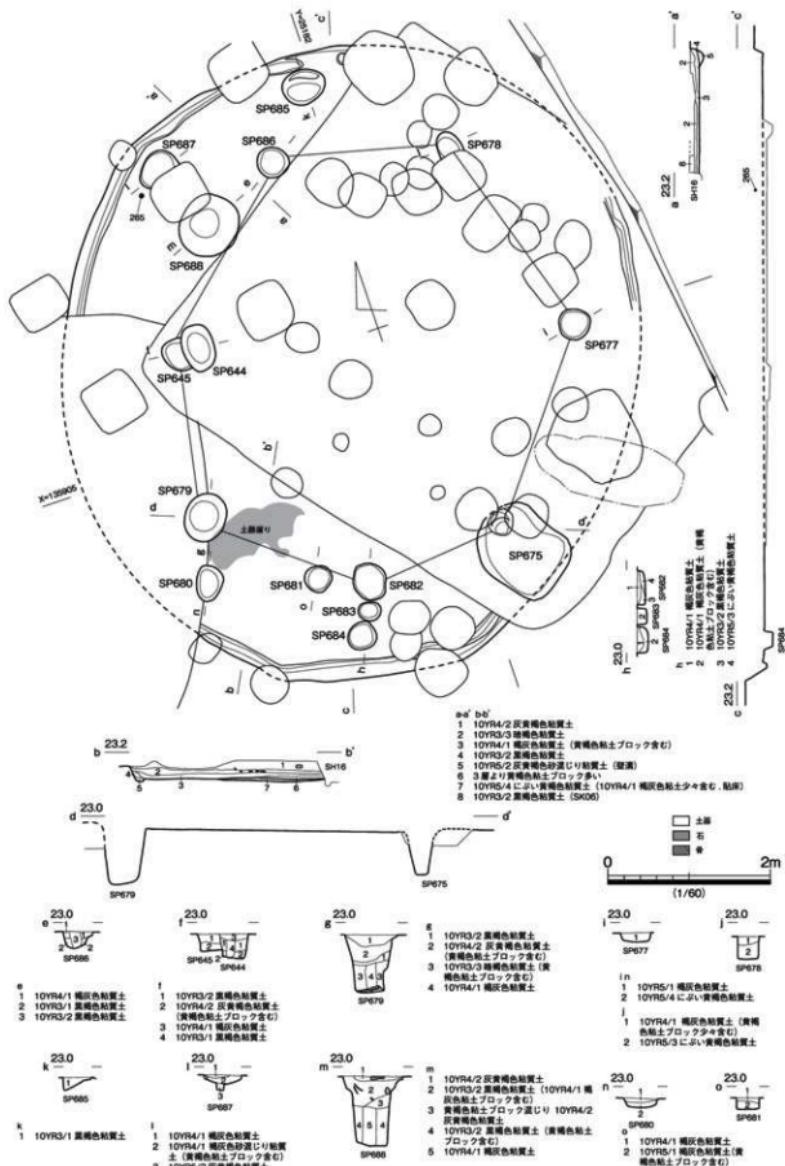


図 32 7-2 区 SH22(1)

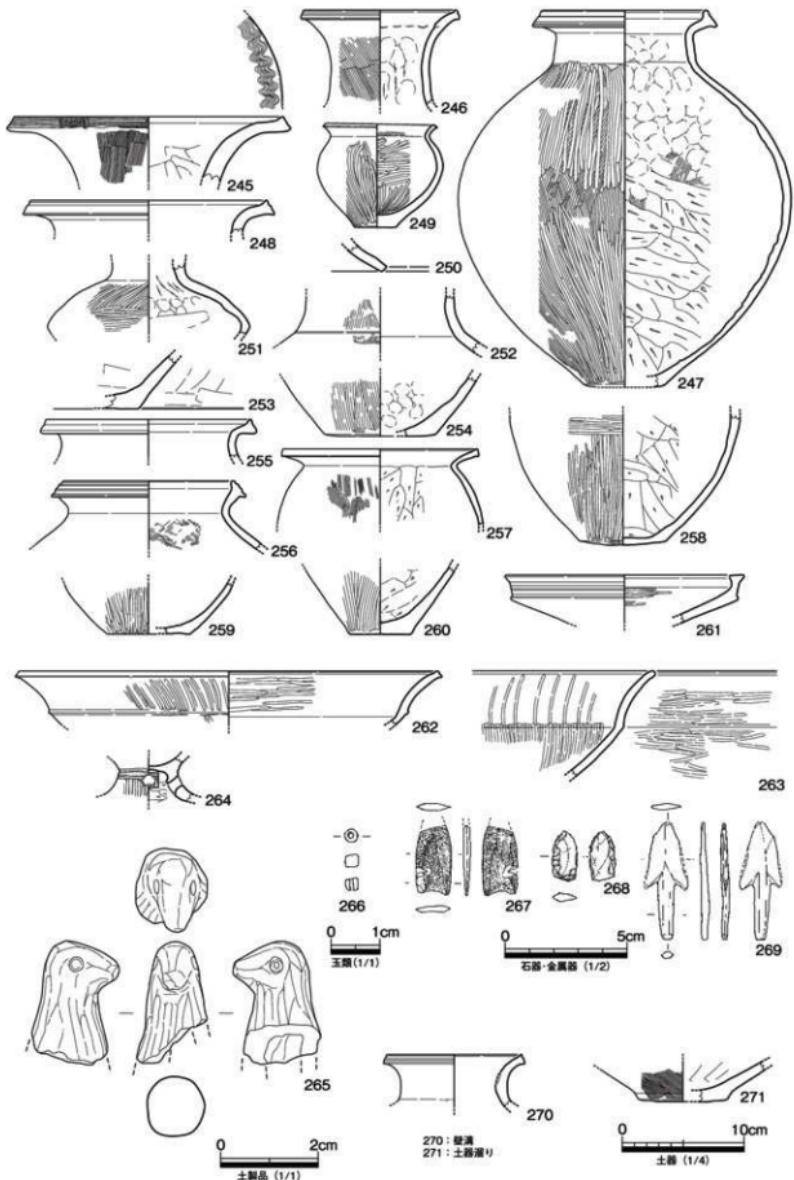


図 33 7-2 区 SH22(2)

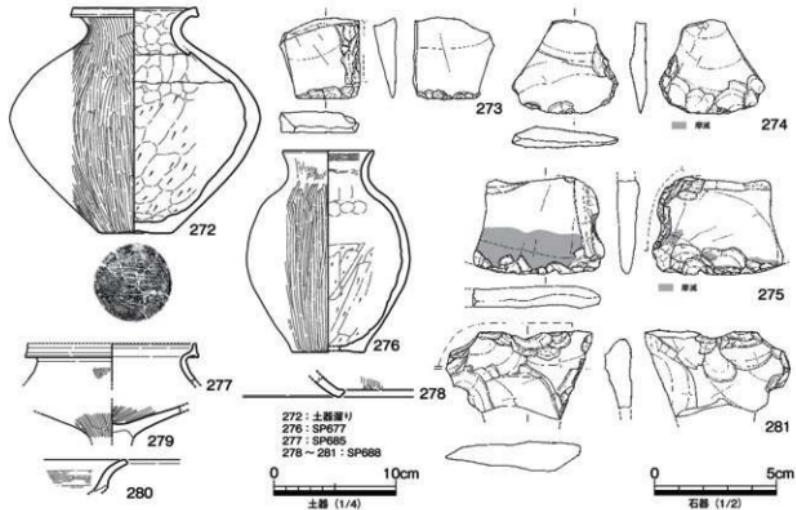


図34 7-2区SH22(3)

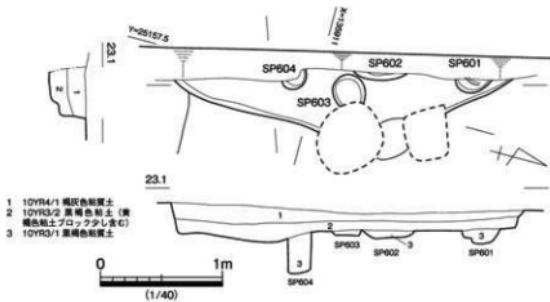


図35 7-2区SX04

7-2区東端で検出された堅穴建物である。建物中央部には配管による搅乱があるが、浅いためほとんど影響を受けていない。また、古墳時代の堅穴建物SH13・SH16、弥生時代後期の堅穴建物SH17と重複し、一部が削平される。平面形は円形で、径7.7m、深さ0.2~0.3mである。壁沿いには幅0.1~0.15m、深さ0.05mの壁溝が巡る。主柱穴はSP686・SP678・SP675・SP679・SP645・SP677・SP682と推定される。SP679は深さ0.7m、SP675は0.5mと深いが、SP678は0.4m、SP677・SP645は深さ0.2m、SP686は深さ0.3mと浅い。SP679の周辺には土器片が集中する土器溜まりがある。遺物は土器・石器などが整理箱2箱程度出土した。266はガラス製の小玉である。青色で、長さ・直径ともに0.25cmと小さい。267は磨製石鎌である。よく研磨され、表面には研磨による線状痕が残る。黒色である。研磨

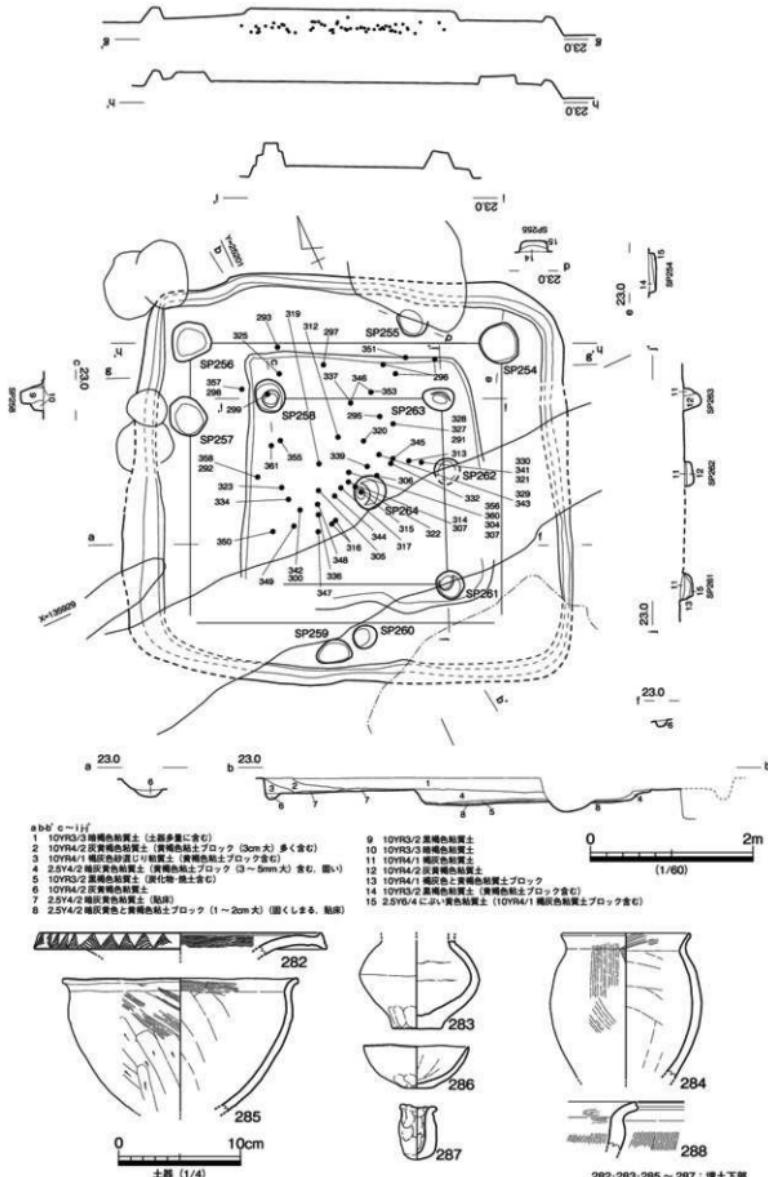


図 36 7-7 区 SH01(1)

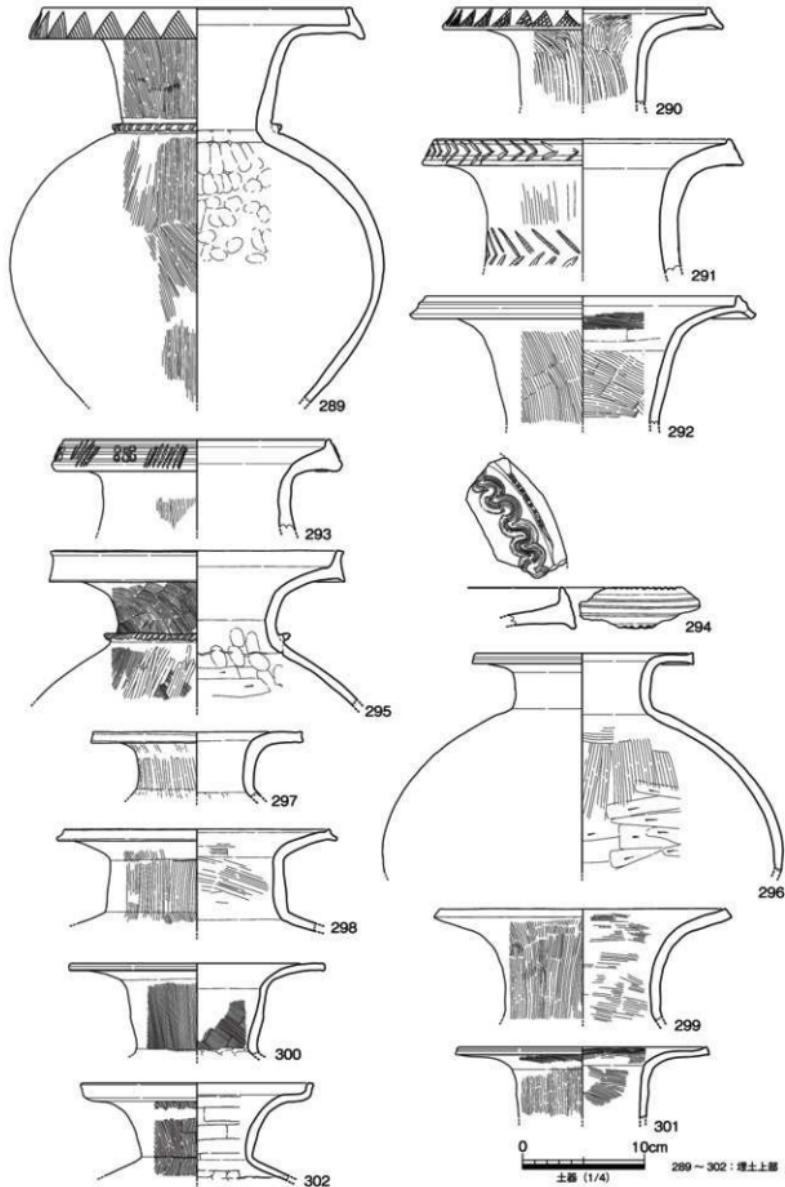


図 37 7-7 区 SH01(2)

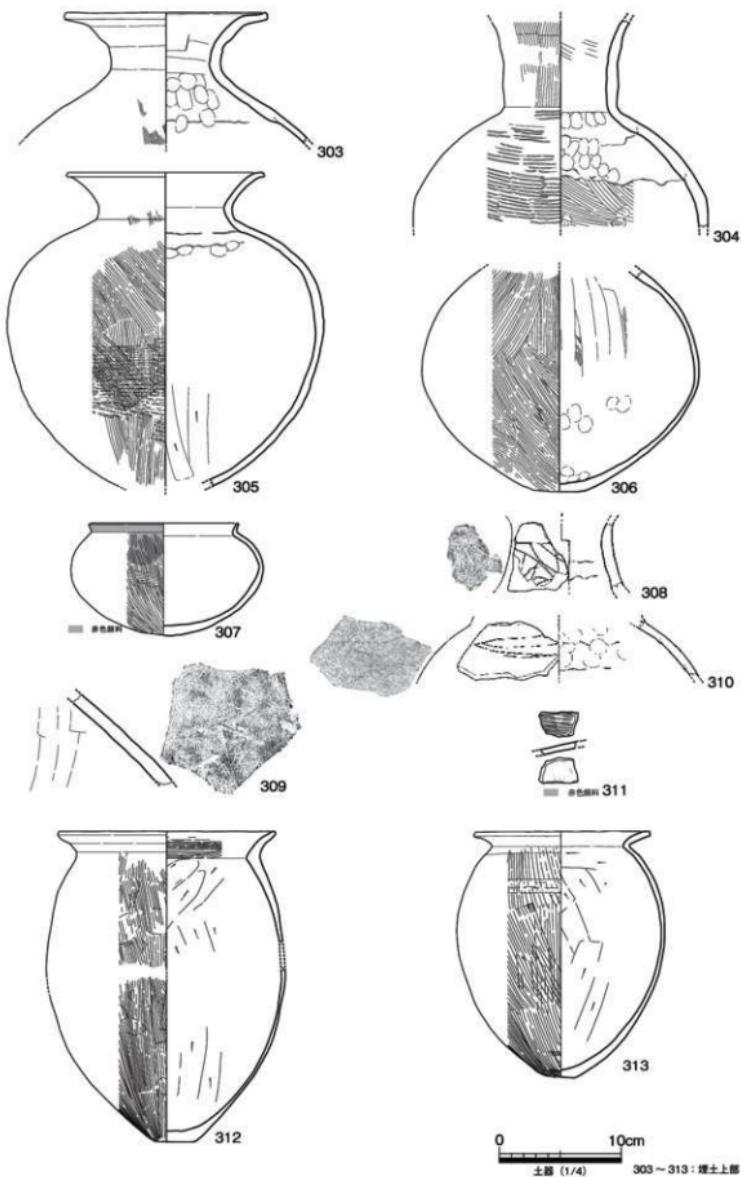
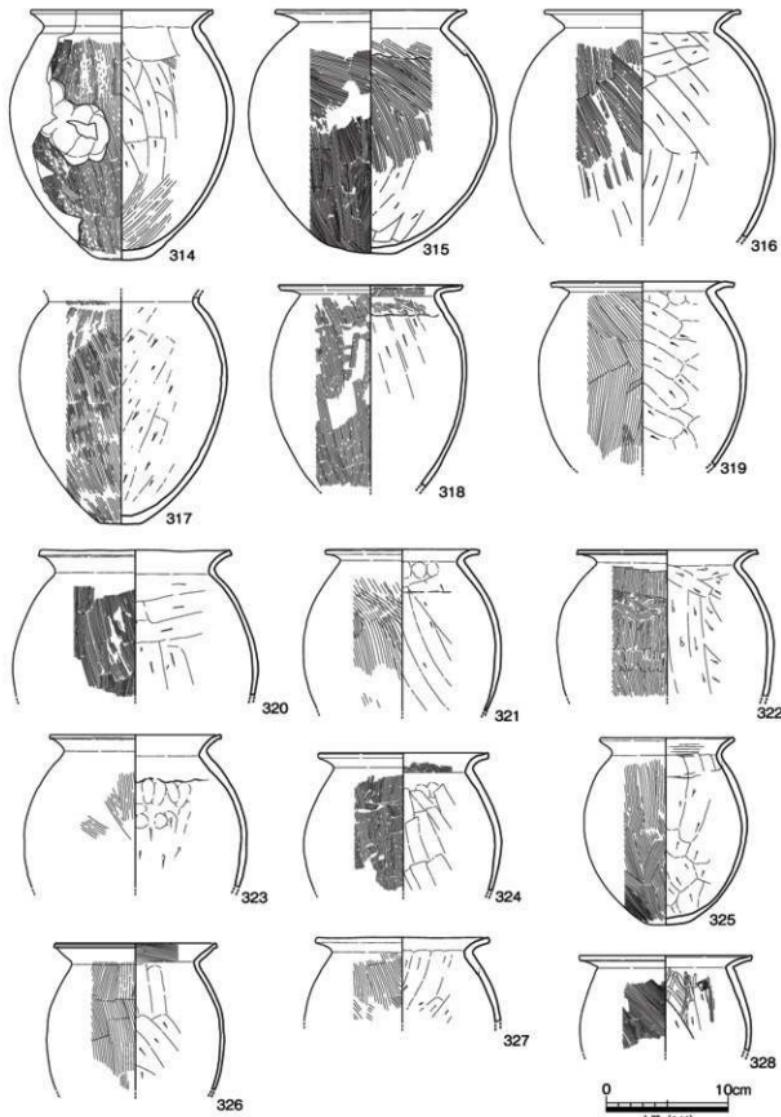


図 38 7-7 区 SH01(3)



314 ~ 328 : 地上部

図 39 7-7 区 SH01(4)

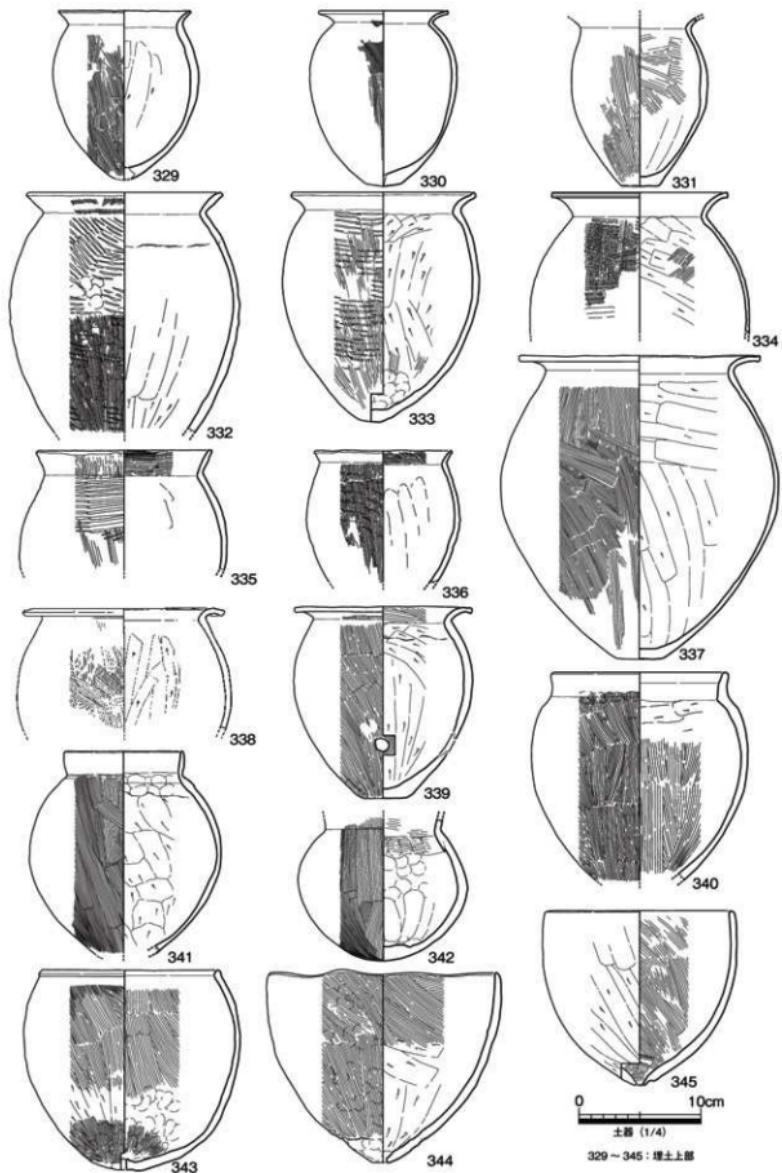


図 40 7-7 区 SH01(5)

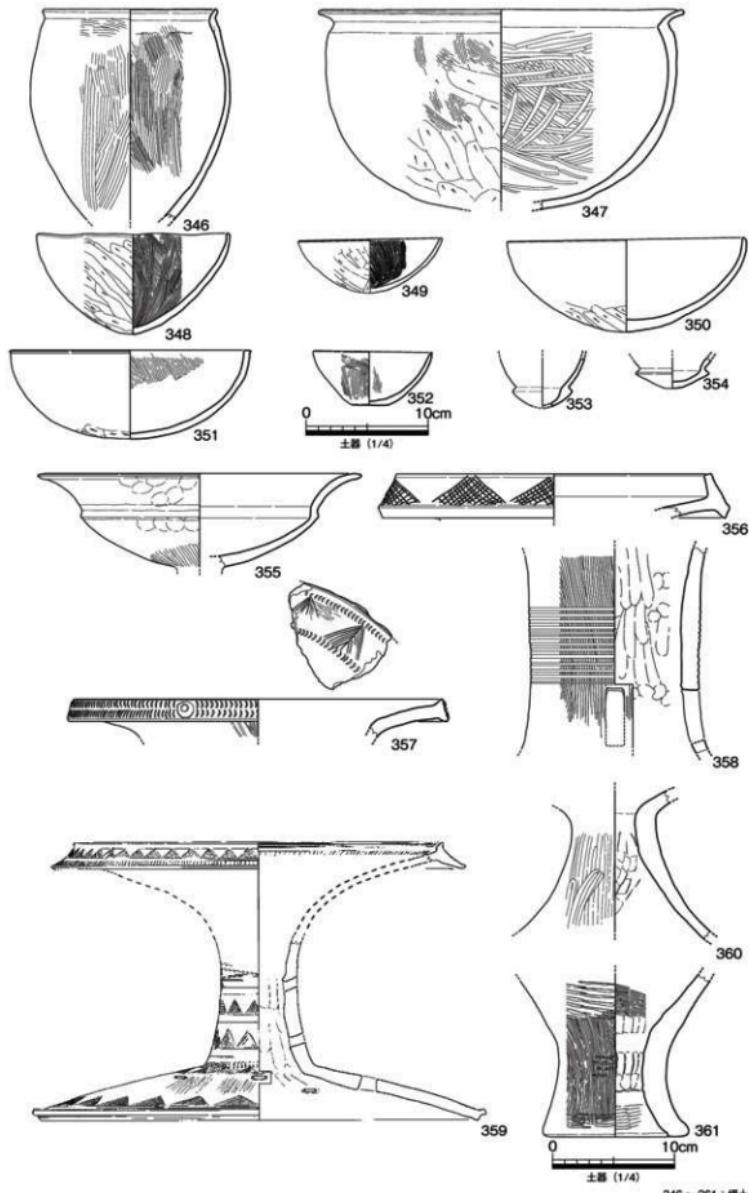


図 41 7-7 区 SH01(6)

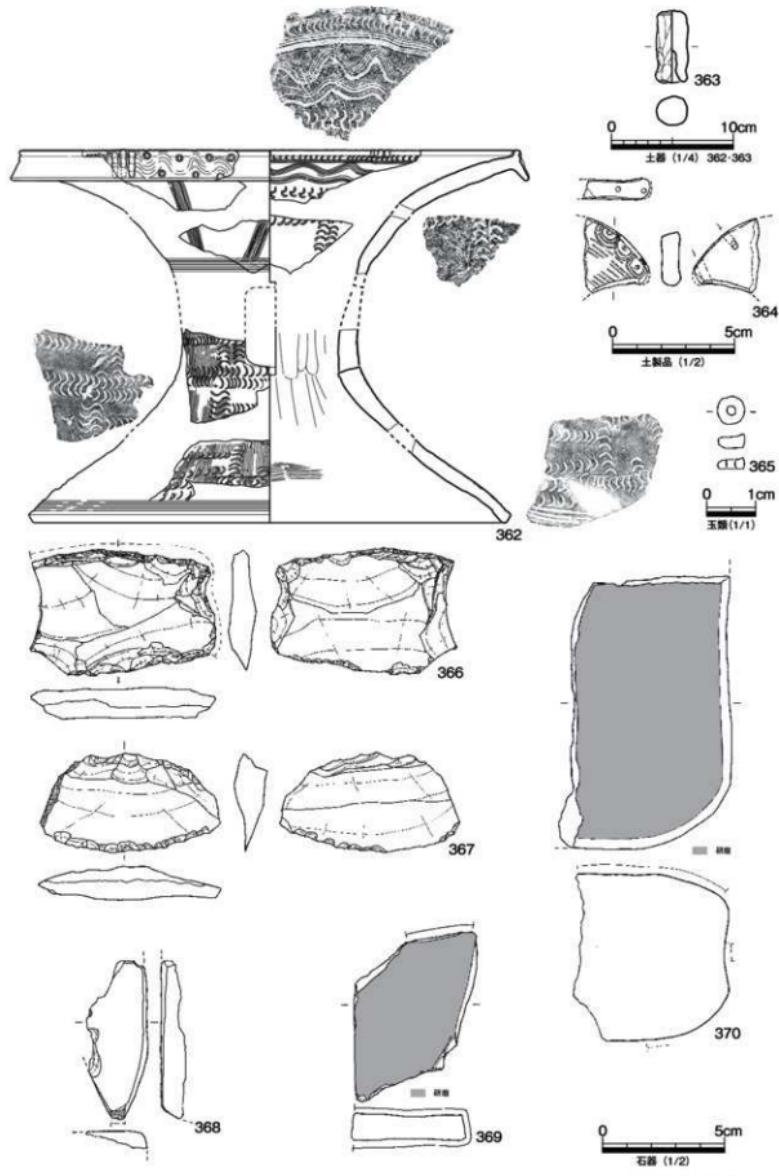


図 42 7-7 区 SH01(7)

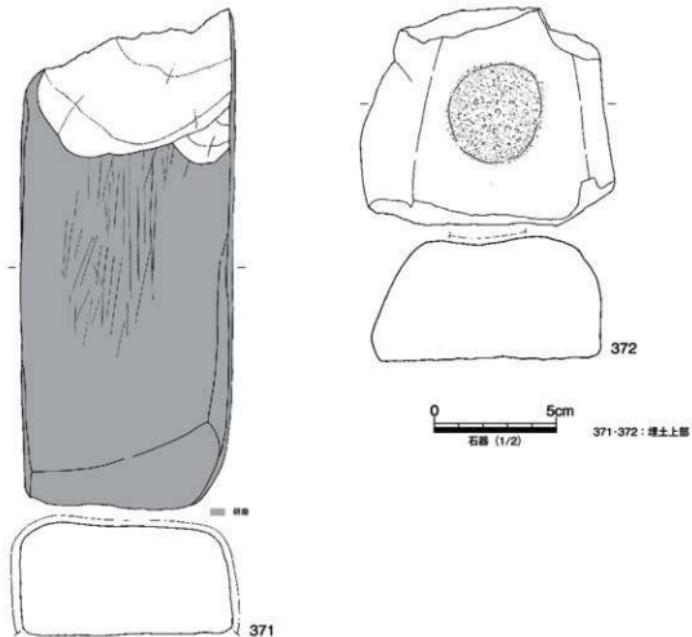


図 43 7-7 区 SHO1(8)

のため石材の観察が困難であるが、泥岩か粘板岩製のいづれかである。269は銅鏡である。かえりと茎を持つ。鏡の両側縁の一部が欠損する。中央部には稜があり、鏡の断面形は菱形を呈する。265は鳥形土製品である。頭部のみで、体部は欠損する。目は凹み、鳥の頭部を忠実に表現している。出土土器は弥生時代後期前半新段階に属するものが大部分を占める。257は弥生時代後期終末期に属するが、他に同時期のものはみられないことから、混入品と考えられる。これらの遺物からSH22は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-2 区 SX04（図 35）

7-2 区西北部端で検出された遺構である。遺構の大部分は調査区外に連続するため、一部が検出されただに過ぎないが、壁の立ち上がりがほぼ垂直で、底面がほぼ平坦であることから、竪穴建物の一部である可能性が高い。残存部分の長軸 2.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.3 m である。出土遺物は少量であるが、口縁部端面を拡張し、浅い凹線を施す壺の小片が出土していることから、SX04 は弥生時代後期前半の竪穴建物と考えられる。

7-7 区 SH01（図 36～43）

7-7 区南東部で検出された竪穴建物である。平面形は隅丸方形で、南北長 5.1 m、東西長 5.5 m である。壁の周囲には幅 0.2～0.3 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。床面は二段掘りで、建物の壁の内側には幅 1.0～1.5

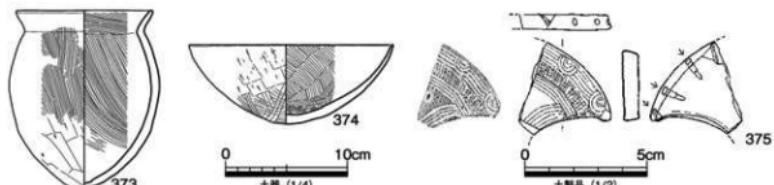
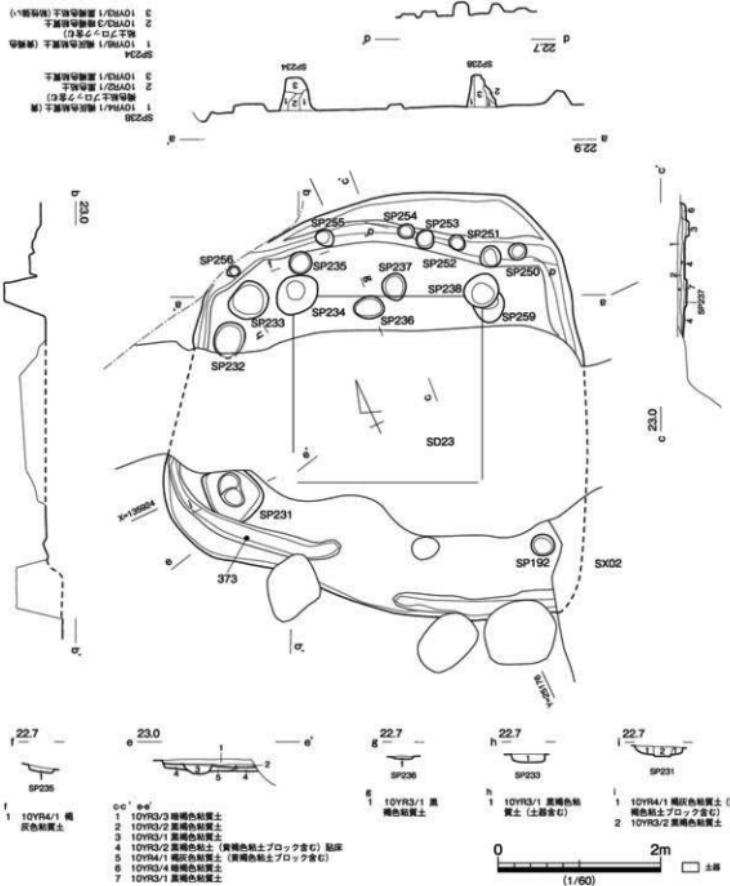


図 44 7-8 区 SH01(1)

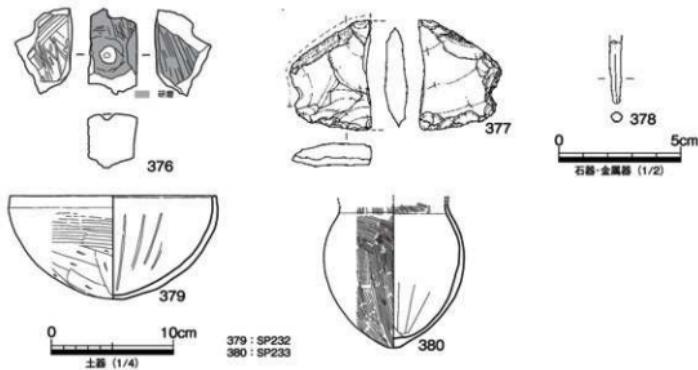


図 45 7-8 区 SH01(2)

mの平坦面があり、その内側の床面は0.2 m低くなる。建物の四隅の内側と、中央の一段下がった部分には主柱穴がある。建物の南部は擾乱があり、古墳時代の溝SD06が重複するため、外側の主柱穴は2個（径0.5 m、深さ0.2 m）しか検出されていないが、本来は建物の四隅にあったと考えられる。中央の一段下がった部分にも径0.4 m、深さ0.3 mの柱穴が3個あるが、これも本来は4個あったものと考えられる。建物中央の一段下がった部分からは弥生土器・石器などが整理箱半分程度出土した。282・283・285～287はこの部分から出土した土器である。これらは弥生時代後期後半に属する。また、建物の埋土の上位からは整理箱5箱程度の多量の遺物が出土した。これらの遺物は建物の廃絶後、残っていた凹みに廃棄されたものと考えられる。289～372はこの部分から出土した遺物である。314・321は焼成剥離痕がある。308は壺の頸部片で、外面には弧帯文がヘラ描きされる。310も壺の体部で、外面には弧状の文様がヘラ描きされる。359は器台である。頸部を欠損する。器台上部は外方に向かって広がり、口縁部は下方に拡張する。また、脚部は下方が大きく広がる。口縁部端面には鋸歯文、口縁部内面には3条の浅い沈線と櫛描列点文がある。また、脚部外面にも4帯の鋸歯文が施される。このような形態や文様をもつ器台は播磨地方に類例がある。同地方からの搬入品の可能性が高い。362も器台である。文様が特徴的であることから、同一個体と考えられる土器片をそれぞれ図化し、図上で復元した。外面及び上部内面には櫛描直線文・波状文・爪形文のような半円形の刻み目を連続して施す。この付近では同じような文様をもつ器台はみられない。搬入品であると考えられるが、産地は不明である。なお、362の破片はSH01から出土しただけではなく、7-7区に北接する調査区7-10区・7-11区からも出土した。365は滑石製の白玉である。他に古墳時代後期の遺物はみられないことから、混入品であると考えられる。埋土上位から出土した土器は弥生時代後期後半の土器も含むが、弥生時代終末期のものが大部分である。これらの出土土器からSH01は弥生後期後半に築かれた竪穴建物で、弥生時代終末期に廃絶した建物の凹みに多量の土器片が廃棄されたと考えられる。

7-8区 SH01 (図44・45)

7-8区のはば中央で検出された竪穴建物である。古墳時代から奈良時代の溝SD23、古墳時代の土坑SX02と重複し、削平されたため建物の南東部と中央部は不明である。SH01の平面形はややいびつな

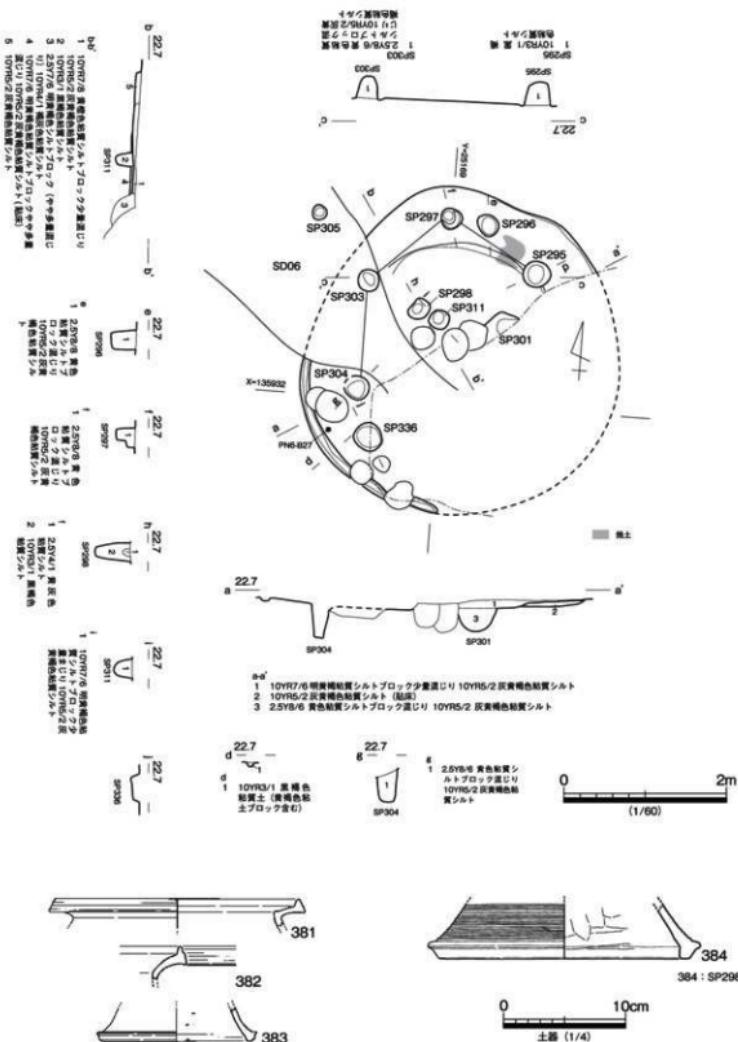


図 46 7-8 区 SH02

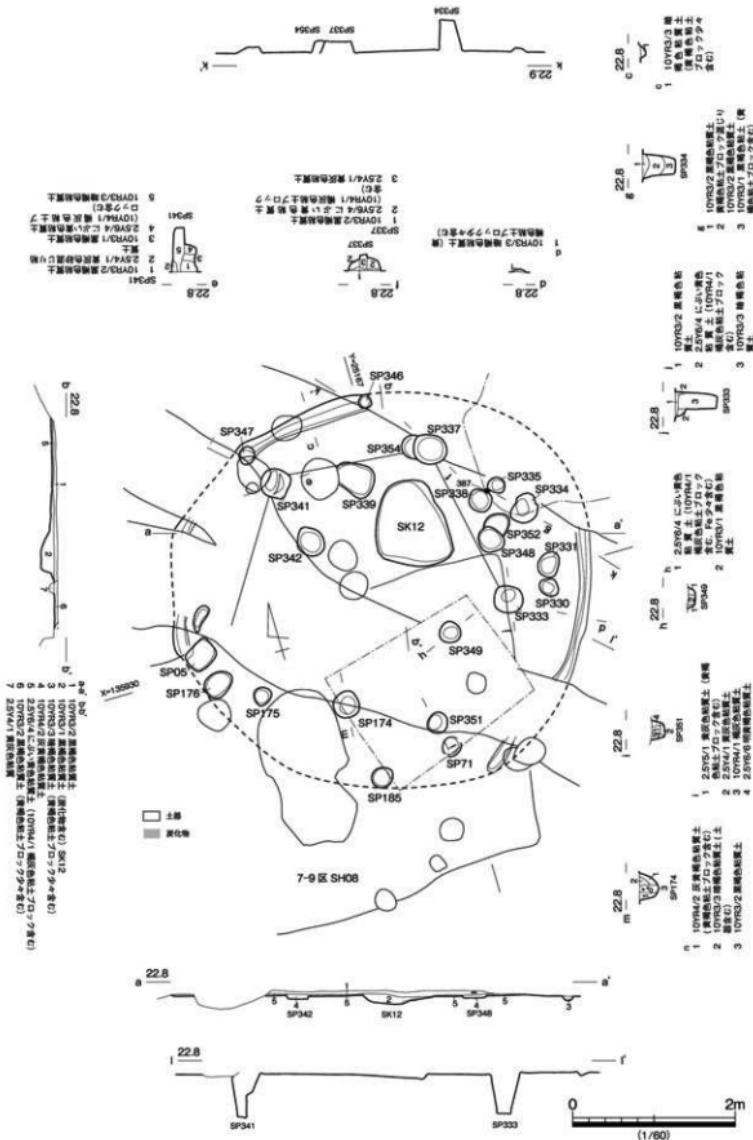


図 47 7-8 区 SH03(1)

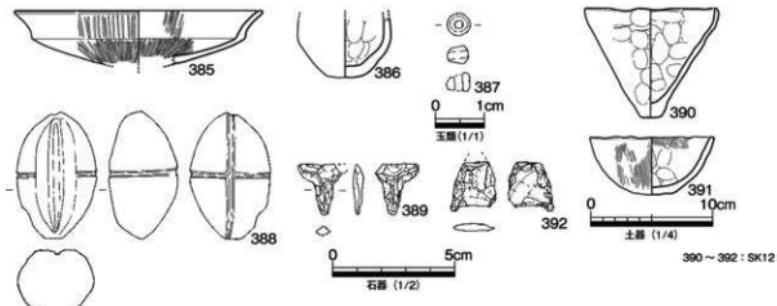


図 48 7-8 区 SH03(2)

隅丸方形で、長辺 5.2 m、短辺 4.8 m である。壁沿いには幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m の壁溝が巡るが、建物南側の中央部で途切れる。壁溝の中には 7 個の柱穴（径 0.15 ~ 0.25 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m）が検出された。建物の壁を支えるための柱穴である可能性が高い。北壁沿いの壁溝の内側には 10 個の柱穴が検出された。SP234、SP238 は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m で主柱穴と考えられる。これら以外の主柱穴は古墳時代の溝 SD23 により削平された可能性が高い。なお、ここでは SH01 は 1 棟の建物として報告するが、壁溝が南部で連続せず、食い違っており、平面形もいびつであることから、もう 1 棟建物が重複していた可能性もある。遺物は土器・石器・金属器が整理箱 1 箱程度出土した。土器の大部分は小破片であった。375 は壁溝から出土した分銅形土製品である。376 は砥石、378 は銅鏡の茎である。出土土器は弥生時代後期終末期新段階から古墳時代前期前半古段階に属することから、SH01 は弥生時代後期終末期新段階から古墳時代前期前半古段階のものと考えられる。

7-8 区 SH02 (図 46)

7-8 区北西部で検出された竪穴建物である。建物の南東は攪乱によって削平され、建物の中央部は古墳時代後期の溝 SD06 と重複し、削平されたため、全体は不明である。また、南西部の建物の壁は検出できず、壁溝の検出により、建物の範囲がわかった。南西部は弥生時代の竪穴建物 SH03 と重複する。SH03 のほうが新しい。SH02 の平面形は円形で、径 4.0 m 前後、深さ 0.1 m である。建物の西部から南西部の壁沿いに幅 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。建物の北部の壁際にはベッド状遺構がみられる。壁溝の内側にある柱穴 SP295・SP297・SP303・SP304 は主柱穴の可能性が高い。これらの柱穴は径 0.2 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m である。また、SP295 と SP297 の間の床面には焼土が薄く広がる。遺物は弥生土器片など整理箱半分程度出土した。SP298 から出土した 384 は器台の下部で、横方向のヘラ描き線が数条みられる。吉備地方からの搬入品で、弥生時代後期前半のものである。他の出土土器も弥生時代後期前半に属することから、SH02 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-8 区 SH03 (図 47・48)

7-8 区北西部から 7-9 区北東部で検出された竪穴建物である。建物の南部は攪乱により削平され、古墳時代後期から奈良時代の溝 SD23、竪穴建物 7-9 区 SH08 と重複し、削平されているため遺構の残存状況は悪い。また、弥生時代の竪穴建物 SH02 と重複するが、SH03 のほうが新しい。建物の壁は検出できなかったが、壁溝から建物の平面形は円形で、径 5.1 m 前後であることがわかる。主柱穴は

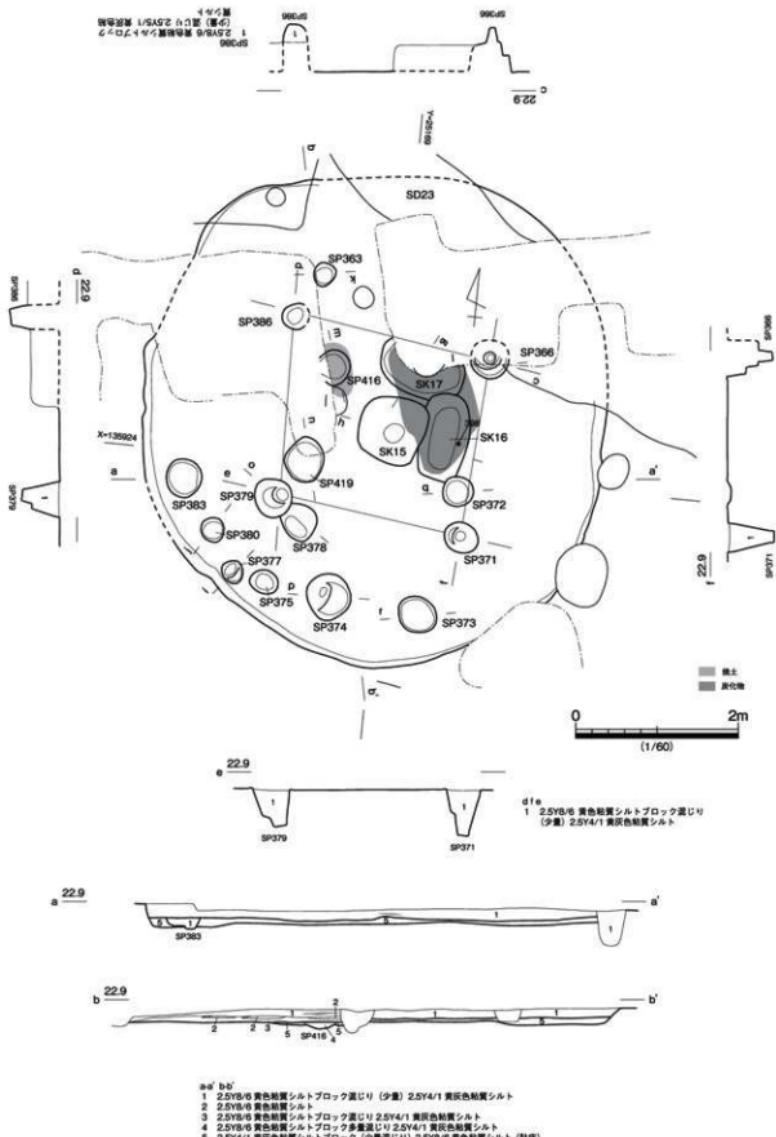


図49 7-8区 SHO4(1)

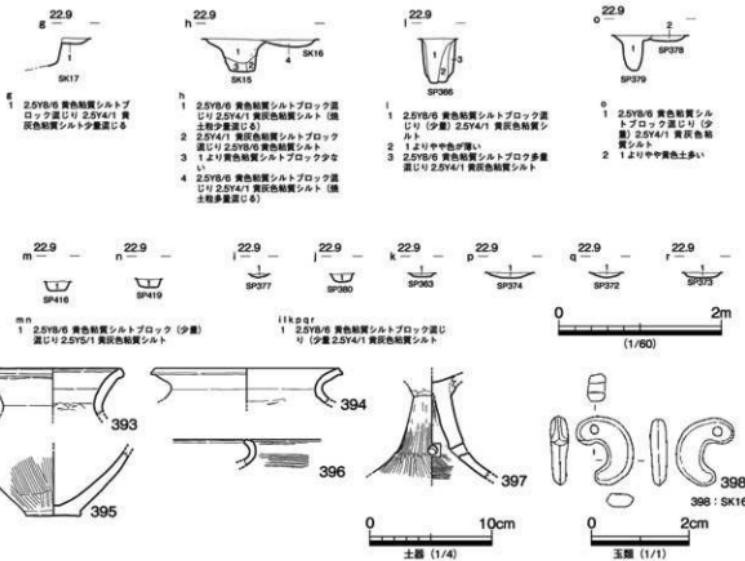


図 50 7-8 区 SH04(2)

SP341・SP337・SP333 のほかに数個あると考えられる。これらの柱穴は径 0.3 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。遺物は弥生土器・石器など整理箱半分程度出土した。387 はガラス製の小玉で、青色である。388 は石錘である。砂岩製で、表面には十字の溝がある。出土土器はいずれも弥生時代後期前半新段階から後期後半段階に属することから、SH03 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-8 区 SH04 (図 49・50)

7-8 区南西部で検出された堅穴建物である。建物の一部は擾乱や古墳時代後期から奈良時代の溝 SD23、弥生時代後期後半の堅穴建物 7-9 区 SH08 と重複し、削平される。平面形は円形を呈し、径 5.8 ~ 6.0 m、深さ 0.2 m である。建物中央の床面には焼土が広がり、焼土の下からは SK15・SK16・SK17 の 3 基の土坑が検出された。3 基は近接しており、一部が重複しているが、土層の堆積状況から最後に埋没したのは SK15 であることがわかる。SK15 の平面形は隅丸方形で、1 辻 0.8 m、深さ 0.4 m、SK16 の平面形は隅丸長方形で、長軸 1.0 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m である。SK17 は一部擾乱によって削平されているが、平面形は長楕円形で、長軸 1.0 m、短軸 0.6 m 前後、深さ 0.1 m である。3 基の中で埋土に焼土が最も多量に含まれていたのは SK16 である。また、建物の床面からは数個の柱穴跡が検出された。この中で SP386・SP379・SP371・SP366 の 4 個は主柱穴と考えられる。これらの柱穴の平面形は円形で、径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.5 ~ 0.6 m である。そのほか、これらの柱穴と壁の間にも数個の柱穴がある。これらは径 0.2 ~ 0.5 m、深さ 0.1 m と小規模である。建物の貼床下は建物の中央部に比べると壁沿いのほうが 0.05 m 程度低い。建物の構築にあたり、中央部よりも壁沿いを少し低く、掘りくぼめたことがうかがわれる。遺物は弥生土器・石器・勾玉など整理箱半分程度出土した。398 は蛇紋岩製

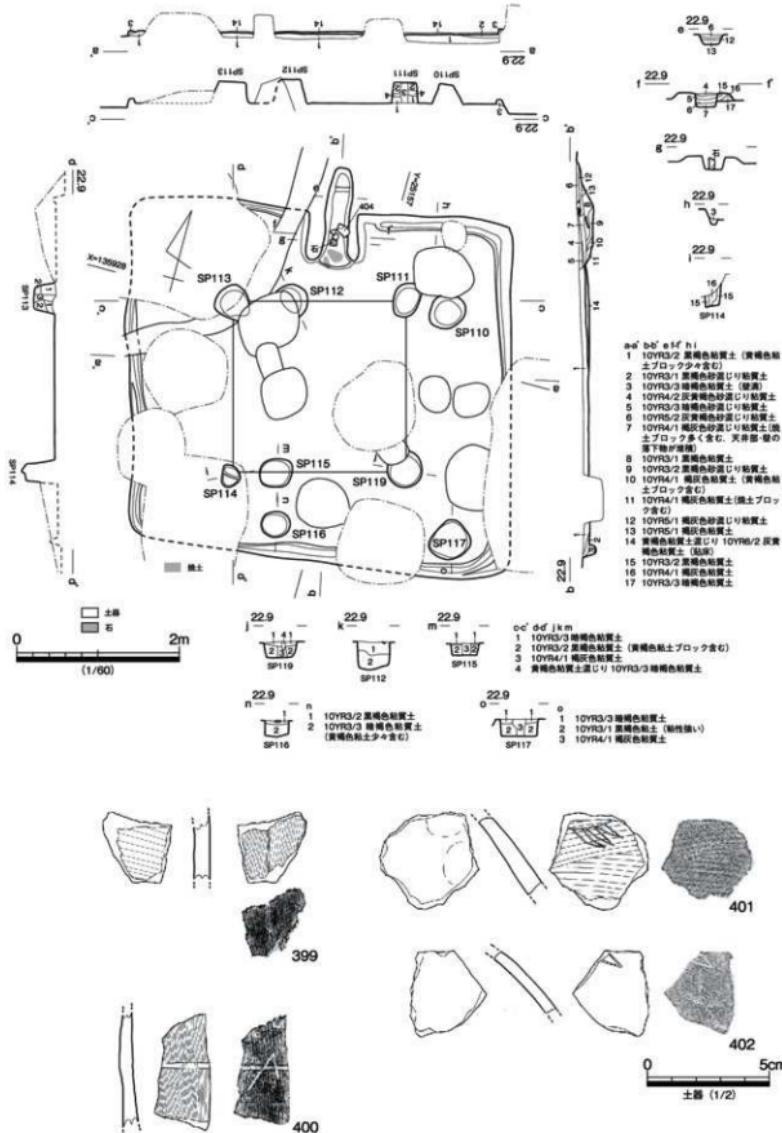


図 51 7-9 区 SH01(1)

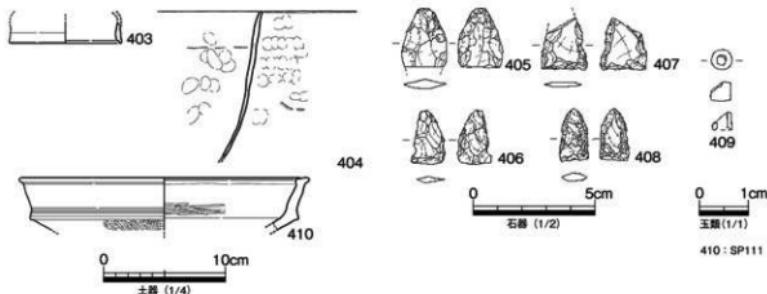


図 52 7-9 区 SH01(2)

の勾玉である。出土土器の中には弥生時代中期の土器もみられるが、大部分の土器は弥生時代後期前半新段階から後期後半古段階に属することから、SH04 は弥生時代後期前半新段階から後期後半古段階のものと考えられる。

7-9 区 SH01 (図 51・52)

7-9 区西北部で検出された堅穴建物である。一部は擾乱によって削平され、奈良時代の掘立柱建物 SB01、古墳時代の溝 SD1304 と重複し、削平される。これらの遺構よりも SH01 のほうが古い。また、SH01 の下部には弥生時代後期から終末期の堅穴建物 SH09・SH11 が存在しており、この周辺では数棟の堅穴建物が重複する。SH01 の平面形は方形を呈し、短辺 4.4 m、長辺 4.7 m、深さ 0.1 m である。壁沿いには幅 0.2 cm、深さ 0.1 cm の壁溝が巡り、北壁には竈がある。竈の袖は暗褐色及び褐灰色の粘質土で構築される。竈の煙道部は短く、緩やかに斜めに外方に上がる。煙道部の天井は残存していなかった。竈の焚口付近は焼土が堆積し、その奥には直方体の自然石が立ち、さらにその奥からは土師器瓶 (404) が出土した。主柱穴は SP113・SP111・SP119・SP114 の 4 個である。これらの柱穴は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m である。遺物は整理箱 3 箱程度出土した。遺物の大半は弥生時代後期前半の土器片で、土師器・須恵器片が少量出土した。399 ~ 402 は弥生土器壺の体部片である。いずれも外面にヘラ状工具による文様が描かれる。399 は縦線が 1 条、400 は横線 1 条と逆 V 字状、401 は龍の足のような文様、402 も V 字状の文様がある。409 は滑石製の白玉である。出土遺物の大部分は弥生土器片であるが、少量の土師器・須恵器が出土していることや竈が設置されていることから、SH01 は古墳時代の建物跡と考えられる。須恵器・土師器はいずれも小片であることから、詳細な時期のわかるものは少ないが、403 は陶邑須恵器編年 TK47 型式～MT15 型式に属することから、SH01 は 6 世紀前葉のものと考えられる。

7-9 区 SH02 (図 53)

7-9 区のほぼ中央で検出された堅穴建物である。一部は擾乱によって削平され、古墳時代後期の掘立柱建物跡 SB02 と重複する。SH02 のほうが古い。SH02 の平面形は方形で、長辺 4.3 m、短辺 4.0 m、深さ 0.2 m である。壁沿いには幅 0.1 ~ 2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。床面からは数個の柱穴が検出された。いずれも径 0.2 m、深さ 0.1 m で、小規模である。主柱穴は建物の四隅の内側にある柱穴 SP126・SP124・SP132・SP129 の 4 個と考えられる。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄器が整理箱半分程度出土した。425 は鉄鎌である。鎌の先端は直線的で逆 V 字状になる。411 ~ 422 は弥生

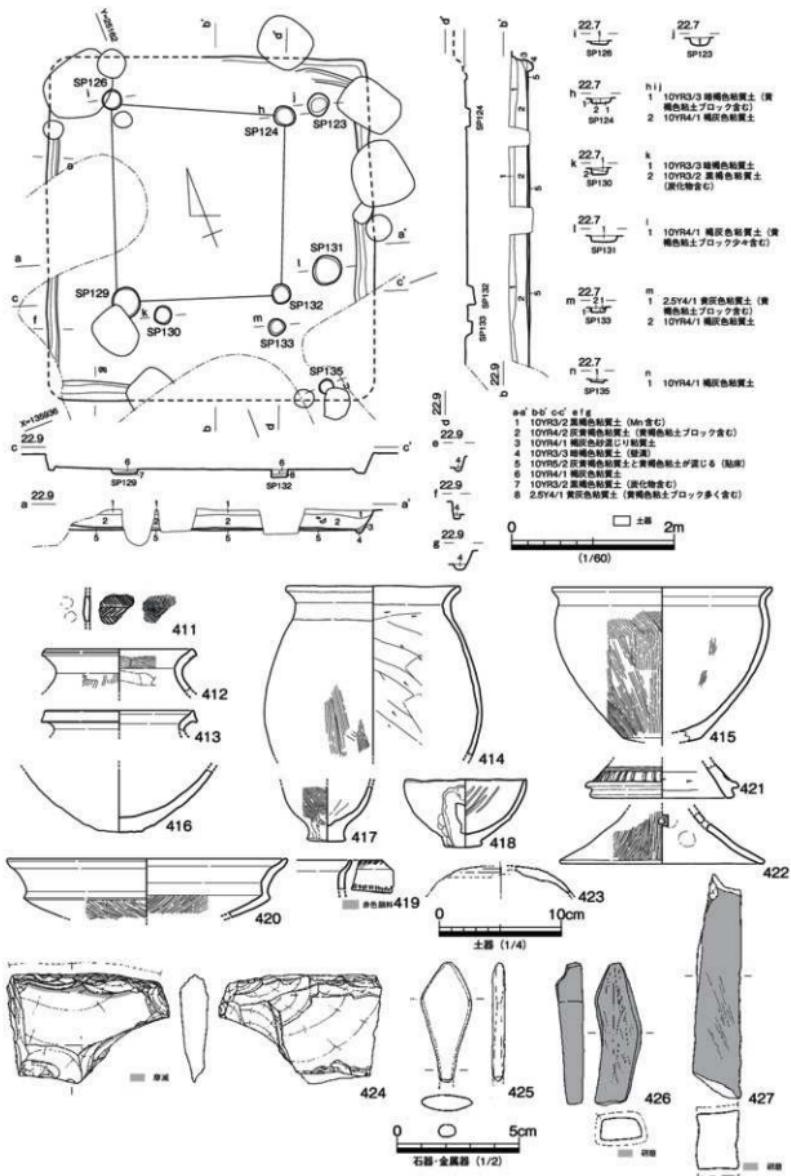


図53 7-9区SH02

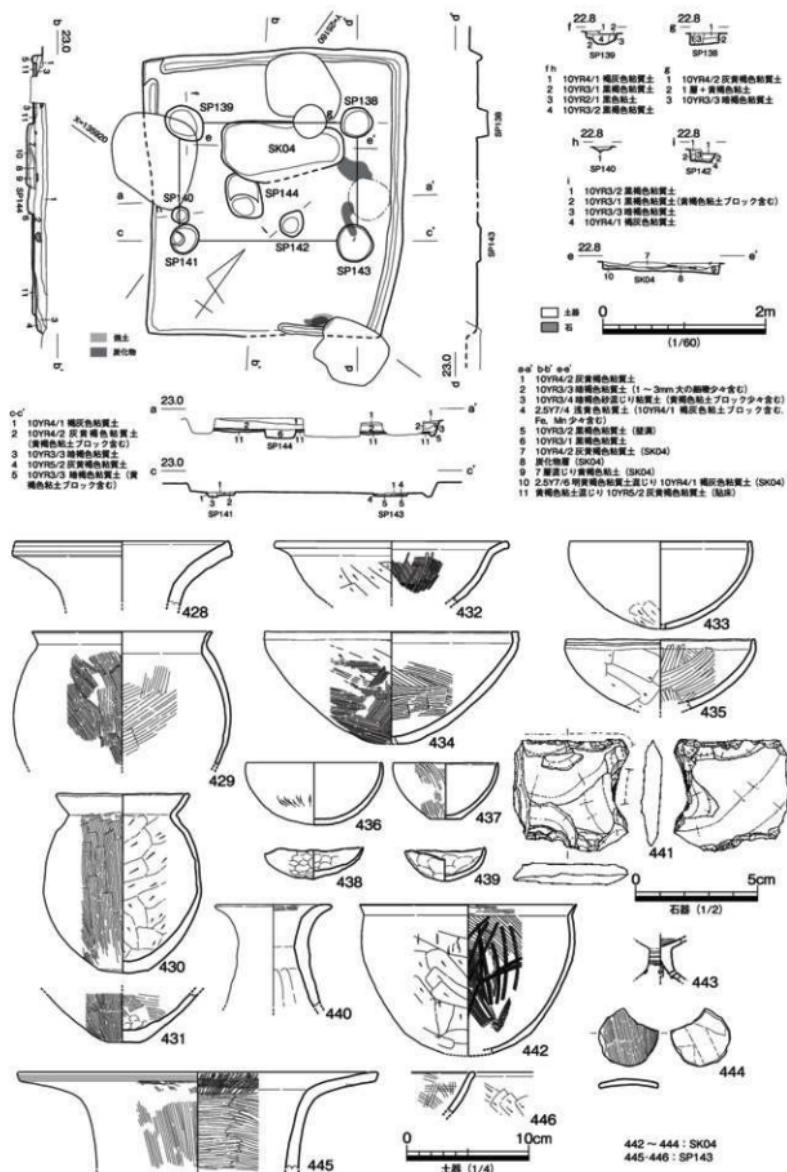


図 54 7-9 区 SH03

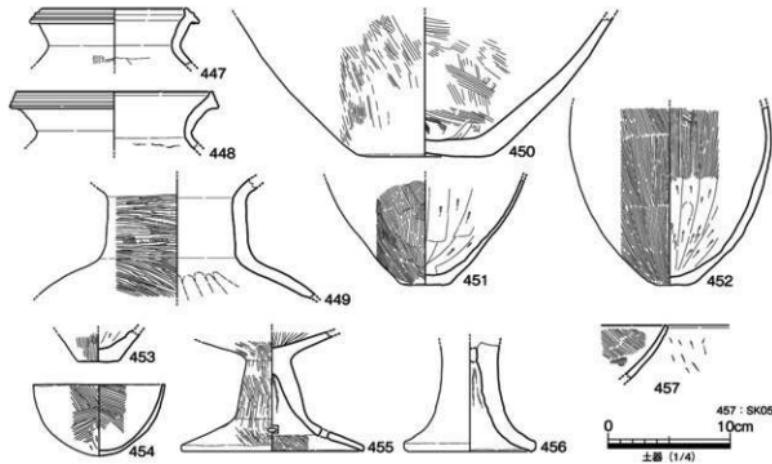
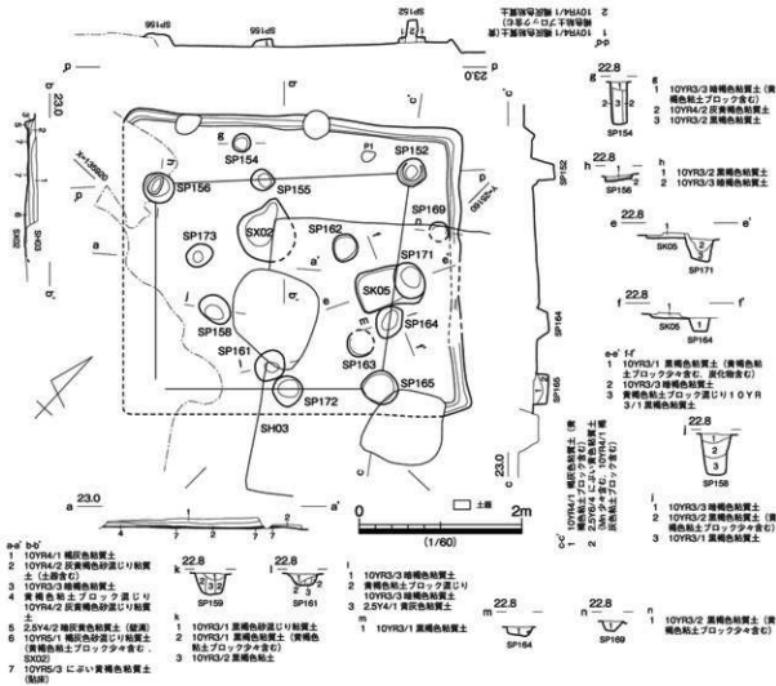


図 55 7-9 区 SH04

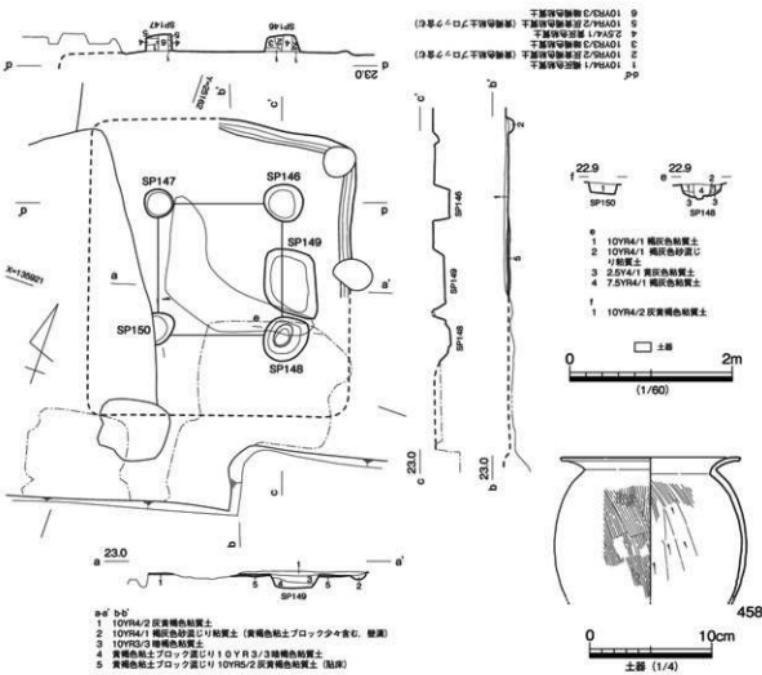


図 56 7-9 区 SH05

時代中期・後期の土器で、418は焼成破裂する。423は須恵器蓋である。須恵器蓋の破片が出土しているが、大部分の土器は弥生時代後期後半のものであることから、須恵器片は混入と考えられ、SH02は弥生時代後期後半のものと考えられる。

7-9 区 SH03 (図 54)

7-9 区南西部で検出された竪穴建物である。一部は攪乱によって削平される。平面形は方形で、長辺 3.5 m、短辺 3.1 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。建物の中央やや北西寄りに土坑 SK04 がある。SK04 の平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸 1.5 m、短軸 0.7 m、断面形は箱形で、深さ 0.1 m である。埋土中位には薄い炭化物層が堆積する。また、建物の床面にも焼土と炭化物層が堆積する。主柱穴は SP139 · SP138 · SP143 · SP141 の 4 個である。これらは径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.05 ~ 0.15 m である。遺物は弥生土器・石器が整理箱 1 箱程度出土した。大部分の出土土器は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階に属することから、SH03 は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階のものと考えられる。

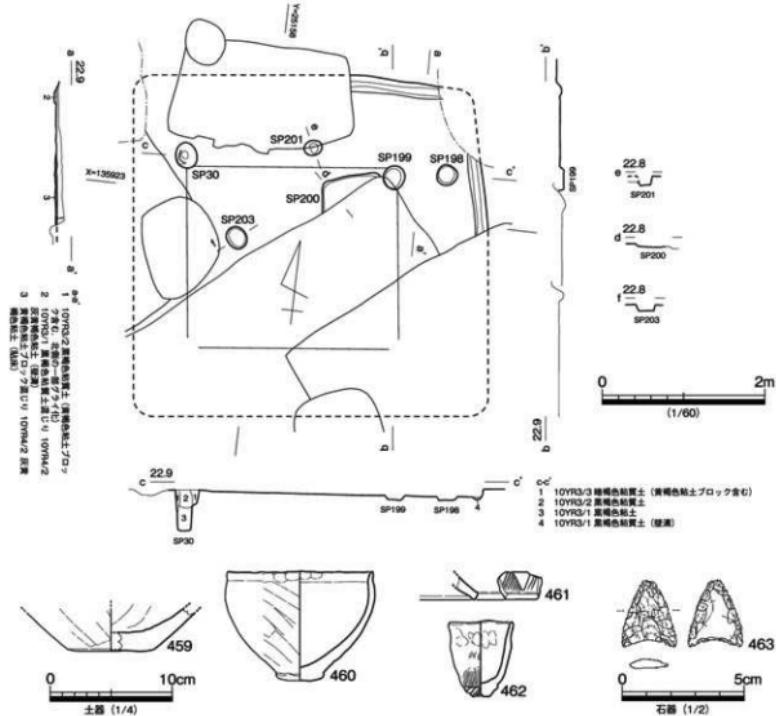
7-9 区 SH04 (図 55)

7-9 区南西部で検出された竪穴建物である。弥生時代終末期から古墳時代前期前半古段階の竪穴建物 SH03 と重複し、削平される。SH03 のほうが新しい。南西部は攪乱によって、削平される。残存部分

から平面形は方形で、長辺 4.2 m、短辺 3.7 m、深さ 0.1 m と推定される。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。主柱穴は SP156・SP165・SP152 の 3 個が検出された。本来は 4 個と考えられるが、建物の南部は擾乱によって削平されているため、1 個は未検出である。遺物は弥生土器・石器が整理箱 1 箱程度出土した。弥生時代中期後半の土器もみられるが、大部分の土器は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階に属することから、SH04 は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階のものと考えられる。

7-9 区 SH05 (図 56)

7-9 区南部で検出された堅穴建物である。建物の西部は SH03 と重複し、削平される。SH05 の残存状態は悪く、最も深いところで 0.05 m である。北東部の壁溝の形状から平面形は方形で、1 辺 3.3 m 前後と推定される。壁溝は幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m である。床面で検出された SP147・SP146・SP148・SP150 の 4 個の柱穴は径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m である。これらは主柱穴の可能性が高い。遺物は土器・石器が少量出土した。形態の分かる土器は少ないが、458 は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階に属することから、SH05 は弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階のものと考えられる。



7-9 区 SH06 (図 57)

7-9 区西部で検出された竪穴建物である。SH12・SH04・SH03 と重複しており、削平されるため、建物の一部が残存するにすぎないが、残存する壁溝から平面形は方形で、1辺 3.2 m 程度と推定される。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。床面からは SP30・SP199 が検出された。これらは主柱穴の可能性が高い。SP30 は径 0.3 m、深さ 0.5 m であるが、SP199 は径 0.3 m、深さ 0.05 m と浅い。遺物は弥生土器・石器が少量出土した。土器はいずれも弥生時代後期後半古段階に属することから、SH06 は弥生時代後期後半古段階のものと考えられる。

7-9 区 SH07 (図 58)

7-9 区南部で検出された竪穴建物である。西部は攪乱や SH03・SH06 と重複しており、削平される。残存部分から平面形は方形で、1 辺 4.0 ~ 4.3 m 前後、深さ 0.1 m と推定される。一部途切れるところがあるが、壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。建物の北東隅付近にある SP189 は径 0.25 m、深さ 0.2 m で、主柱穴と考えられる。主柱穴は 4 個と考えられるが、3 個は不明である。遺物は土器・石器・玉類が整理箱半分程度出土した。473 ~ 475 は貼床中から出土した遺物である。473 は弥生土器壺の体部片で、外面に数条の沈線があり、赤色顔料が塗布される。吉備地方からの搬入品で、弥生時代後期前半の壺である。475 はガラス製の玉で、青色である。一部の土器は弥生時代後期前半のものであるが、出土土器の大部分は弥生時代終末期から古墳時代前期前半古段階に属することから、SH07 も弥生時代終末期から古墳時代前期前半古段階のものと考えられる。

7-9 区 SH08 (図 59)

7-9 区北東部から 7-8 区北西部で検出された竪穴建物である。平面形はややいびつな方形で、長辺 4.7 m、短辺 3.7 m、深さ 0.2 m である。建物の北東部は古墳時代から奈良時代の溝 SD23、西部は古墳時代後期の竪穴建物 SH02 と重複し、一部が削平される。SH08 の中央部には土坑 SK06 がある。平面形は雪だるま状で、長軸 2.0 m、短軸 1.0 m 前後、深さ 0.05 m である。SK06 の底面からは炭化物・焼土が出土した。主柱穴は SP177・SP186・SP184・SP180 の 4 個と考えられる。これらの柱穴は径 0.2 ~ 0.4 m、深さ 0.3 m である。遺物は弥生土器・石器・玉類が整理箱 1 箱程度出土した。484 はガラス製の小玉で、緑色である。大部分の土器は弥生時代後期後半に属することから、SH08 は弥生時代後期後半のものと考えられる。

7-9 区 SH09 (図 60・61)

7-9 区北西部で検出された竪穴建物である。古墳時代後期の竪穴建物 7-9 区 SH01、弥生時代から古墳時代の竪穴建物 7-13 区 SH10・SH11、古代の掘立柱建物跡 7-9 区 SB01 と重複し、削平される。また、建物の周囲には数個の攪乱坑があり、削平される。残存部分から平面形はややいびつな円形で、南東部に方形の張り出しをもつ。張り出しを含めた長辺は 6.0 m、短辺は 5.2 m である。張り出しの床面は建物の床面よりも 0.05 m 高く、張り出しの壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。壁沿いには数個の柱穴がある。SP246・SP230・SP235・SP319・P248 は径 0.4 ~ 0.7 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m で、主柱穴の可能性が高い。建物中央部には土坑 SP252 がある。攪乱によって削平されているため、半分しか残存していないかったが、平面形は橢円形、残存部分の長さは 0.7 m、深さ 0.2 m で、焼土が堆積していた。遺物は弥生土器・石器が整理箱 2 箱程度出土した。503 は土製品であるが、形態や用途は不明である。504 はガラス製の小玉で、青色である。大部分の土器は弥生時代後期前半新段階に属することから、SH09 は弥生時代後期前半新段階のものと考えられる。

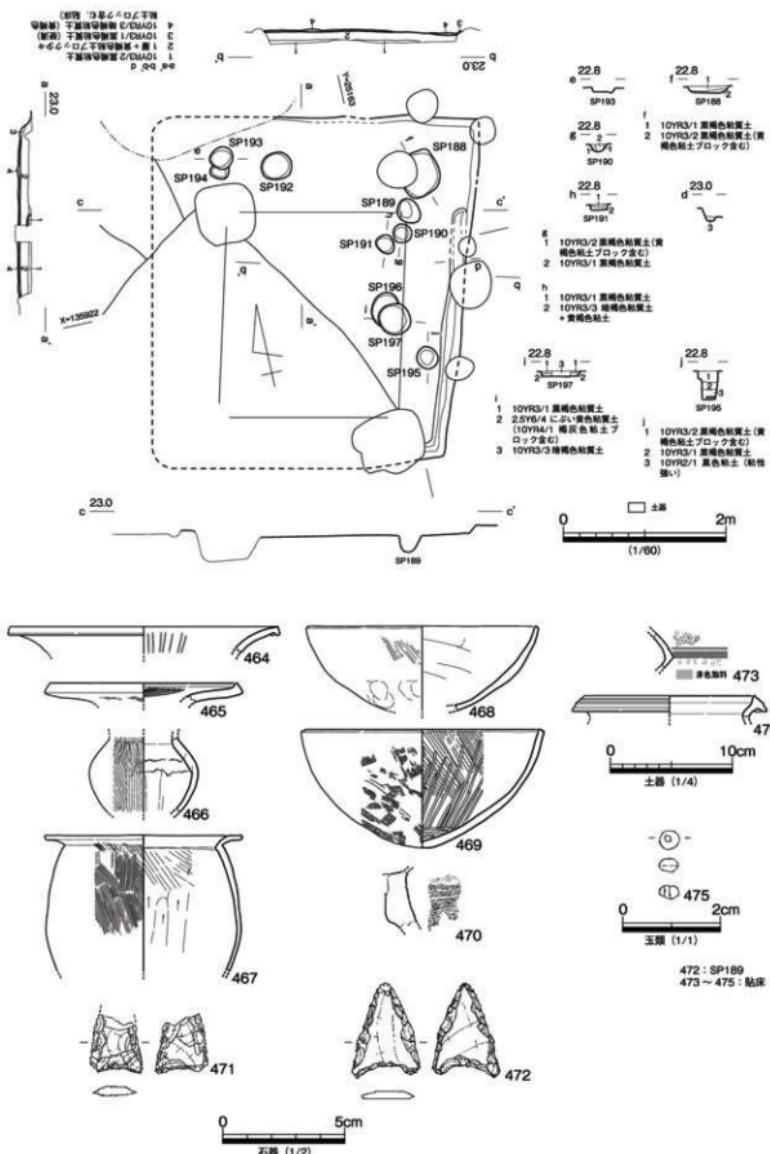


図 58 7-9 区 SH07

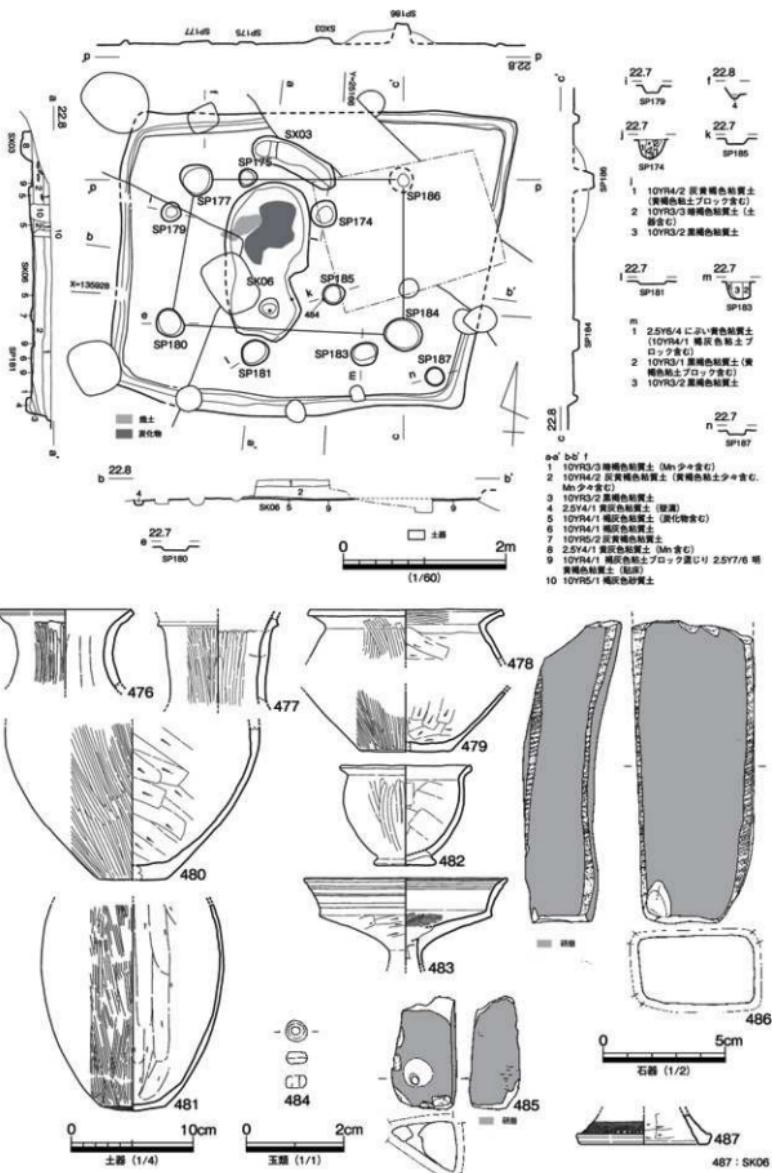


図 59 7-9 区 SH08

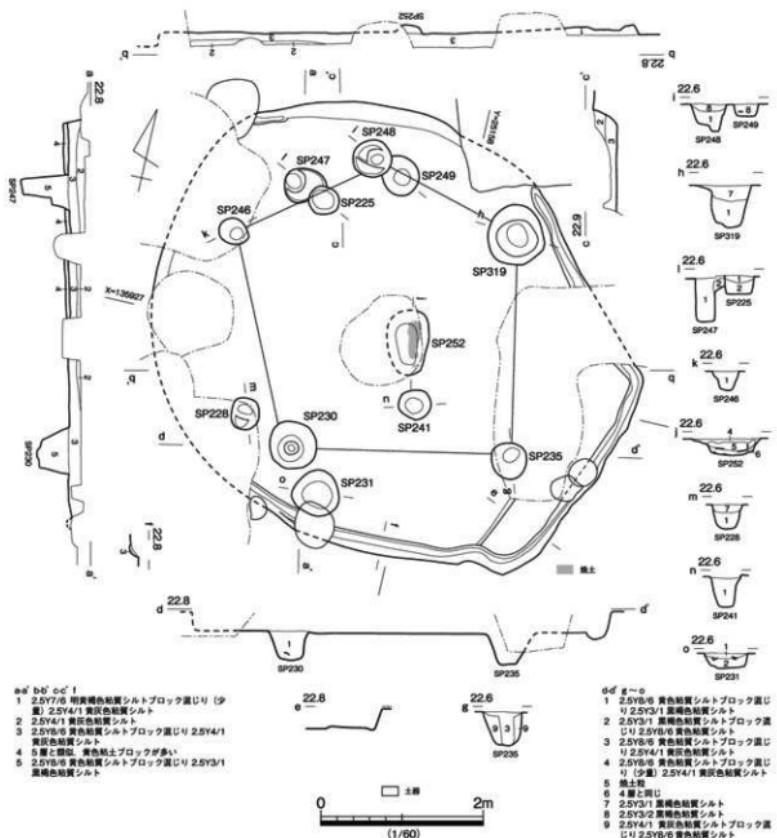


図 60 7-9 区 SH09(1)

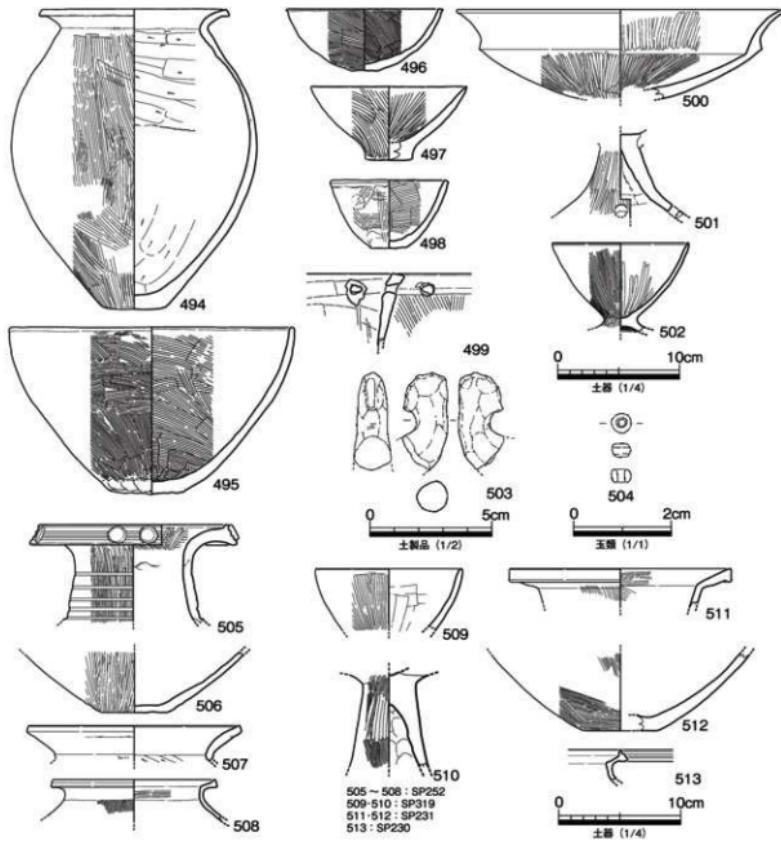
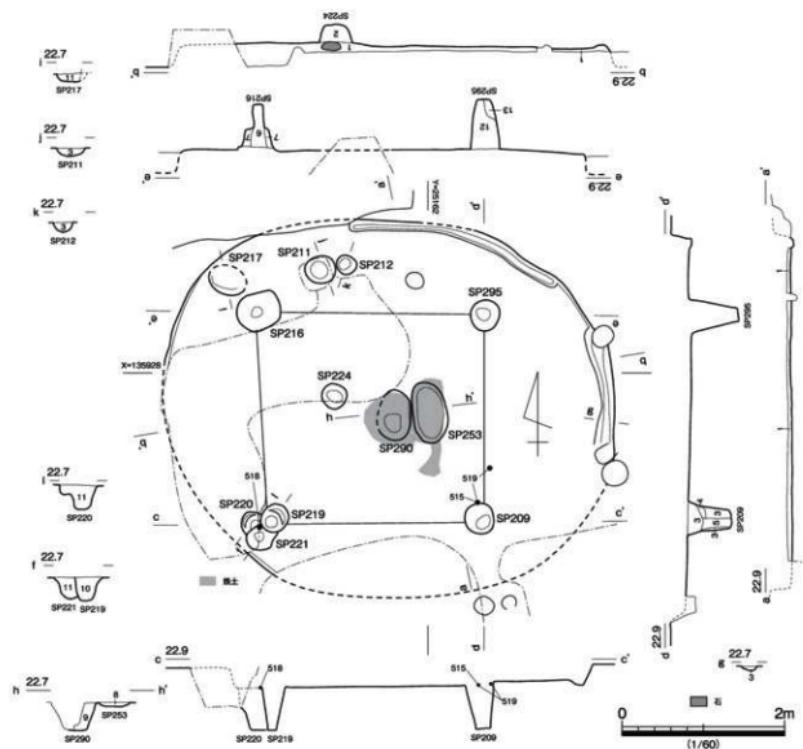


図 61 7-9 区 SH09(2)



a-a' b-b' d-d' e-e' f g h-h' i-i'

- 1 2.57/7.0 明黄色地黄土質シルトに、赤色地黄土質ブロック混じり 2.5Y5/1 赤
 - 2 黄褐色地黄土質シルト
 - 3 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 4 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 5 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 6 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 7 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 8 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 9 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 10 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 11 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 12 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト
 - 13 2.57/8.0 黄褐色地黄土質シルト

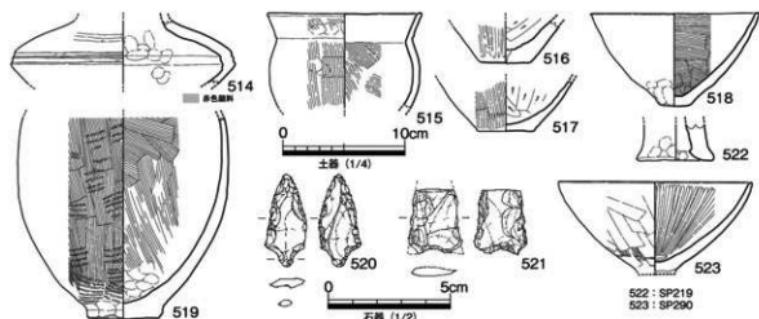


図 62 7-9 区 SH10

7-9 区 SH10 (図 62)

7-9 区は中央部で検出された堅穴建物である。南西部は調査区外に連続し、弥生時代終末期の堅穴建物 SH11、古墳時代の堅穴建物 SH02、弥生時代後期後半の堅穴建物 SH08、古代の掘立柱建物 SB03 と重複し、削平される。残存する部分は少ないが、平面形は円形で、径 5.7 m と考えられる。上部は SH02・SH08 によって削平されている部分が多いが、残りの良い部分で床面までの深さは 0.25 m である。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。中央部には浅い落ち込み (SP253) がある。SP253 の埋土には炭化物が多量に混じり、埋土上部には焼土が広がっていた。炉であろう。主柱穴は SP216・SP295・SP209・SP219 の 4 個と考えられる。これらの柱穴は径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。遺物は弥生土器・石器が整理箱 1 箱程度出土した。514 は弥生土器壺の体部片である。体部中央部外面に弦線があり、赤彩がある。玉ねぎ形の体部をもつ長頸壺である。吉備地方からの搬入品である。弥生時代後期前半のものである。その他の弥生土器は在地のもので、弥生時代後期前半新段階に属することから、SH10 は弥生時代後期前半新段階のものと考えられる。

7-9 区 SH11 (図 63)

7-9 区北西端で検出された堅穴建物である。古墳時代の溝 SD1304、古代の掘立柱建物跡 SB01 と重複し、

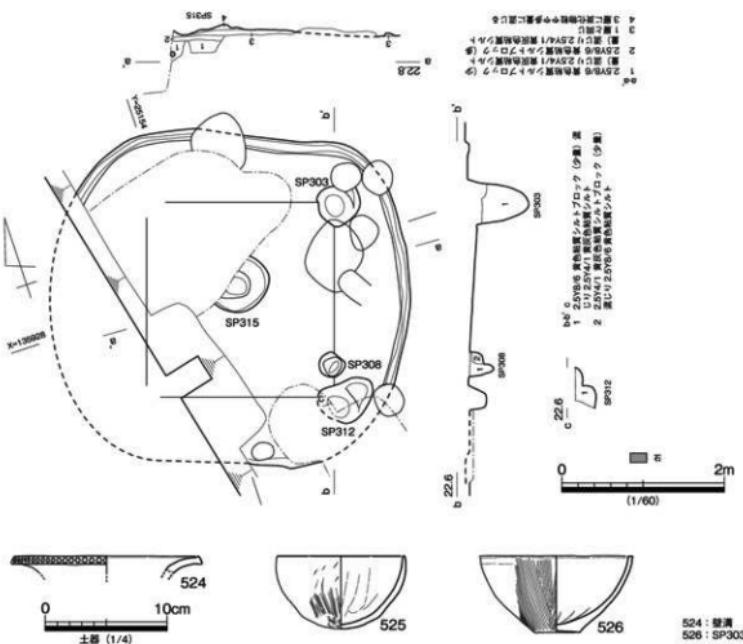


図 63 7-9 区 SH11

削平を受ける。また、遺構の西部は調査区外に連続し、遺構の北西部・南部は擾乱を受け、削平されるため、建物の半分程度が残存するにすぎない。残存部分から平面形はやや丸みを帯びる隅丸方形で、1辺は4.1m前後と推定される。主柱穴と考えられるSP303・SP312は径0.3～0.5m、深さ0.3～0.6mである。中央部には径0.7m、深さ0.1mの落ち込み（SP315）がある。SP315からの埋土には炭化物が混じる。壁沿いには幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が巡る。遺物は弥生土器・石器が少量出土した。出土土器は少量であるが、弥生時代終末期に属することから、SH11は弥生時代終末期のものと考えられる。

7-9 区 SH12（図64）

7-9区西端で検出された堅穴建物である。建物の西部は調査区外に連続するため不明である。建物の壁は検出できず、壁溝だけが検出された。平面形は方形で、1辺4.6m程度、壁溝は幅0.1～0.2m、深さ0.05mである。遺物は須恵器・土師器片が壁溝・柱穴から数片出土した。壁溝から須恵器片が出土していることから、古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH03（図65）

7-13区南西端で検出された堅穴建物である。西部は調査区外に連続し、南部は擾乱のため削平されており、建物の北東端の一部が残存しているにすぎない。残存部分から平面形は方形で、1辺1.9m以上と推定される。壁沿いには幅0.2～0.3m、深さ0.05mの壁溝がある。床面からは柱穴SP604が検出された。SP604は径0.3m、深さ0.2mで、埋土から弥生土器壺の口縁部片（527）が出土した。弥生土器片が出土したが、建物の平面形が方形であることや周辺の建物の方位から、SH03は古墳時代後期のものと考えられる。

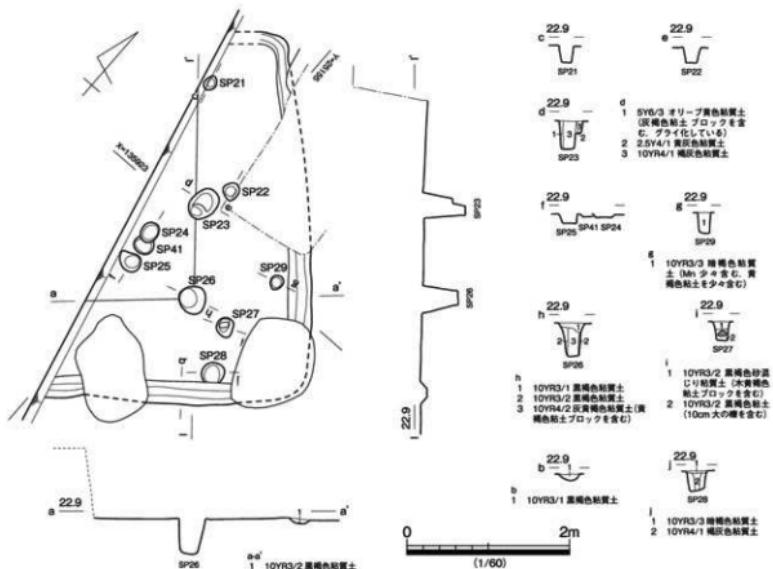


図64 7-9区 SH12

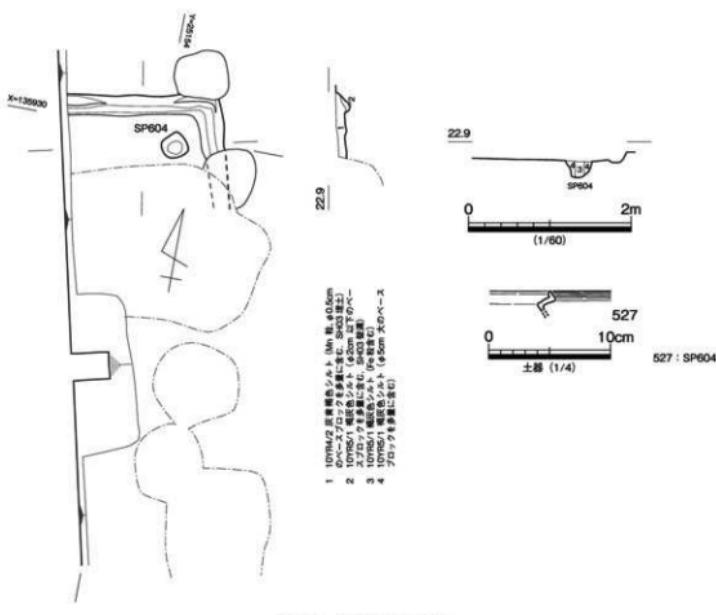


図 65 7-13 区 SH03

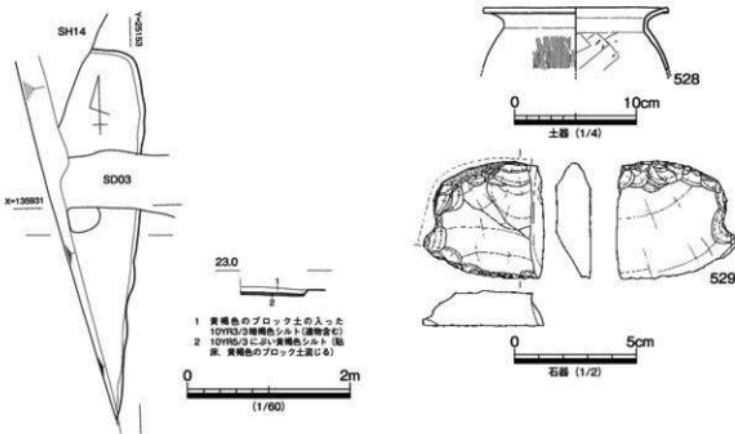


図 66 7-13 区 SH04

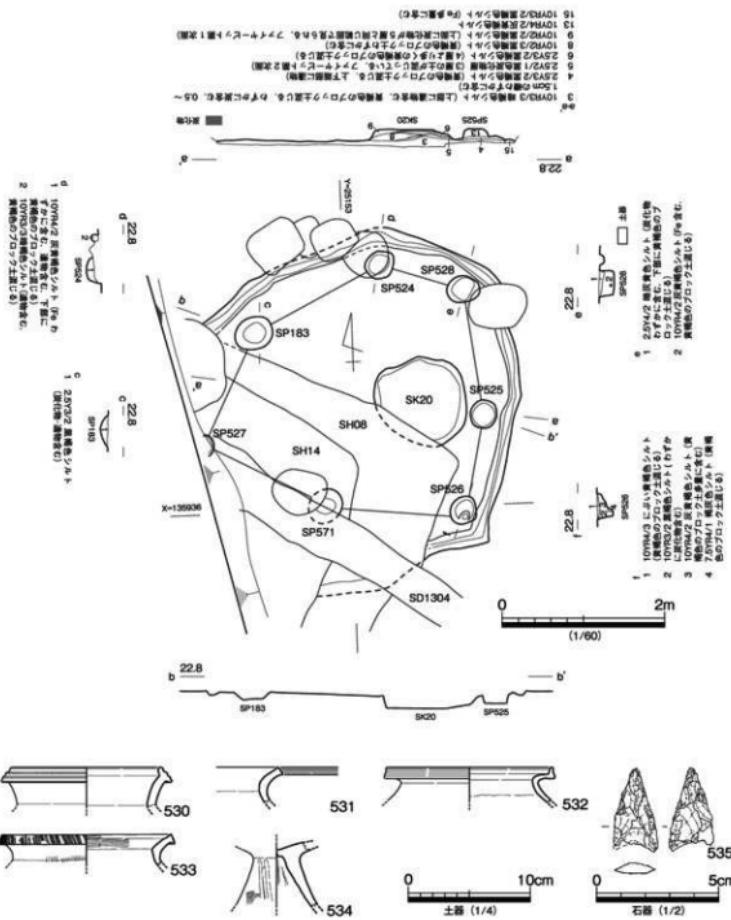


図 67 7-13 区 SH05

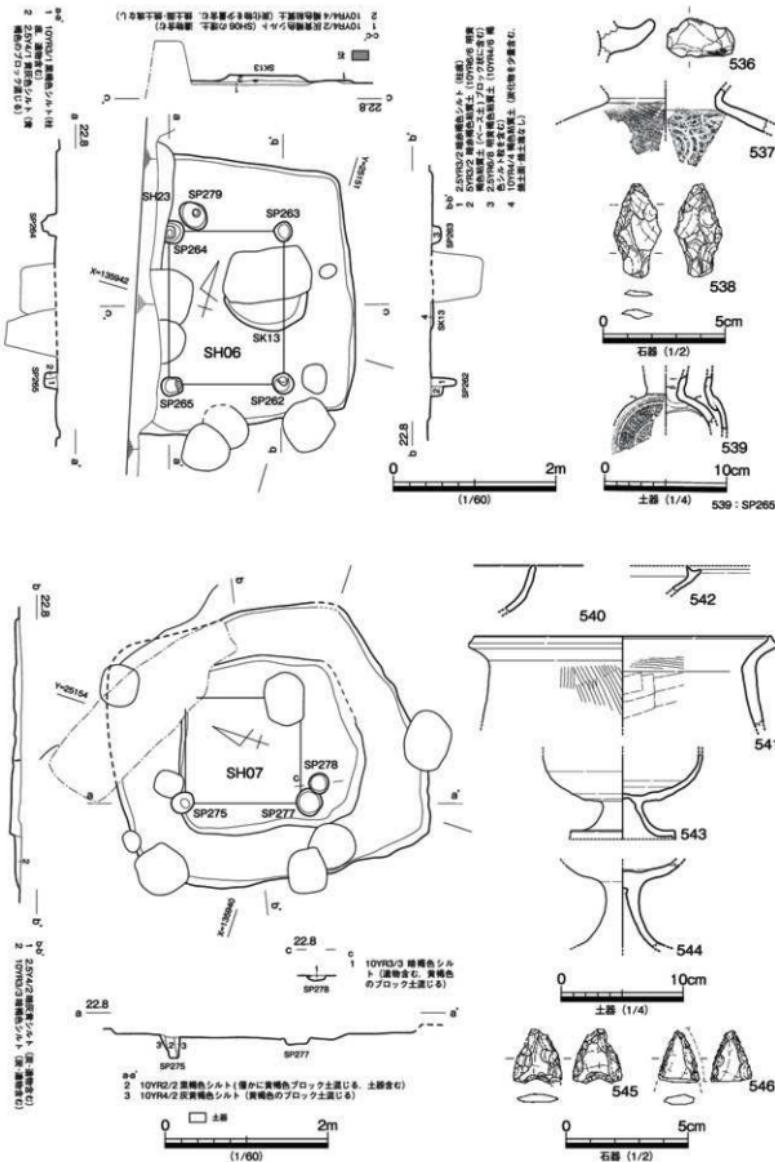


図 68 7-13 区 SH06・7-13 区 SH07

7-13 区 SH04 (図 66)

7-13 区西端で検出された堅穴建物である。大部分は調査区外に連続し、古墳時代の堅穴建物 SH14、古墳時代の溝 SD03 と重複し、削平される。残存部分から平面形は方形と推定される。残存長は 4.5 m、現存幅は 1.0 m、深さ 0.1 m である。柱穴は未検出である。遺物は土器・須恵器片が少量出土しただけである。そのほか少量の焼土塊や炭化材が出土した。須恵器は小片 3 点だけで、大部分の土器は弥生時代後期後半に属することから、SH04 は弥生時代後期後半のものと考えられる。

7-13 区 SH05 (図 67)

7-13 区西端で検出された堅穴建物である。古墳時代の溝 SD1304 や堅穴建物 SH14・SH08 と重複し、削平される。残存部分から SH05 の平面形は南部に張り出しをもつ八角形であると推定される。長軸 4.6 m、短軸 4.0 m、深さ 0.05 m である。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡る。柱穴は壁の内側に 7 個検出された。これらの柱穴は径 0.3 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m で、いずれも主柱穴と考えられる。また、建物内の床面には平面形が楕円形で、長軸 1.1 m、短軸 0.7 m の土坑 SK20 が検出された。SK20 の埋土には中位と底面の 2 層に炭化物層がみられる。遺物は弥生土器・石器が整理箱 1 箱程度出土した。弥生時代中期後半の土器も少量含むが、大部分の土器は弥生時代後期前半に属することから、SH05 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-13 区 SH06 (図 68)

7-13 区北西端で検出された堅穴建物である。西部から南部は古墳時代の柱穴と重複し、西部は古墳時代の堅穴建物 SH23・SH24 と重複し、削平される。また、西部は調査区外に連続するため、全体は不明であるが、残存部分から平面形は方形と推定される。残存部分の 1 辺は 3.5 m、深さは 0.05 m である。建物内には中央部やや東寄りには土坑 SK13 がある。SK13 は古代の柱穴 SP260 によって一部削平されるが、残存部分の長軸は 1.0 m、短軸 0.4 m で、深さ 0.05 m である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。埋土には炭化物を少量含む。主柱穴は SP264・SP263・SP262・SP265 の 4 個である。これらの柱穴は径 0.25 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m である。遺物は土器・須恵器・石器が整理箱半分程度出土した。土器・須恵器はいずれも小片であるが、古墳時代後期の須恵器が出土していることから、SH06 は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH07 (図 68)

7-13 区西部で検出した堅穴建物である。一部攪乱によって削平される。平面形はややいびつな方形で、長軸 3.7 m、短軸 3.3 m、深さ 0.05 m である。中央部は一段凹んでおり、建物の壁沿いには幅 0.6 ~ 0.8 m のベッド状遺構がみられる。主柱穴は 4 個と考えられるが、攪乱や中世の柱穴による削平で、SP275・SP277 の 2 個しか検出されていない。これらの柱穴は径 0.3 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器が整理箱半分程度出土した。須恵器はいずれも陶邑須恵器編年 TK217 形式に属するが、同時期の溝 SD18 と重複することから、これらの遺物は本来 SD18 に含まれていたもので、建物の方向やベット状遺構の存在から SH07 は弥生時代後期のものと考えられる。SH07 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

7-13 区 SH08 (図 69)

7-13 区西端で検出された堅穴建物である。調査区外に連続し、古墳時代の溝 SD1304 や古墳時代の堅穴建物 SH14 と重複し、削平される。平面形は方形で、1 辺 3.9 m、深さ 0.01 m である。壁沿いには幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.1 m の壁溝が巡る。建物隅で検出された柱穴 SP541・SP538 は主柱穴と考えられる。こ

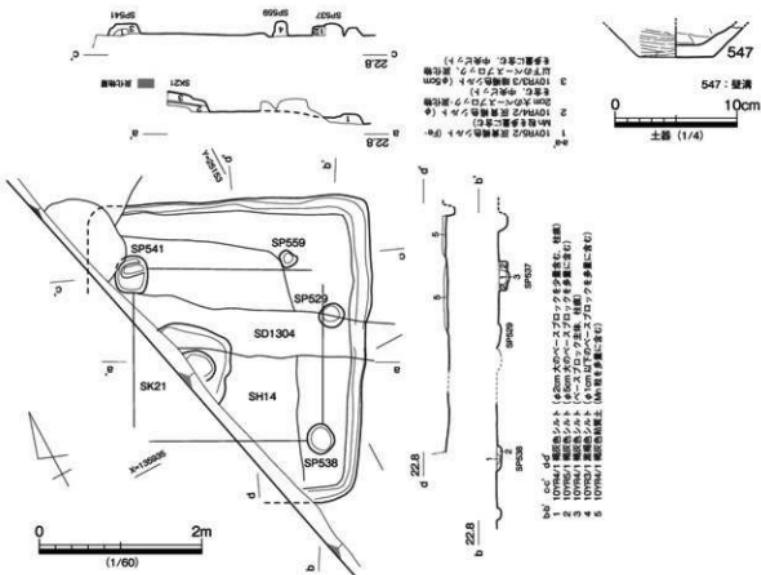


図 69 7-13 区 SH08

これらの柱穴は径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が整理用コンテナ半分程度出土した。図化した土器は弥生時代のものであるが、土師器・須恵器片が出土していることから、SH08 は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH10 (図 70)

7-13 区南部で検出された竪穴建物である。古墳時代の溝 SD03、古墳時代の土坑 SK15 と重複し、削平される。平面形は方形であるが、北壁は直線的ではなく、中央部が内側に凹む。長軸 4.2 m、短軸 3.9 m、深さ 0.15 m である。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.2 m の壁溝が巡る。主柱穴は SP590・SP269・SP535・SP532 の 4 個と考えられる。これらの柱穴は径 0.3 m、深さ 0.15 ~ 0.3 m である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器・金属器が整理箱 1 箱程度出土した。553 は分銅形土製品である。厚さ 1.2 cm と分厚く、大型品である。556 は銅鏡である。中央部に稜をもつ。弥生時代の遺物が多く混じるが、古墳時代後期の土師器壺 (552) や須恵器小片を含むことから、SH10 は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH11 (図 71)

7-13 区南部で検出された竪穴建物である。攪乱によって一部を削平され、古墳時代の土坑 SK15、古墳時代の竪穴建物 SH10 と重複し、削平されており、建物北部の一部が検出されたにすぎない。また、建物の壁は検出されておらず、壁溝と窓下部の凹みが検出されただけである。建物の北壁には窓があり、底面には焼土が堆積する。窓の袖や天井部は検出されなかった。壁沿いには幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.2 m

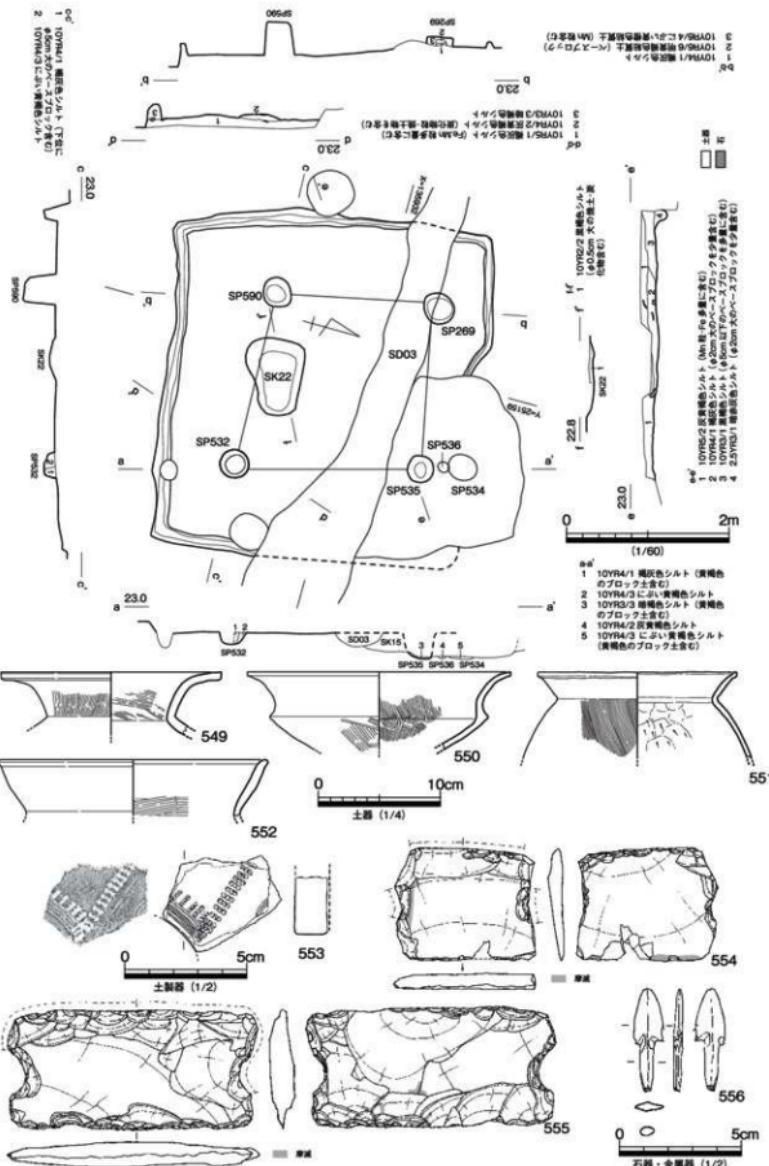
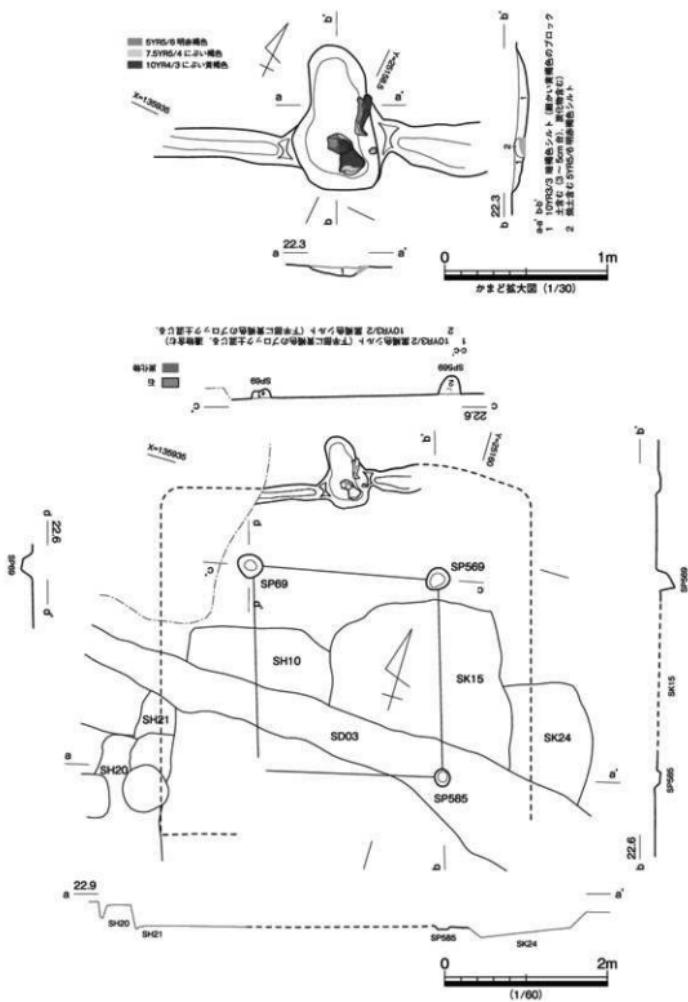


図 70 7-13 区 SH10



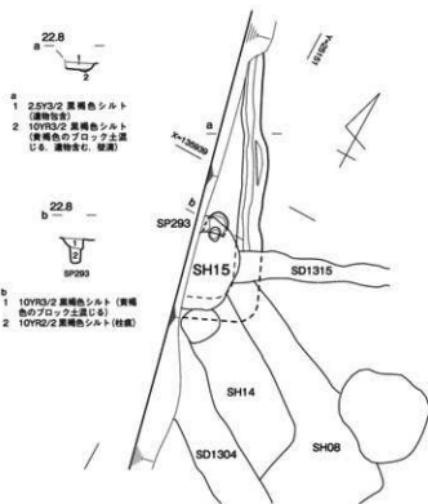
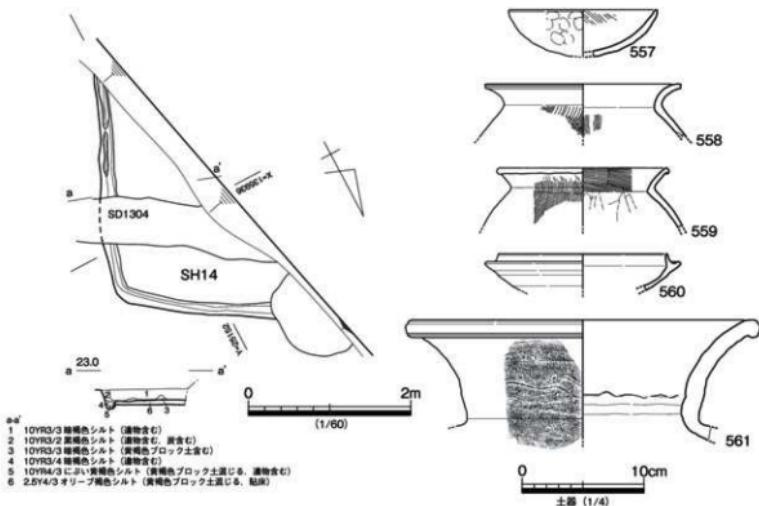


図 72 7-13 区 SH14-7-13 区 SH15

の壁溝がある。主柱穴はSP69・SP569・SP585で、もう1個は未検出である。これらの柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mである。遺物は少量の土器片が出土しただけで詳細な時期は不明であるが、竪が設置されていることから、SH11は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH14（図72）

7-13区西端で検出された竪穴建物である。古墳時代の溝SD1304、古代の柱穴跡SP229と重複し、削平される。また、古墳時代後期の竪穴建物SH08、弥生時代の竪穴建物SH04と重複するが、SH14のはうが新しい。構造西部は調査区外に連続するため、建物の東部以外は不明である。平面形は方形を呈し、深さ0.2m、1辺2.7m以上である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器が整理箱半分程度出土した。弥生時代の遺物も少量混じるが、須恵器はいずれも陶邑須恵器編年TK209型式に属することから、SH14は6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

7-13 区 SH15（図72）

7-13区西端で検出された竪穴建物である。西部は調査区外に延び、南部は中世の溝SD1315、古代の柱穴跡SP229、古墳時代の竪穴建物SH08・SH14と重複し、削平されるため、全体は不明である。建物の東壁付近の一部が検出された。東壁沿いには幅0.1m、深さ0.05mの壁溝が巡る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器が少量出土した。須恵器を含むことから、SH15は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SH17（図73）

7-13区東部で検出された竪穴建物である。建物の北部を戦時中の塹壕、建物の中央部と西部を古墳時

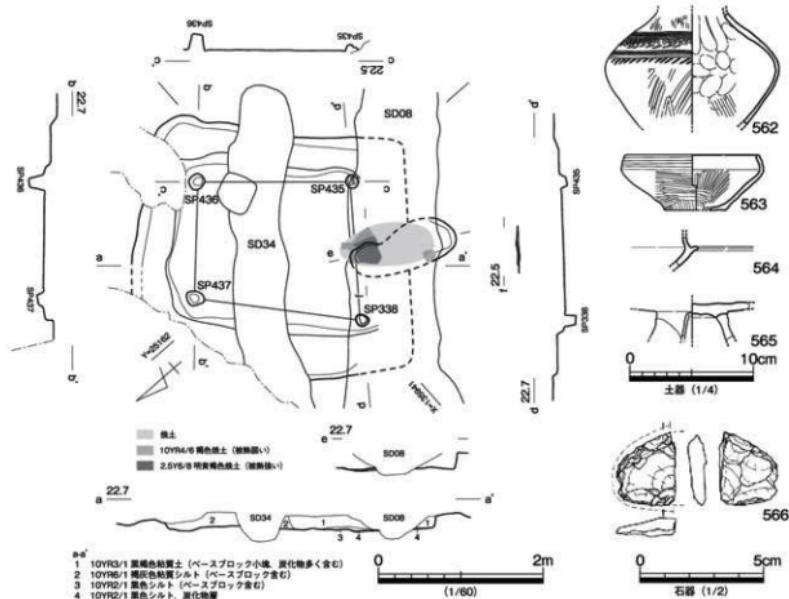


図73 7-13区 SH17

代の溝SD34・SD08に削平される。残存部分から平面形は方形で、1辺3.0～3.6mと考えられる。床面は二段掘りになっており、壁沿いにはベッド状遺構がみられる。南壁沿いには凹みがあり、凹みの中には焼土層が堆積することから、窓と考えられる。主柱穴はベッド状遺構の内側の四隅にある柱穴SP436・SP435・SP338・SP437の4個で構成される。これらの柱穴の径は0.15～0.2m、深さは0.1～0.2mである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器が整理箱1箱程度出土した。須恵器杯(564)はベッド状遺構の内側から、須恵器高杯(565)は埋土中位から出土した。弥生土器も出土しているが、須恵器は陶邑須恵器編年MT15型式に属することから、SH17は6世紀前葉のものと考えられる。

7-13区 SH18(図74)

7-13区西部で検出された竪穴建物である。南西部は古墳時代の竪穴建物SH08・SH14と重複し、削平され、残存状況は良好ではない。平面形は方形で、長軸3.8m、短軸3.3m、深さ0.1mである。壁沿いには幅0.15～0.2m、深さ0.05mの壁溝が巡る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器が少量出土した。567～569は貼床から出土した。567は壺で、弥生時代終末期から古墳時代初頭に属するものであるが、貼床・埋土内から須恵器が数片出土していることから、SH18は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13区 SH20(図75)

7-13区と7-9区の境界付近で検出された竪穴建物である。北部は古墳時代後期の竪穴建物SH10と重複し、削平される。SH20は建物の壁は検出されておらず、壁溝が検出されたにすぎないが、残存部分の壁溝から建物の平面形は方形で、1辺4.5m程度と推定される。壁沿いには幅0.15～0.2m、深さ0.1m

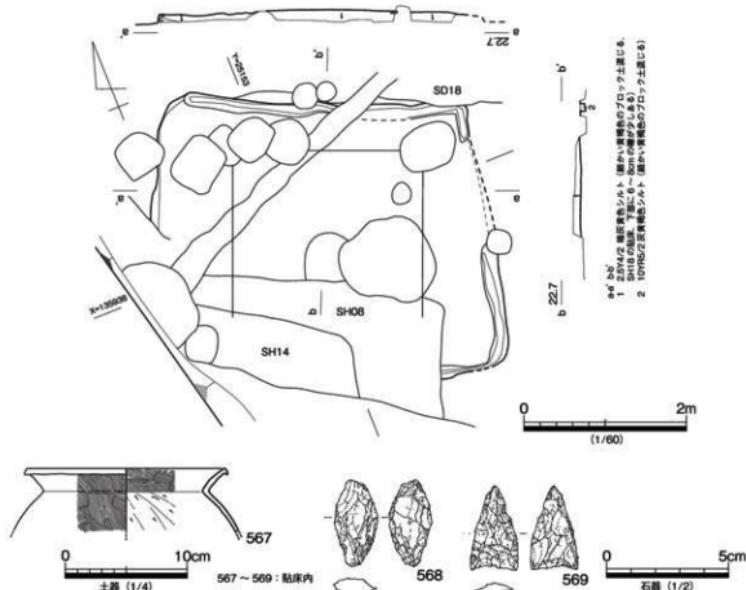


図74 7-13区 SH18

の壁溝が巡る。床面で検出されたSP578・SP110・SP216・SP576はいずれも径0.4～0.5mであるが、SP216の深さは0.5m、その他の柱穴は0.2mである。この4個を主柱穴と考えたが、主柱穴を結ぶラインは壁溝と平行しておらず、いびつである。また、SP216は他の柱穴に比べて0.3mほど深い。SH20の遺物は弥生土器・石器が整理箱1箱程度出土した。570～577は貼床内から出土した土器である。576のように弥生時代後期前半の土器もみられるが、573・577は弥生時代終末期から古墳時代前期前半に属する。壁溝や埋土から出土した土器は弥生時代中期後半から後期前半に属するものだが、建物の時期は貼床内出土の土器の時期よりも新しいと考えられるので、SH20は弥生時代終末期から古墳時代

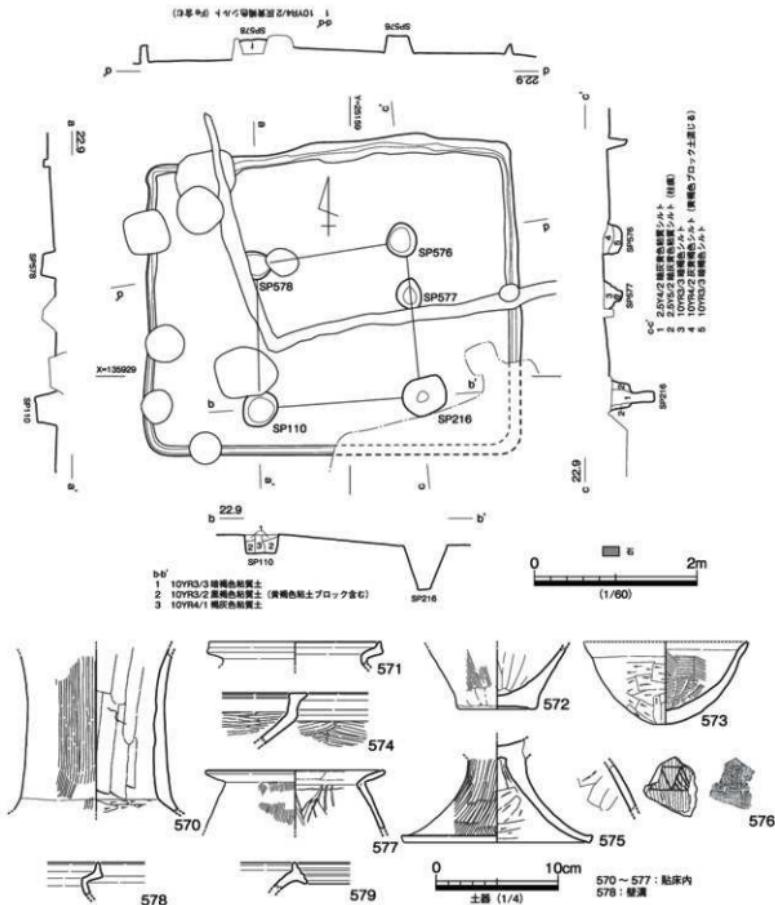


図75 7-13区 SH20

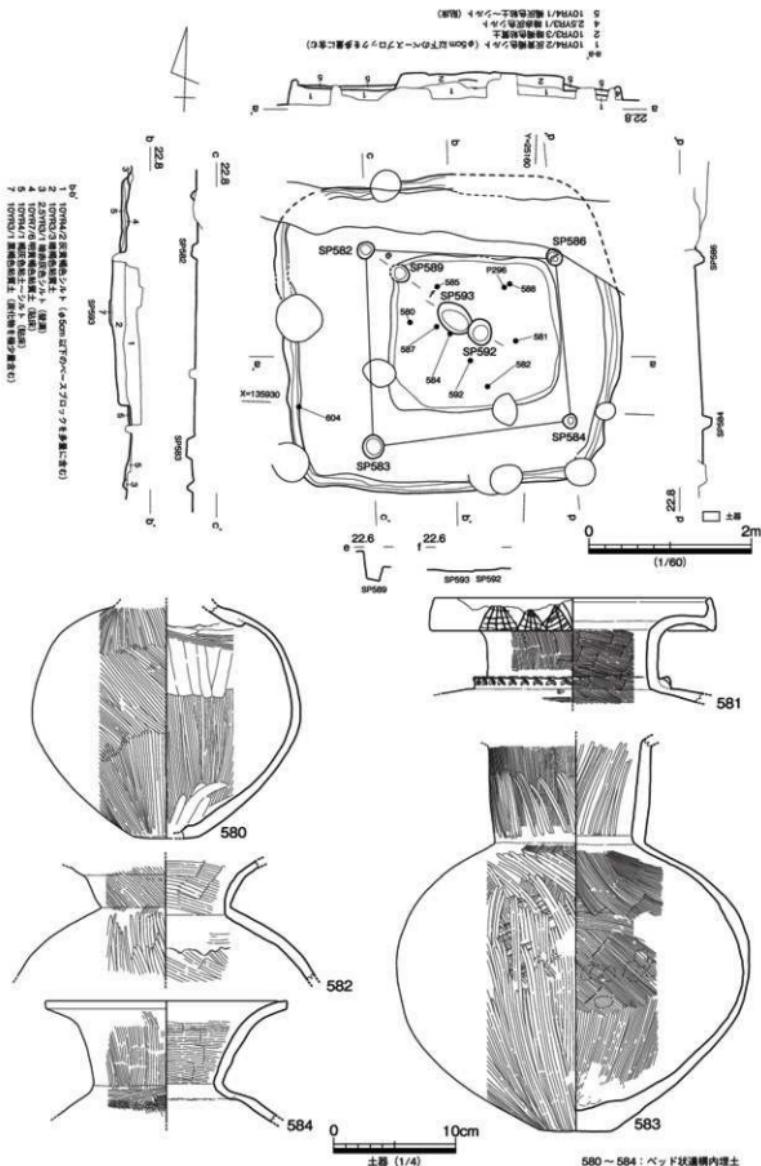


図 76 7-13 区 SH21(1)

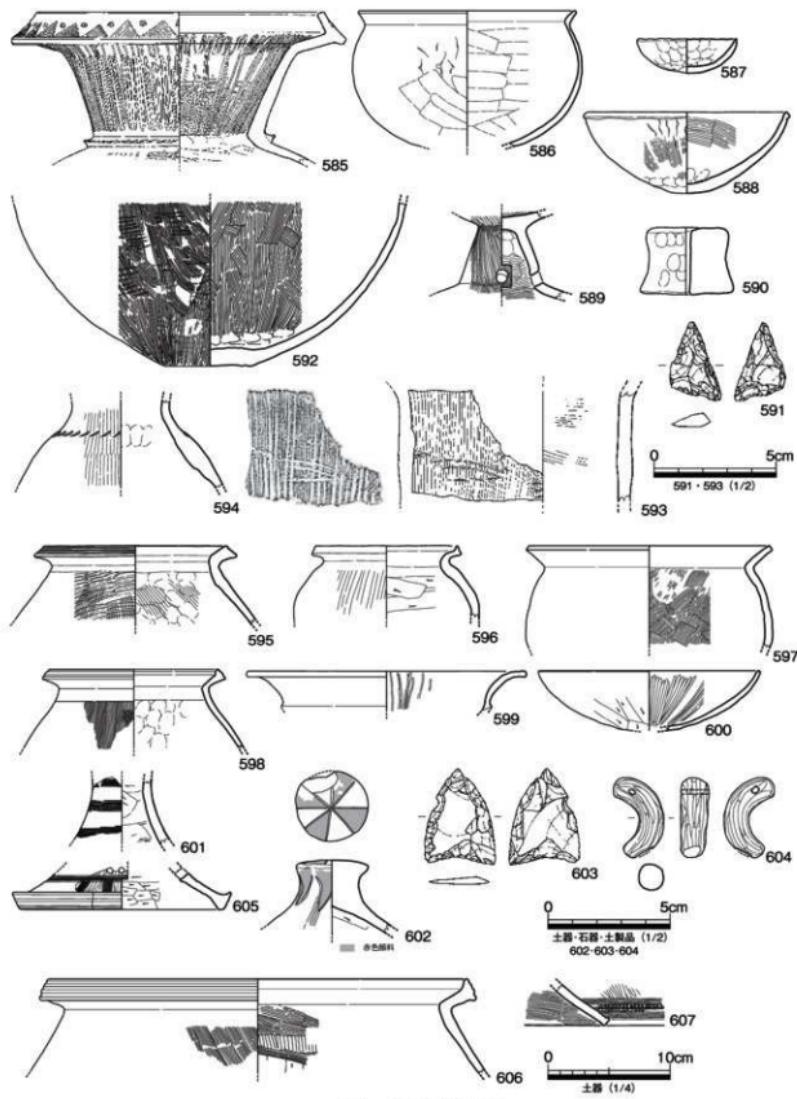


図 77 7-13 区 SH21(2)

前期前半のものと推定される。

7-13 区 SH21 (図 76・77)

7-13 区と 7-9 区の境界付近で検出された竪穴建物である。7-13 区 SH20 と重複し、削平される。SH20 のほうが新しい。平面形は隅丸方形で、長軸 4.2 m、短軸 3.9 m である。床面は二段掘りで、壁沿いはベッド状となる。壁沿いには幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝がある。柱穴はベッド状遺構から 4 個検出された。径 0.2 ~ 0.25 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m で、主柱穴と考えられる。遺物は弥生土器・石器が整理箱 2 箱程度出土した。593 は弥生土器壺の頸部片で、外側にヘラ描きによるヒゲ状の文様がみられる。601・605 は高杯の脚部で、脚部に数帯の櫛描直線文が施される。吉備地方からの搬入品である。いずれも小破片のため接合不可能であったが、同一個体の可能性が高い。602 はヘラ描き沈線で三角形を描き、三角形内を赤彩する。蓋の天井部と考えられる。604 は土製勾玉である。弥生時代中期後半から後期前半の土器を少量含むが、大部分の土器は弥生時代終末期に属することから、SH21 は弥生時代終末期のものと考えられる。

7-13 区 SH22 (図 78)

7-13 区西端で検出された竪穴建物である。中世の溝 SD1302 や、古墳時代後期の竪穴建物 SH14、弥生時代後期の建物 SH08 と重複し、削平される。建物の東壁と西壁沿いの壁溝が検出されただけであるが、

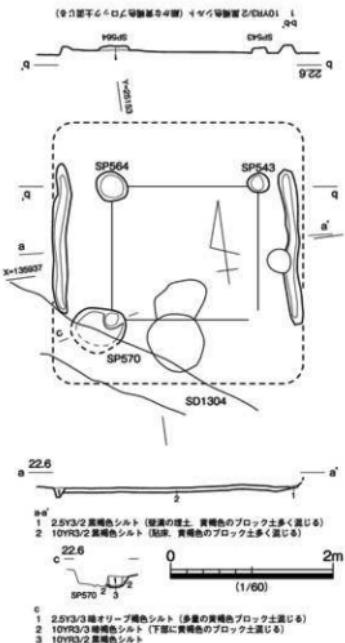


図 78 7-13 区 SH22

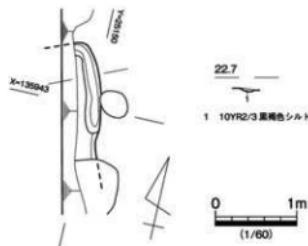


図 79 7-13 区 SH23

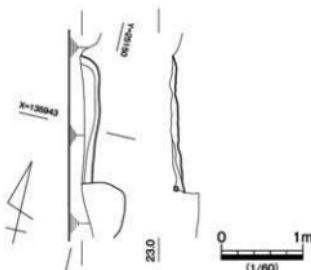


図 80 7-13 区 SH24

壁溝が直線的であることから建物の平面形は方形または隅丸方形で、1辺3.0m前後と推定される。遺物は柱穴から弥生土器・石器がごく少量出土しているだけである。SH22の建物の方向は周辺にある古墳時代後期の竪穴建物SH08・SH14と異なっており、弥生土器が出土していることから、SH22は弥生時代のものと考えられる。また、平面形が方形であることから、弥生時代後期後半のものであろう。

7-13区 SH23（図79）

7-13区西端で検出された竪穴建物である。調査区の西壁際で建物東壁付近が検出された。建物南部は古代の柱穴SP290と重複し、削平される。また、古墳時代後期の竪穴建物SH06と重複するが、SH23のはうが新しい。壁溝は幅0.2m、深さ0.05mで、平面形は方形または隅丸方形と考えられる。遺物は須恵器片・土器片がごく少量出土しただけである。明確に時期を示す遺物は見当たらないが、古墳時代後期の竪穴建物SH06よりも新しいことや、出土遺物の中に須恵器が含まれることから、SH23は古墳時代後期のものと考えられる。

7-13区 SH24（図80）

7-13区西端で検出された竪穴建物である。調査区の西壁際で竪穴建物の東壁の一部が検出されただけである。7-13区SH23と重複する。SH23のはうが新しい。また、古墳時代後期の竪穴建物SH06と重複するが、SH24のはうが新しい。建物南部は古代の柱穴SP290と重複し、削平される。建物の平面形は方形または隅丸方形で、深さ0.05mである。出土した10点の土器片は小片で時期比定は困難であるが、古墳時代後期の竪穴建物SH06よりも新しいことから、SH24も古墳時代後期のものと考えられる。

2. 掘立柱建物

7-2区 SB01（図81）

7-2区中央部やや西寄りで検出された掘立柱建物である。建物の東部は攪乱によって一部削平される。桁行2間(5.1m)、梁間1間(2.9m)、桁行の方向はW4°Nである。柱穴の平面形は楕円形または隅丸方形で、長軸0.7～0.9m、短軸0.5～0.7m、深さ0.15～0.3mである。各柱穴からは少量の土器・須恵器片などが出土した。610はSP141から出土した滑石製の白玉、611はSP84から出土した銅鏡の茎である。SP84から出土した須恵器蓋(608)、SP141から出土した須恵器杯(609)は奈良時代に属することから、SB01は奈良時代のものと考えられる。

7-2区 SB02（図82）

7-2区中央部やや西寄りで検出された掘立柱建物である。北部は現代の建物基礎によって削平される。桁行2間(4.5m)、梁間1間(2.3m)、桁行の方向はN34°Wである。柱穴の平面形は楕円形またはややいびつな方形で、長軸0.5～0.7m、短軸0.4～0.6m、深さ0.15～0.45mである。各柱穴からは少量の土器・須恵器片が出土した。SP269から土師器小皿(614)が出土していることから、SB02は中世のものと考えられる。

7-2区 SB03（図82）

7-2区北部で検出された掘立柱建物である。北部は現代の建物基礎によって削平される。桁行2間(3.7m)、梁間1間(2.0m)、桁行の方向はN53°Wである。柱穴の平面形はややいびつな楕円形または隅丸方形で、長軸0.45～0.7m、短軸0.45～0.6m、深さ0.1～0.25mである。各柱穴からは少量の土器・須恵器片などが出土した。SP187からは鉄釘(617)が出土した。圓化していないが、SP188から土師器小皿底部小片が出土していることから、SB03は中世のものと考えられる。

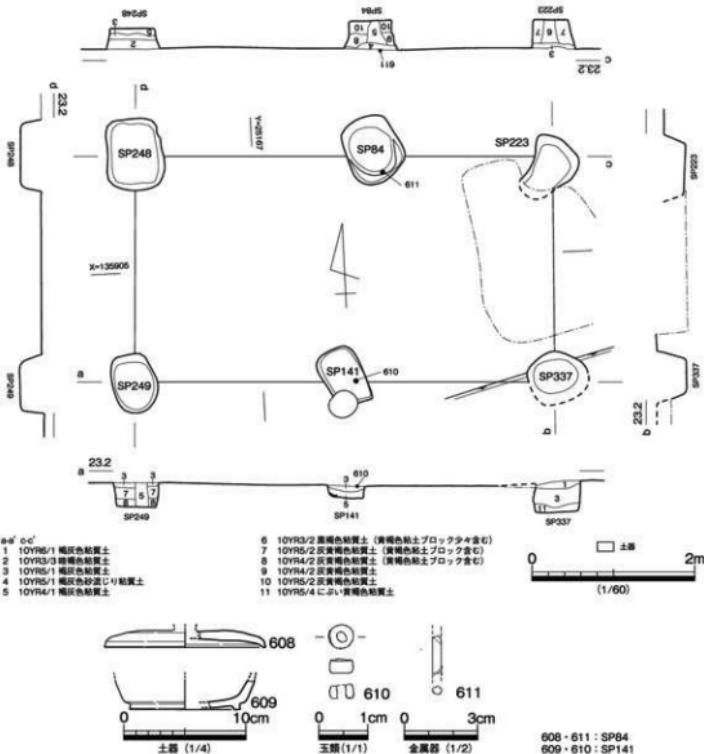


図 81 7-2 区 SB01

7-2 区 SB04 (図 83)

7-2 区中央部や東寄りで検出された掘立柱建物である。桁行 2 間 (3.7 m)、梁間 1 間 (1.8 ~ 2.0 m)、桁行の方向は N20°W である。柱穴の平面形はいびつな楕円形または隅丸方形で、長軸 0.6 ~ 0.9 m、短軸 0.6 ~ 0.7 m、深さ 0.2 ~ 0.5 m である。SP366 からは少量の土器片、他の柱穴からは少量の弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。弥生土器も含まれるが、SP367 から出土した須恵器杯 (619) は焼成不良で、10 世紀に属することから、SB04 は 10 世紀のものと考えられる。

7-2 区 SB05 (図 83)

7-2 区東部で検出された掘立柱建物である。桁行 2 間 (3.5 m)、梁間 1 間 (2.3 m)、桁行の方向は N18°W である。柱穴の平面形は隅丸方形で、長軸 0.6 ~ 1.0 m、短軸 0.5 ~ 0.75 m である。各柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。弥生土器も出土したが、土師器杯 (623)、須恵器蓋 (624) は 8 世紀に属することから、SB05 は 8 世紀のものと考えられる。

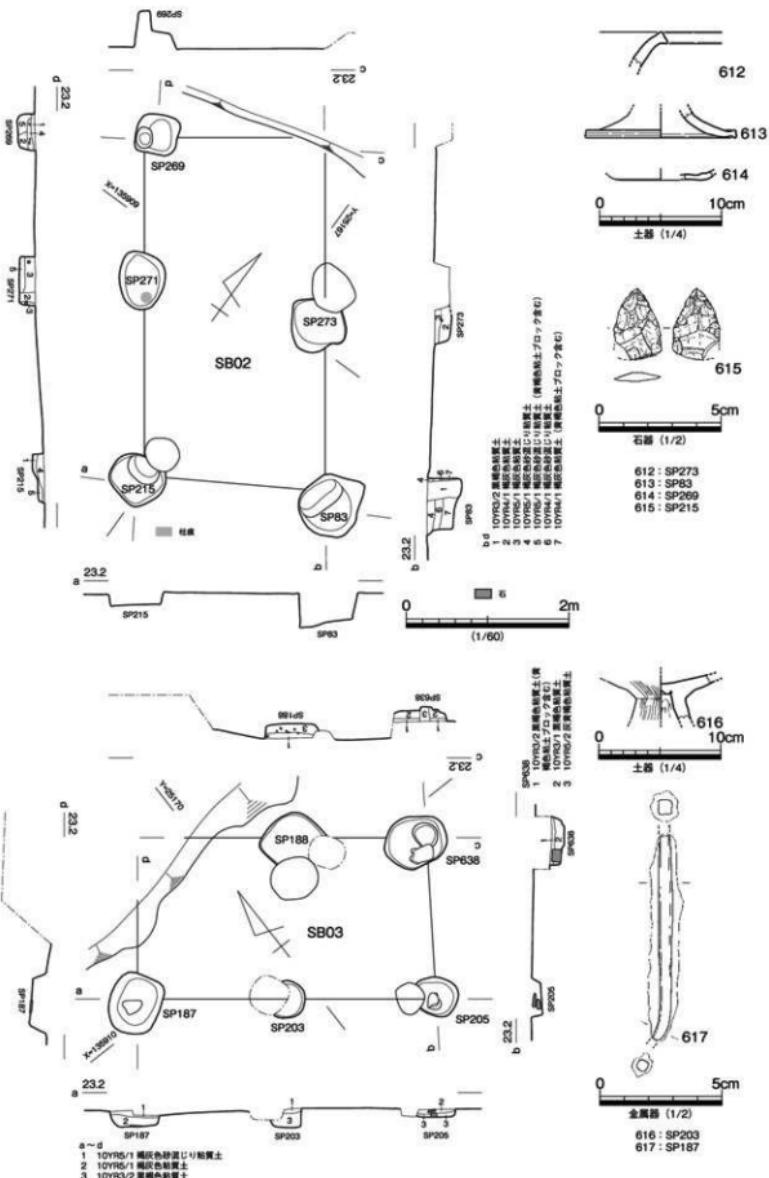


図 82 7-2 区 SB02・7-2 区 SB03

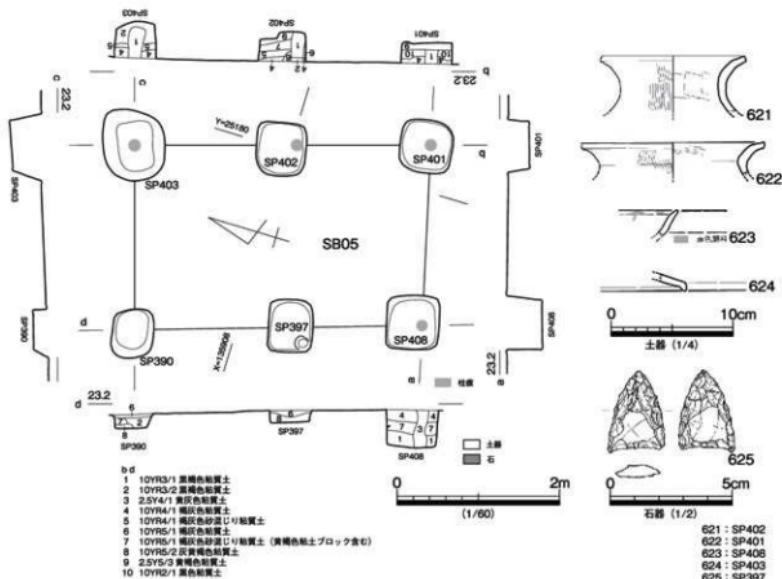
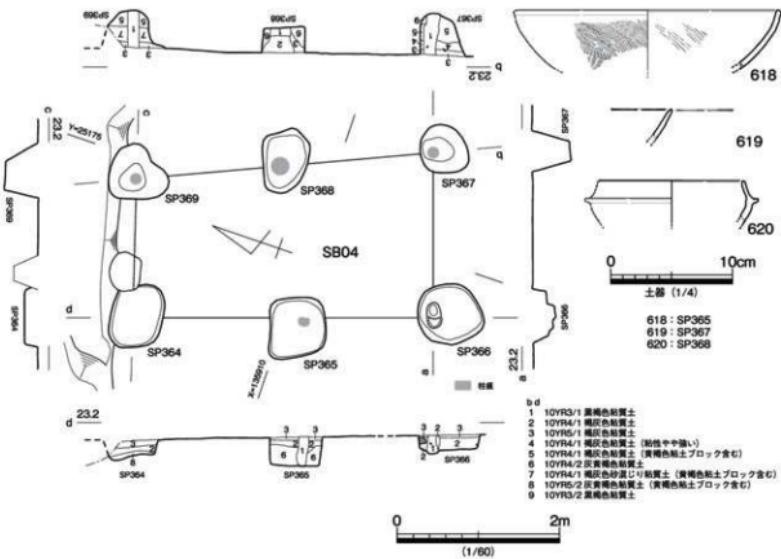


図 83 7-2 区 SB04・7-2 区 SB05

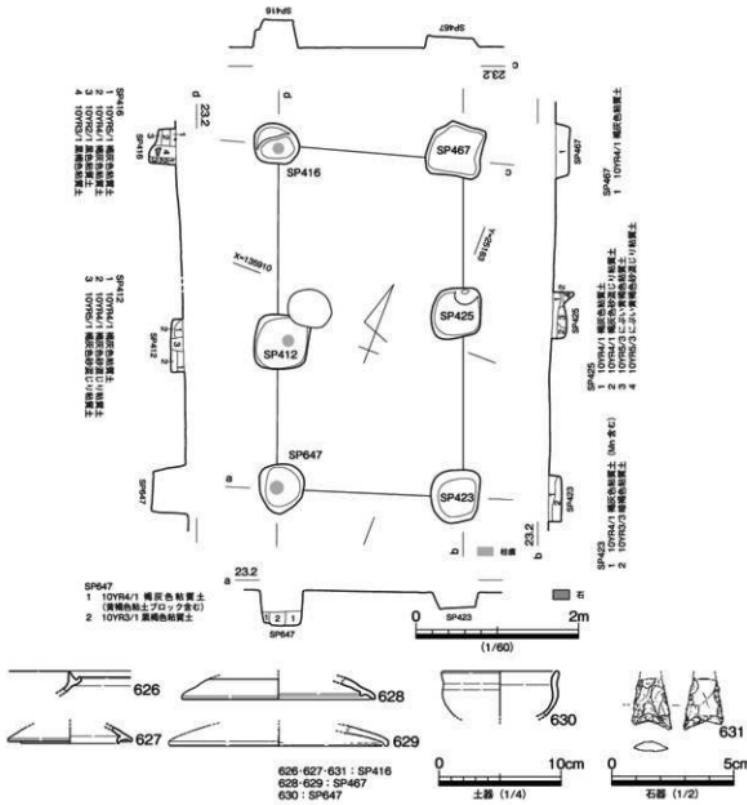


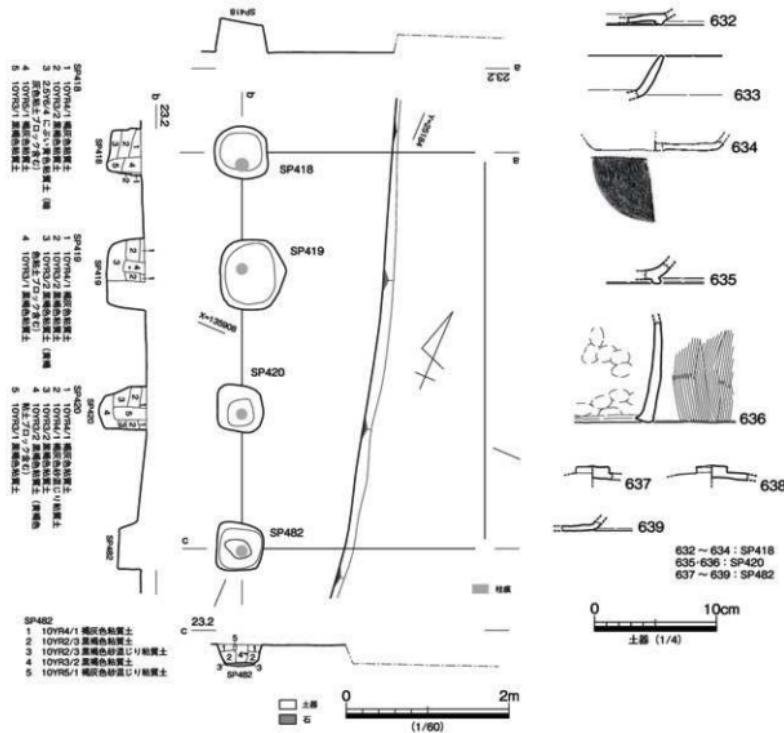
図 84 7-2 区 SB06

7-2 区 SB06 (図 84)

7-2 区東端で検出された掘立柱建物である。桁行 2 間 (4.5 m)、梁間 1 間 (20 m)、桁行の方向は N20° W である。柱穴の平面形は円形または隅丸方形で、長軸 0.5 ~ 0.7 m、短軸 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.15 ~ 0.3 m である。各柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。弥生土器が出土しているが、628 は 7 世紀末から 8 世紀初頭、629 は 8 世紀に属することから、SB06 は 8 世紀のものと考えられる。

7-2 区 SB07 (図 85)

7-2 区東端から第 22 次調査 G 区・H 区にまたがる掘立柱建物である。東部は擾乱で削平されており、不明である。桁行 3 間 (4.9 m)、梁間 1 間 (1.8 m 以上)、桁行の方向は N22° W である。柱穴の平面形は円形または隅丸方形で、長軸 0.5 ~ 0.85 m、短軸 0.5 m、深さ 0.7 m である。各柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。SP418 から出土した須恵器杯 (634)、SP482 から出土した須恵器杯 (639)



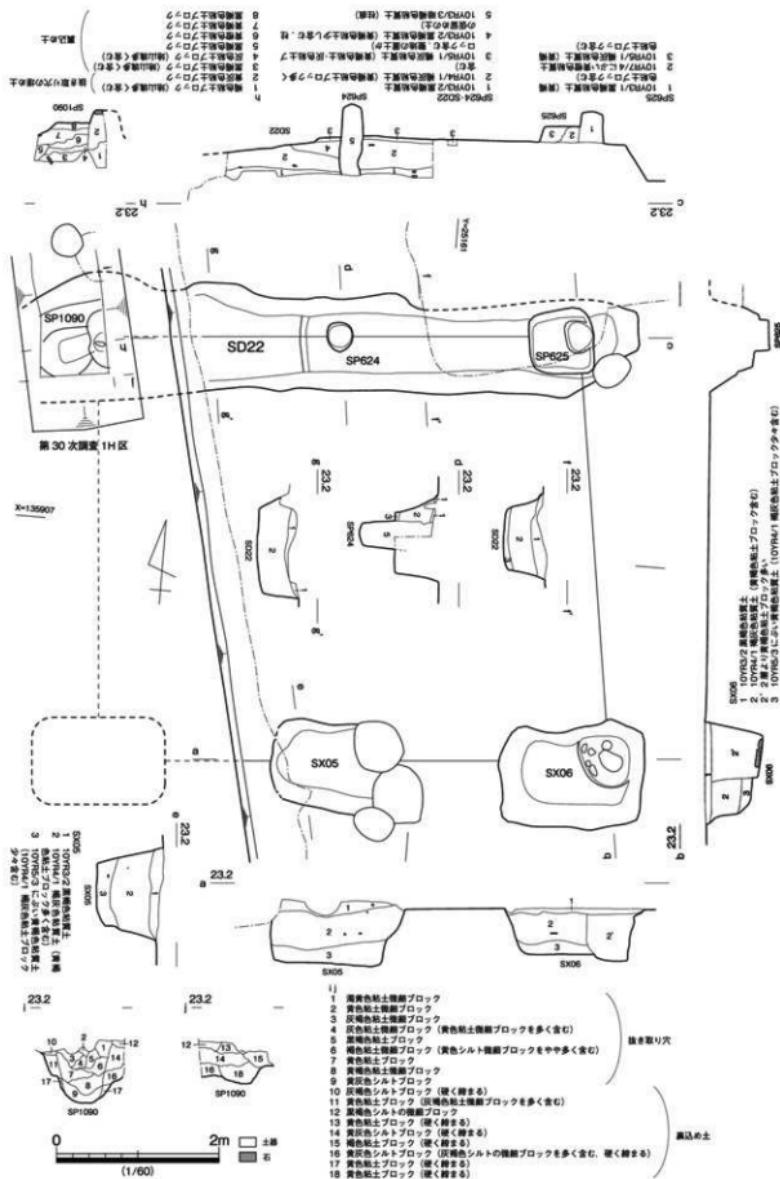


図 86 7-2 区 SB08

7-2 区南西部で検出された布掘の掘立柱建物である。南部は現代の建物基礎によって大きく削平され、西部も攪乱によって部分的に削平される。SB09は桁行2間(3.5~3.8m)、梁間1間(2.7m)、桁行の方向はN88°Wである。桁行の柱穴は2本の平行する溝(SD19・SD18)の中に設置されていた。SD19の西端は攪乱によって削平され、不明である。SD18も柱穴の重複や、現代の建物基礎による削平のため東端は検出できていない。これらの溝の断面形はU字形で、幅0.5~0.7m、深さ0.3~0.5mである。溝と柱穴の土層の堆積状況から、溝の掘削後、溝の底面に柱穴を掘り、柱を設置し、その後、溝を埋め戻して柱を固定したことがうかがわれる。柱穴の土層断面を観察すると、柱の存在した場所に堆積した土層の幅は0.2~0.3mである。これらの下部には地山よりもやや白い土層が堆積する。この土層は柱を据えつけることにより、下部の地山層に影響を与えて変色した可能性がある。各溝・柱穴からは少量の弥生土器片・石器剥片が出土した。弥生時代中期後半のものも含まれるが、柱の設置直後に堆積したSD18埋土から出土した弥生土器甕(642・643)、SD19埋土から出土した弥生土器甕(644・645)は弥生時代

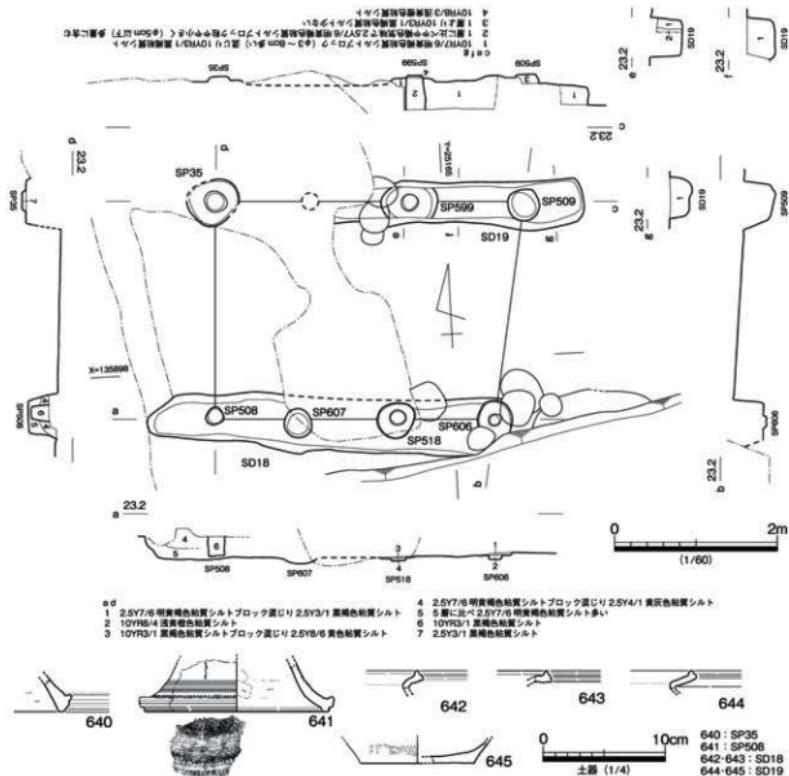


図87 7-2区SB09

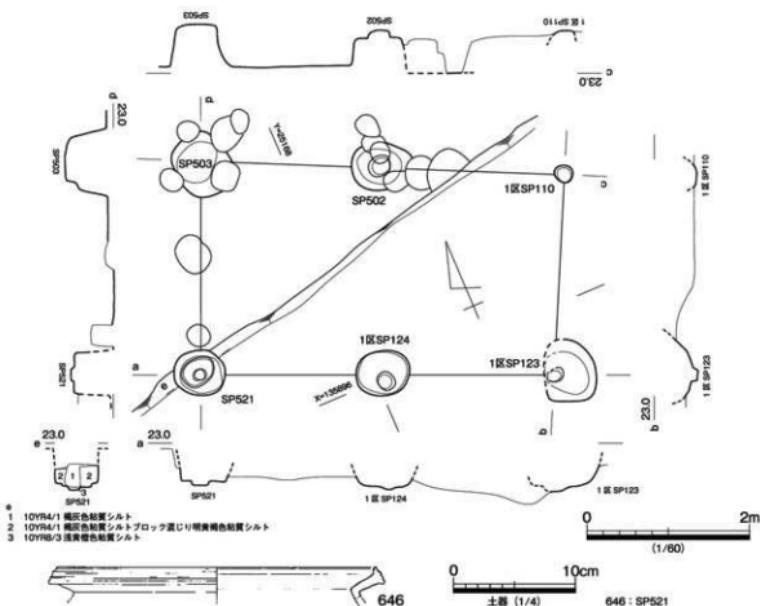


図 88 7-1 区 SB01

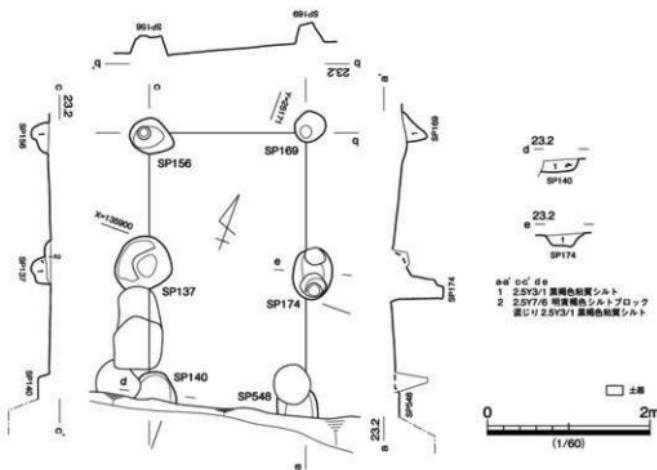


図 89 7-2 区 SB11

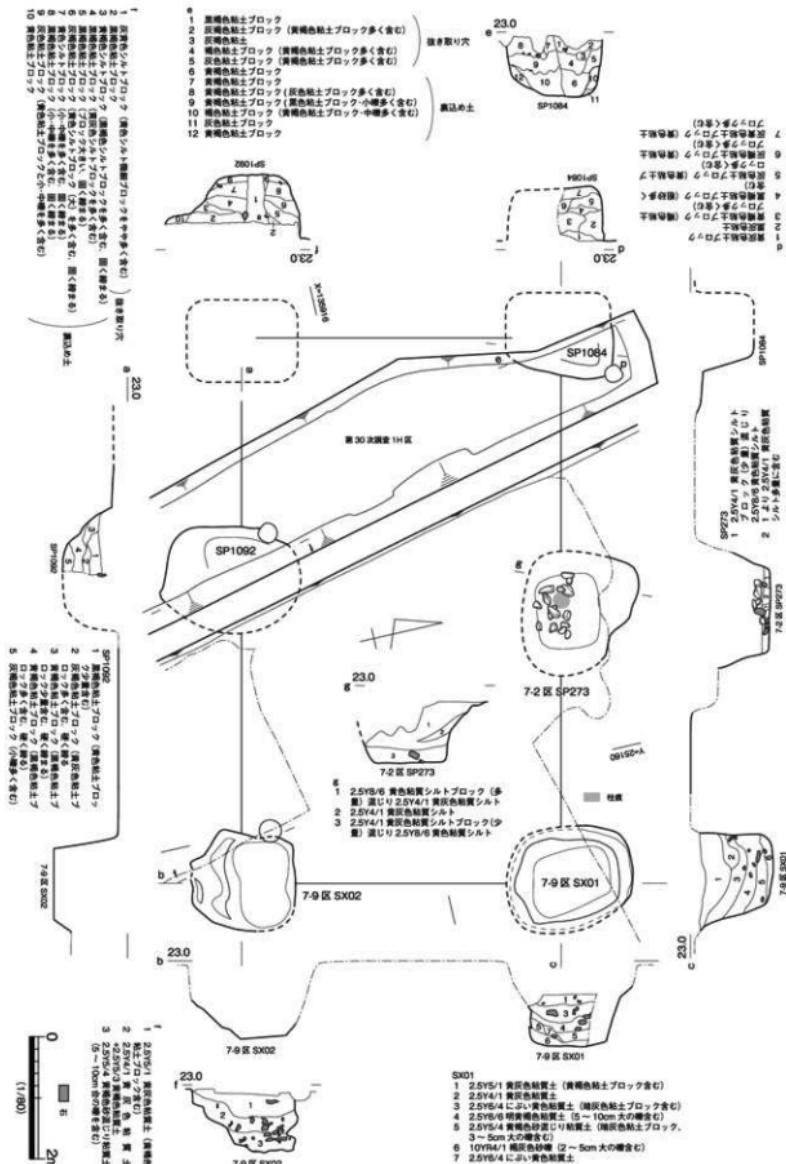


図90 7-2区SB12

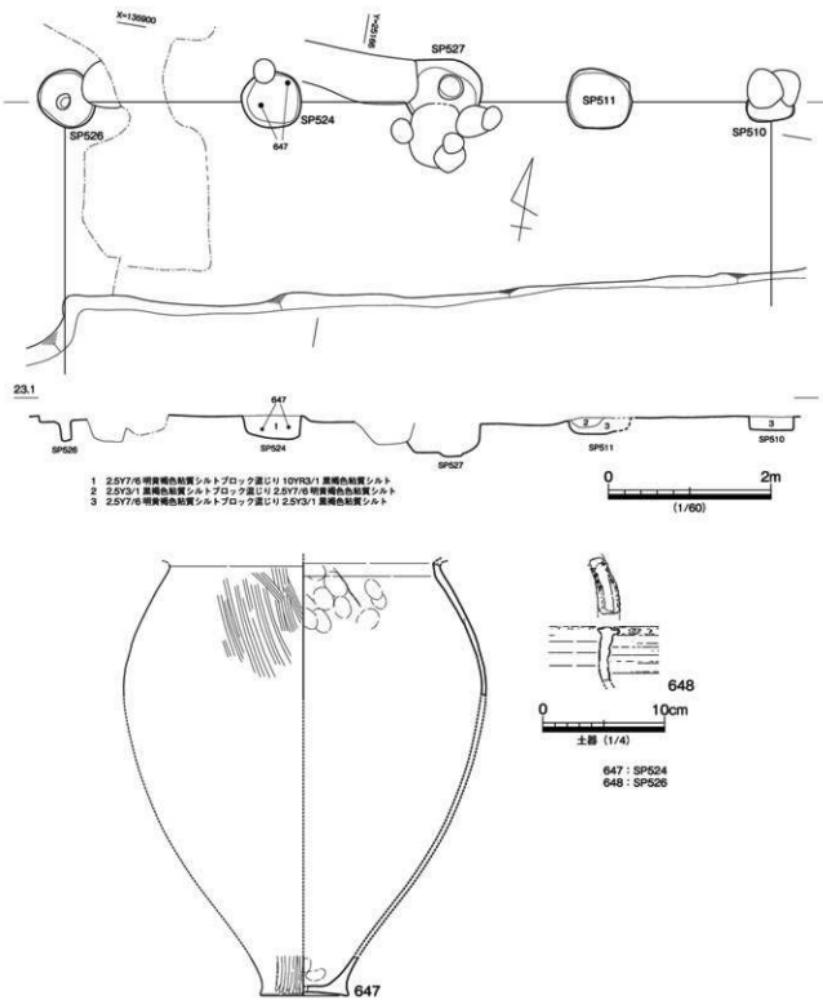


図 91 7-2 区 SB13

後期前半に属する。SB09の築造時期はこれらの土器よりも新しいことになるが、これらより新しい土器が柱穴から出土していないことから、SB09は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-1区 SB01（図 88）

7-2区南部から7-1区で検出された掘立柱建物である。「旧練兵場遺跡IV」で7-1区SB01と報告したが、再度報告する。南東部は現代の建物基礎により削平を受ける。この部分は7-1区である。SB01は桁行2間（4.3～4.5m）、梁間1間（2.5～2.7m）で、桁行の方向はN65°Wである。柱穴の平面形はいずれも円形で、径0.5～0.8mである。各柱穴からは弥生土器・石器剥片が少量出土した。SP521から出土した弥生土器壺（646）は弥生時代中期後半新段階に属することから、SB01は弥生時代中期後半新段階のものと考えられる。

7-2区 SB11（図 89）

7-2区南部で検出された掘立柱建物である。南部は現代の建物基礎により削平される。桁行2間以上、梁間1間、桁行の方向はN15°Eである。柱穴の平面形はいずれも円形で、径0.4～0.6m、深さ0.25～0.65mである。各柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片などが出土した。SP174から中国産青磁の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、中国産青磁片が出土したことから、SB11は中世のものと考えられる。

7-2区 SB12（図 90）

7-2区北部から7-9区、第30次調査によって検出された掘立柱建物跡である。建物中央部は攪乱によつて削平され、建物西部は調査区外に連続するため、不明であるが、桁行2間（8.5m）、梁間1間（5.5m）で、桁行の方向はW13°Nである。柱穴の平面形はいびつな隅丸方形で、長軸1.8～2.0m、短軸1.5～1.8m前後である。30次調査で検出されたSP1084・SP1092はいずれも調査区外に連続するため、全体を検出していないが、SP273・SX01・SX02は埋土に礫が多く含まれている。SP273には礫を積み上げて、その内部に柱を据えた痕跡があることから、SX01・SX02も本来は礫を積み上げて、その内部に柱を設置した可能性が高い。出土遺物は第30次調査の報告書（「旧練兵場遺跡VI」）で報告するが、SB12は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-2区 SB13（図 91）

7-2区南西部で検出された掘立柱建物である。南側の桁行は現代の建物基礎によつて削平される。桁行4間（8.6m）で、桁行の方向はN80°Eである。柱穴の平面形は円形で、径0.6～0.9m、深さ0.2～0.5mである。各柱穴からは弥生土器小片が出土した。SP524から出土した弥生土器壺（647）、SP526から出土した弥生土器壺（648）はいずれも弥生時代中期後半新段階に属することから、SB13は弥生時代中期後半新段階のものと考えられる。

7-2区 SB14（図 92）

7-2区南西端で検出された掘立柱建物である。北西部から中央部にかけては攪乱によつて削平される。桁行2間（3.6m）、梁間1間（2.3m）で、桁行の方向はN29°Wである。柱穴の平面形は円形で、径0.25～0.5m、深さ0.2～0.4mである。各柱穴からは土器・須恵器などが少量出土した。SP04からは中国産白磁皿（649）が出土した。649は高台をもたず、底部外面は無釉、内面に段をもつ。大宰府分類白磁皿V類に当たり、11世紀後半から12世紀前半に属する。SP21からは土師器碗（650）が出土した。650は表面が摩滅しているが、胎土の特徴から吉備系土師器碗の可能性が高い。SP42からは緑釉陶器碗（651）が出土した。651の高台は貼り付けられる。近江産で、10世紀に属する。SP514から出土した土師器小

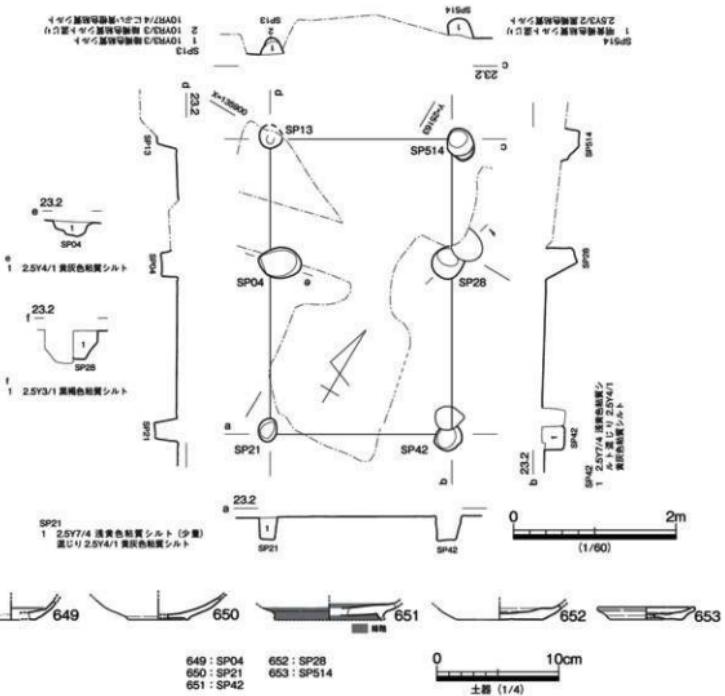


図 92 7-2 区 SB14

III (653) は底部が分厚く、13世紀に属する。これらの遺物の年代から SB14 は 13世紀のものと考えられる。

G 区 SB0006 (図 93)

第 28 次調査 2 区から第 22 次調査 G 区・H 区にまたがって検出された掘立柱建物である。すでに『旧練兵場遺跡 III』で、G 区 SB0006 として報告されているが、第 28 次調査で西側の桁行の一部が検出されたので、再度報告する。すでに報告されているとおり、桁行 4 間の建物である。建物の南部から中央部にかけて搅乱で削平されているため、梁間の柱穴、西側の桁行の南部は不明であるが、桁行 4 間 (6.4 m)、梁間 2 間 (3.9 m) で、桁行の方向は N22° W である。柱穴の平面形は方形で、長軸 0.6 m 前後、短軸 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.4 ~ 0.6 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。SP430 からは暗文の施された土師器小片が出土したことから、SB0006 は奈良時代以降のものと考えられるが、G 区では柱穴から 9世紀の土師器杯数点が出土していることから、『旧練兵場遺跡 III』の報告のとおり、SB0006 は 9世紀のものと考えられる。

H 区 SB1003 (図 94)

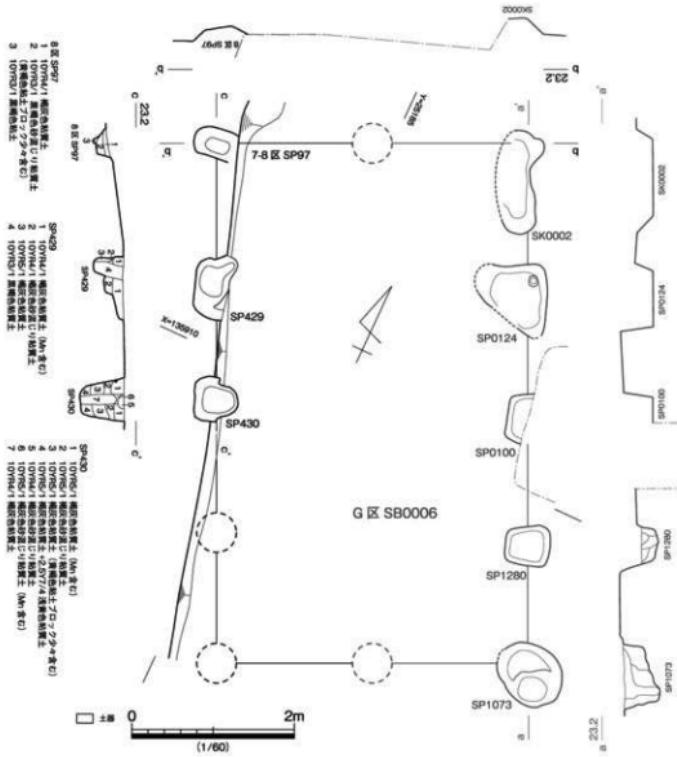


図93 G区 SB0006

第28次調査7-2区から第22次調査H区にまたがって検出された掘立柱建物である。すでに『旧練兵場遺跡III』でSB1003として報告されているが、第28次調査で建物の西部が検出されたので、再度報告する。すでに報告されているとおり、桁行3間(5.2m)、梁間2間(3.8m)である。桁行の方向はN63°Eである。柱穴は丸みを帯びた方形で、径0.5~0.6m、深さ0.5m前後である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。SP331からは須恵器杯(654)が出土した。654は古墳時代後期に属する。なお、P1182から8世紀前半の土師器皿が出土した。7-2区の調査では8世紀前半以降の遺物は出土していないが、『旧練兵場遺跡III』の報告のとおりSB1003は9世紀のものと考えられる。

7-7区 SB01(図95)

7-7区北東部で検出された掘立柱建物である。東端は擾乱により削平されている。桁行の方向はN61°Eで、桁行3間(5.2m)以上、梁間1間(2.7m)である。柱穴の平面形はいずれも円形で、径0.25~0.5m、深さ0.2~0.45mである。各柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土した。SP92から土師器皿の口縁部片が出土していることから、SB01は中世のものと考えられる。

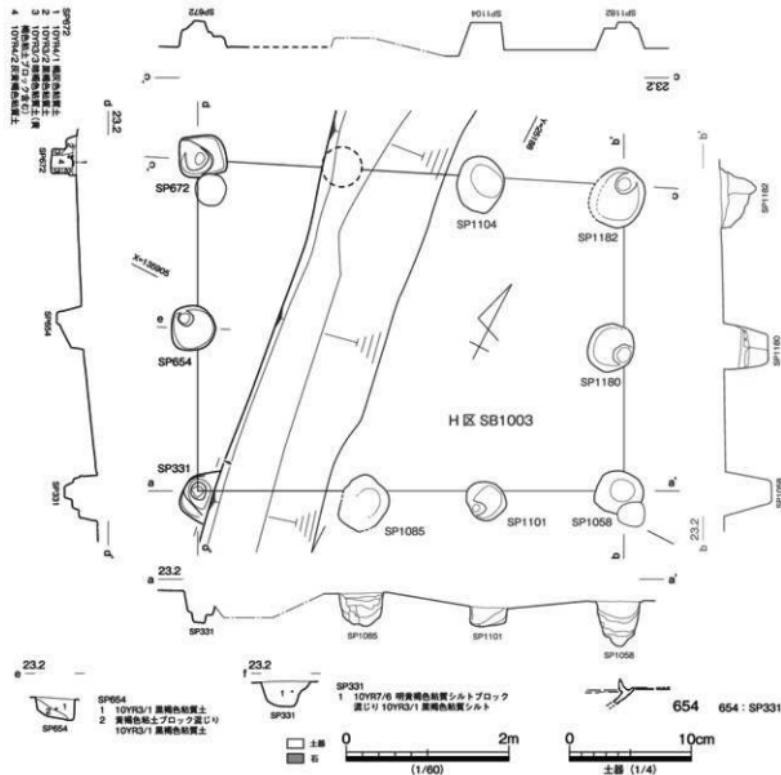


図 94 H 区 SB1003

7-7 区 SB02 (図 95)

7-7 区西北部で検出された掘立柱建物である。桁行2間(5.6m)、梁間1間(2.4m)で、桁行の方向はN56°Eである。柱穴の平面形はいずれも円形で、径0.5~0.6m、深さ0.15~0.4mである。各柱穴からは土器片・須恵器片が少量出土した。SP32から須恵器杯の口縁部片(656)が出土した。656は軟質で口縁部が黒色である。十瓶山付近で焼かれた須恵器で、12~13世紀に属することから、SB02は12~13世紀のものと考えられる。

7-7 区 SB03 (图 96)

7-7 区東部で検出された掘立柱建物である。桁行3間(5.4m)、梁間2間(3.7m)で、桁行の方向は正方位である。柱穴はいびつな隅丸方形またはいびつな円形を呈し、径0.5~1.0m、深さ0.3~0.5mである。各柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土した。SP164から出土した661は弥生土器壺の口縁部である。口縁部端面に綾杉文をヘラ描きする。他地域からの搬入品の可能性が高い。SP165

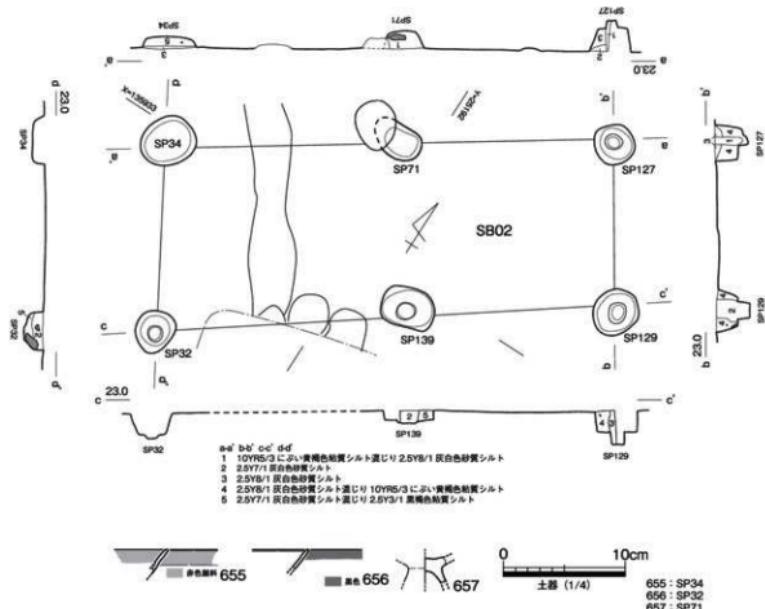
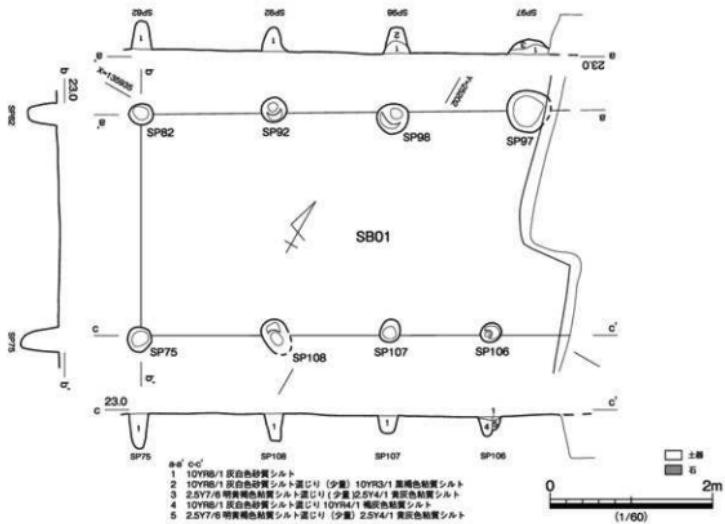


図 95 7-7 区 SB01・7-7 区 SB02

から出土した 662 は弥生土器壺で、口縁部外面に沈線を施し、胎土は黄色みを帯びる。弥生時代後期前半のもので、吉備地方からの搬入品である。弥生土器も含まれるが、SP126 から出土した須恵器杯（659）は 8 世紀に属することから、SB03 は 8 世紀のものと考えられる。

7-7 区 SB04（図 97）

7-7 区東部で検出された掘立柱建物である。桁行 2 間（3.3 m）、梁間 1 間（2.5 m）で、桁行の方向は N55° W である。柱穴の平面形は円形またはいびつな円形で、径 0.5 m、深さ 0.4 ~ 0.5 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。SP221 から出土した 665 は弥生土器壺の体部で、櫛状工具による流水文を施す。SP172 から出土した 666 は須恵器杯である。底部は回転ヘラ切り調整され、焼成不良で、9 世紀に属する。弥生土器もみられるが、666 の時期から SB06 は 9 世紀のものと考えられる。

7-7 区 SB06（図 97）

7-7 区北部で検出された掘立柱建物である。一部攪乱により削平されるが、桁行 2 間（4.6 m）、梁間 1 間（2.7 m）で、桁行の方向は N34° W である。柱穴の平面形は円形またはいびつな方形で、径 0.7 ~ 0.8 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。出土遺物の大半は弥生土器であったが、SP227 からは土師器杯体部の小片が出土した。この小片は胎土が精良で、奈良時代のものと推定されるが、柱穴の埋土の色調が灰色であることから、SB06 は中世のものと考えられる。

7-7 区 SB07（図 98）

7-7 区北東部で検出された掘立柱建物である。桁行 4 間（7.3 m）、梁間 1 間（3.0 m）で、桁行の方向は N6° E である。柱穴の平面形は円形またはいびつな円形で、径 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。出土土器の大半は弥生土器であったが、奈良時代後半から平安時代に属すると考えられるやや焼成不良の須恵器片も含まれる。隣接する掘立柱建物 SB03 と同方向であることからも SB07 は奈良時代のものと考えられる。

7-8 区 SB01（図 99）

7-8 区南部で検出された掘立柱建物である。SB01 付近は建物の基礎によって攪乱により削平されており、周辺の遺構検出面から 0.3 m ほど低い場所で検出された。また、古墳時代後期の落ち込み SX02 と重複しているため、建物の東部は削平されており、遺構の残存状況は悪い。SB01 は桁行 2 間（3.7 m）、梁間 1 間（3.0 m）で、桁行の方向は N80° W である。柱穴の平面形はいびつな円形または隅丸方形で、1 辻 0.9 ~ 1.0 m である。柱穴の上部は現代の建物基礎によって削平されているため、現存の深さは 0.2 ~ 0.4 m である。建物の西隅に当たる 2 個の柱穴 SP183 と SP184 は桁行中央の柱穴よりも 0.2 m 深い。また、SP183・SP184 からは柱痕が検出された。柱痕は径 0.25 m である。SP184 の底面には 1 辻 0.2m 以下の 4 個の平石が置かれていた。また、SP183 は柱の抜き取り跡に長さ 0.5 m の自然礫がみられた。各柱穴からは少量の弥生土器が出土した。SP183 からは弥生土器壺（667）、高杯（668）が出土した。これらは弥生時代中期後半新段階に属することから、SB01 は弥生時代中期後半新段階のものと考えられる。

7-8 区 SB02（図 100）

7-8 区南部で検出された掘立柱建物である。SB02 付近は SB01 と同様現代の建物基礎によって上部はかなり削平されている。また、古墳時代後期の土坑 SX02 と重複するため、建物の東隅は削平されており、残存状況は悪い。SB02 は桁行 2 間（5.2 m）、梁間 1 間（2.5 m）、桁行の方向は N56° E である。柱穴の上部は削平されている。平面形はややいびつな円形で、径 0.5 ~ 1.0 m、残存する深さは 0.05 ~ 0.5 m

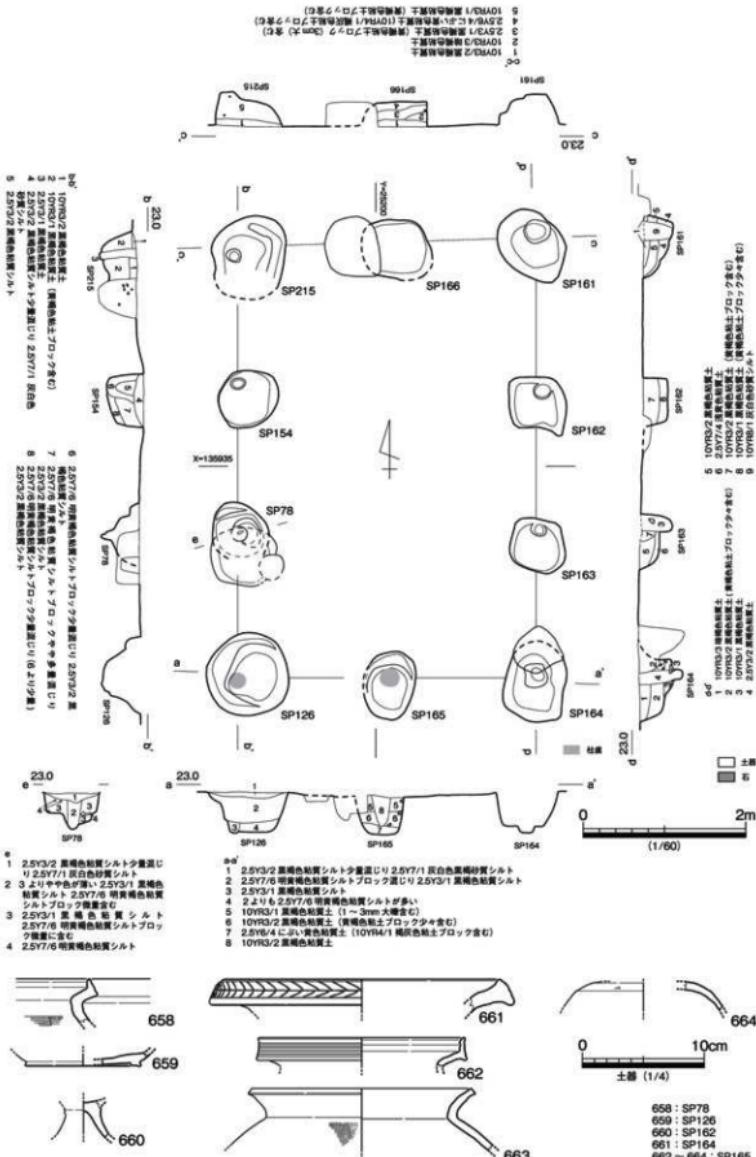


図 96 7-7 区 SB03

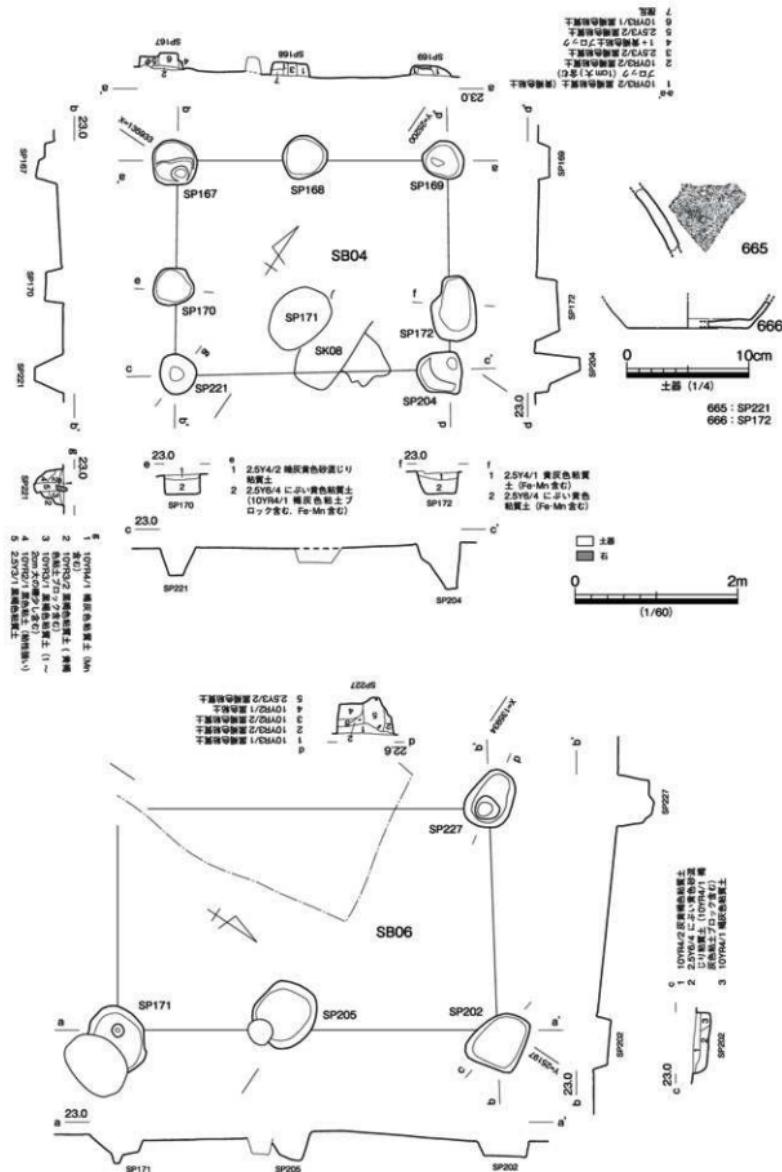


図 97 7-7 区 SB04-7-7 区 SB06

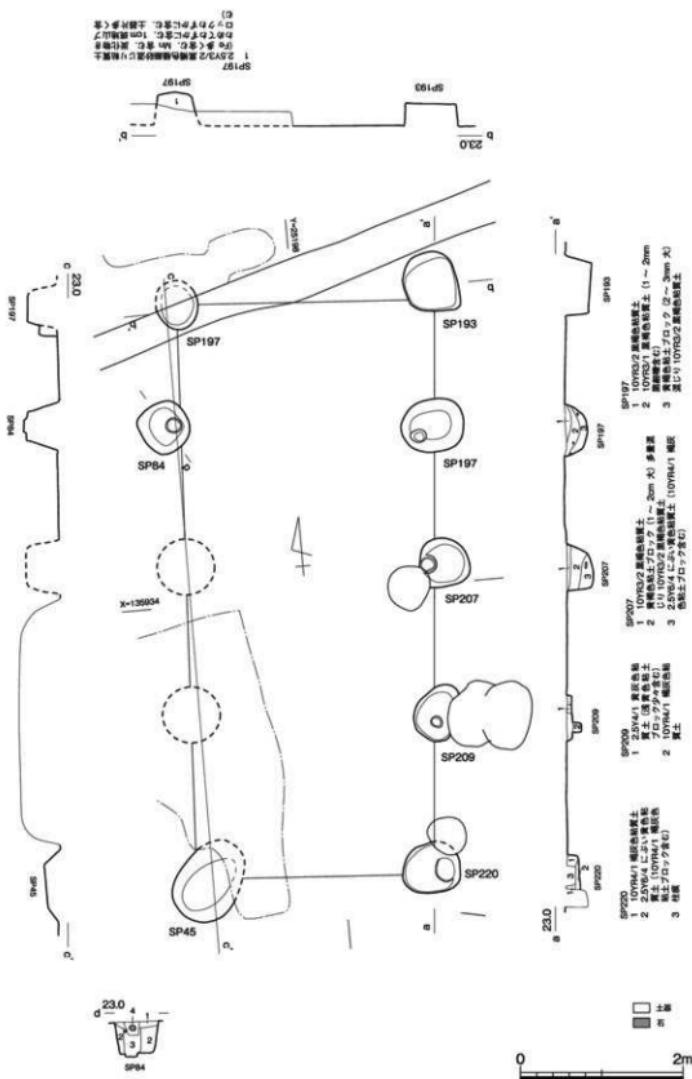


図 98 7-7 区 SB07

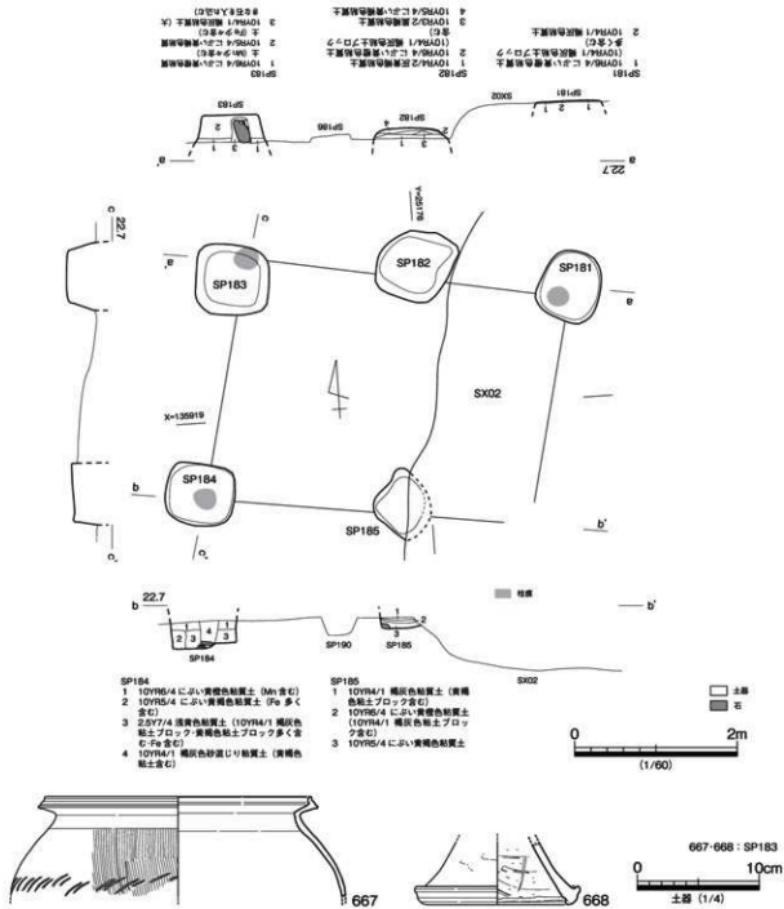


図 99 7-8 区 SB01

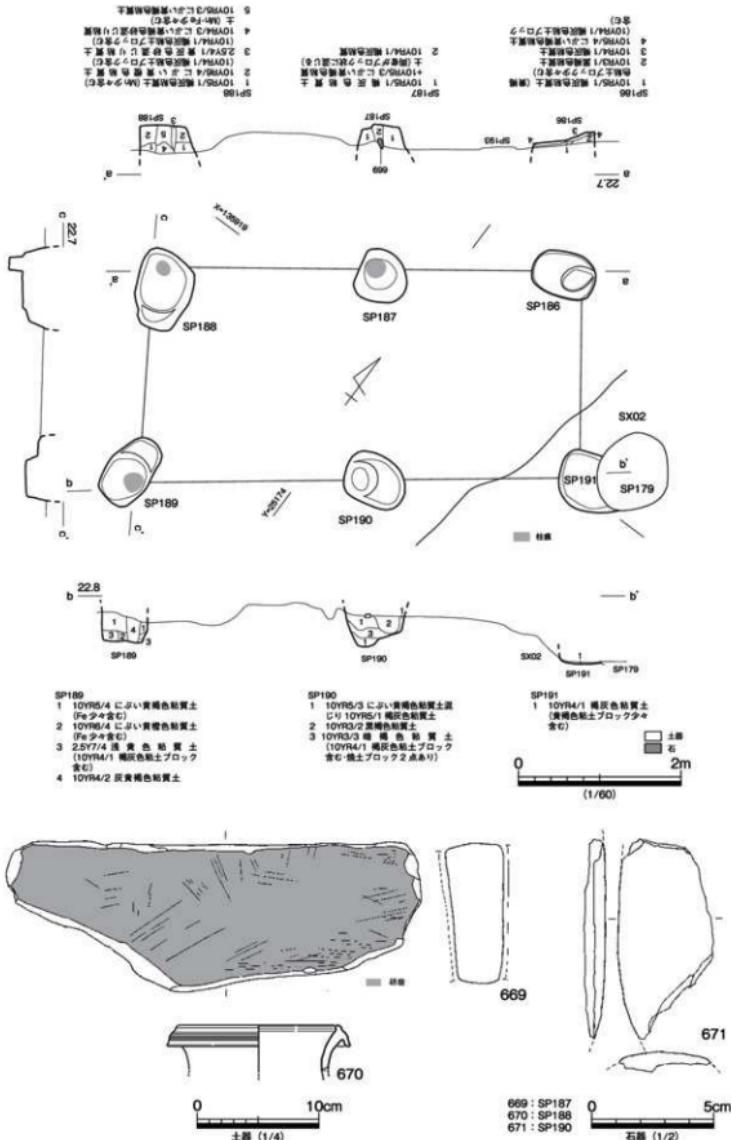


図 100 7-8 区 SB02

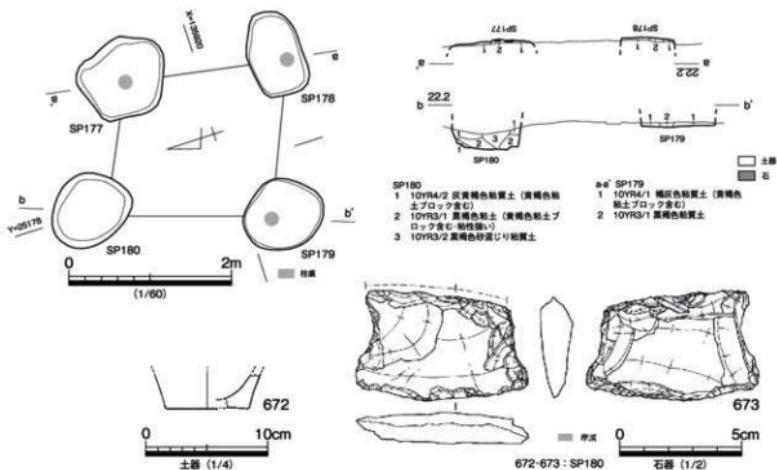


図 101 7-8 区 SB03

である。各柱穴からは少量の弥生土器片などが出土した。SP187 からは安山岩製砥石（669）、SP188 からは弥生土器壺（670）、SP190 からは大型蛤刃石斧の破片（671）が出土した。670 は弥生時代中期後半新段階に属する。また、柱穴の埋土は旧練兵場遺跡の弥生時代中期の遺構に一般的な埋土であるの黄褐色を中心とする色調であることから、SB02 は弥生時代中期後半新段階のものと考えられる。

7-8 区 SB03（図 101）

7-8 区南部で検出された掘立柱建物である。古墳時代後期の落ち込み SX02 と重複する。SX02 の完掘後、底面で検出された。SX02 に削平され、柱穴の深さは 0.05 ~ 0.2 m である。桁行 1 間（2.0 m）、梁間 1 間（1.6 m）、桁行の方向は N80° W である。柱穴の平面形はいびつな円形または方形で、残存径 0.7 ~ 0.9 m である。柱穴跡からは少量の弥生土器片・石器が出土した。SP180 からは弥生土器の底部（672）と石包丁（673）が出土した。672 の底部は分厚く、平底であることから、弥生時代後期前半に属すると考えられる。672 の時期から SB03 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

7-8 区 SB06（図 102・103）

7-8 区東部から 7-9 区西部にかけて検出された掘立柱建物である。両調査区の調査は同時ではなかつたため、桁行の東側と西側の柱穴は別々に調査された。建物の中央部には擾乱があり、一部の柱穴は削平されていた。また、南西隅の柱穴 SP62 は本来古墳時代の溝 SD06 の埋土上面から掘り込まれた遺構であるが、溝 SD06 の底面で検出したため、上部は不明である。SB06 は桁行 3 間（5.9 m）、梁間 2 間（4.5 m）で、桁行の方向は N20° W である。柱穴跡の平面形はいずれも円形で、径 0.6 ~ 1.1 m、深さ 0.7 m である。各柱穴からは土器・須恵器片などが少量出土した。大半は弥生土器の小片であるが、SK05 からは弥生土器壺（674・675）・須恵器杯（676）・銅鏡（677）が出土した。674・675 は弥生時代中期後半のもので、674 は焼成破裂痕がある。677 は縫部の先端と茎の先端を欠損する。縫部の中央には稜をもつ。7-7 区 SK10 からは須恵器杯（678）・銅鏡（679）が出土した。679 は「隆平永宝」である。また、SP266・SP62 からも銅鏡「隆平永宝」（686・688）が出土した。「隆平永宝」は皇朝十二鏡の一つで、796

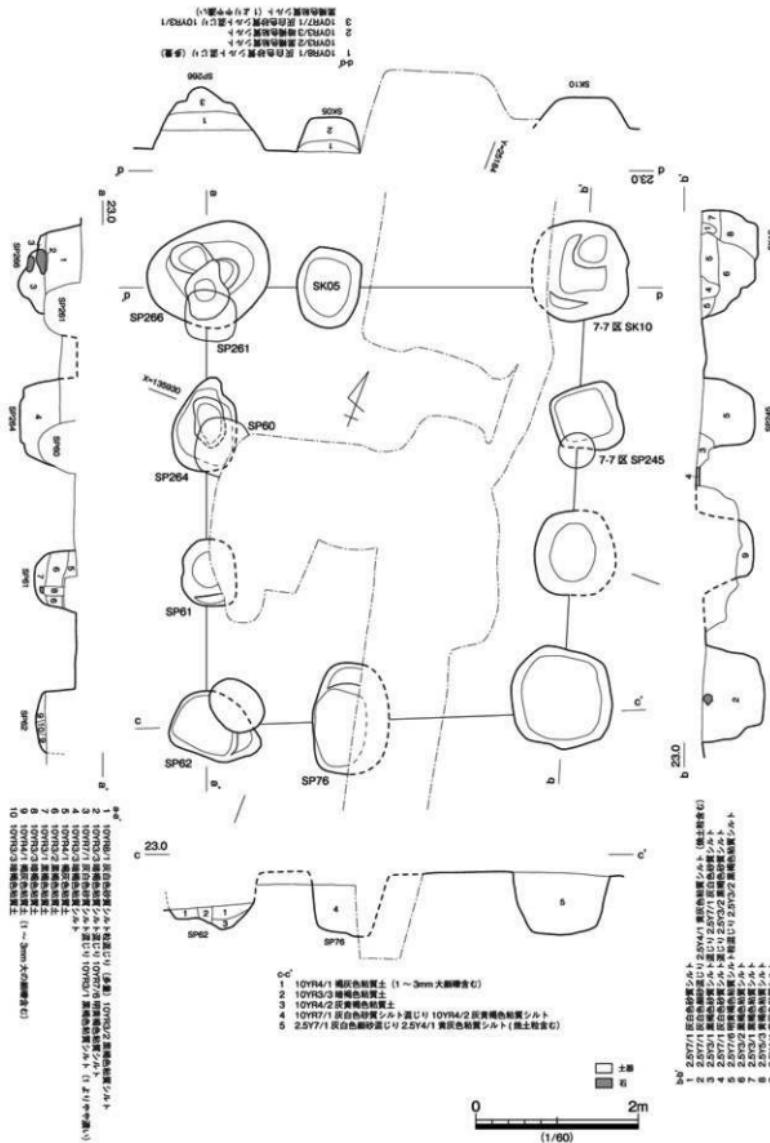


図 102 7-8 区 SB06(1)

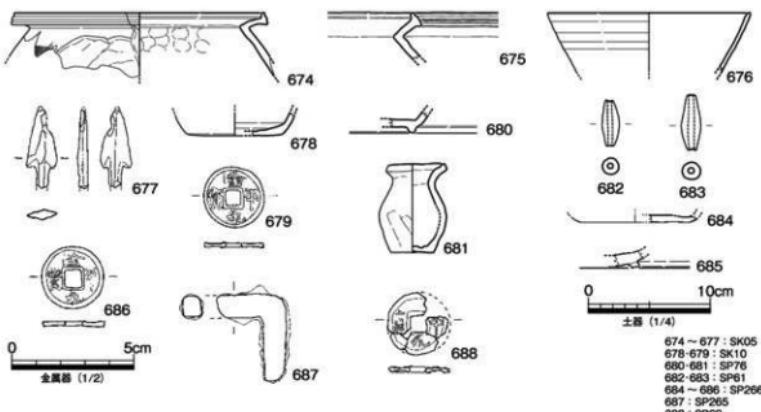


図 103 7-8 区 SB06(2)

年に日本で鋳造・発行された。「隆平永宝」が出土した柱穴 SP266・SP62・7-7 区 SK10 は建物の北西隅・南西隅・北東隅の柱穴ある。柱穴から平安時代の須恵器が出土していること、銅鏡の鋳造年代が8世紀末であることから、SB06 は9世紀のものと考えられる。

7-8 区 SB07 (図 104)

7-8 区東部で検出された掘立柱建物である。建物の東部は攪乱のため削平されており、西側の桁行だけが検出された。SB06 と重複する。SB07 のほうが新しい。桁行の柱穴は3個検出されただけであるが、本来は4個あり、桁行3間 (4.8 m) であった可能性が高い。桁行の方向はN22°Wである。柱穴の平面形はややいびつな円形を呈し、径 0.6 ~ 0.7 m、深さ 0.5 m である。SP261 からは鉄釘 (689) が出土しているが、各柱穴からは弥生土器の小片が少量出土しただけである。建物の方向や柱穴跡の埋土の状況から SB07 は古代のものと考えられる。

7-8 区 SB08 (図 105)

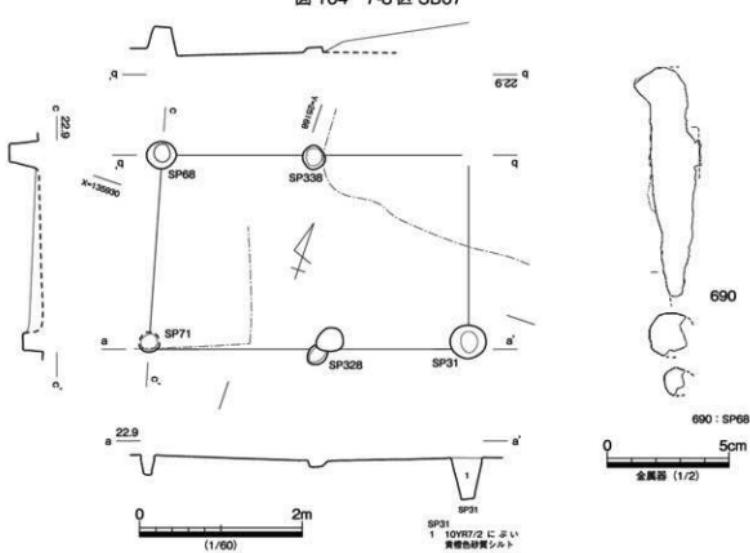
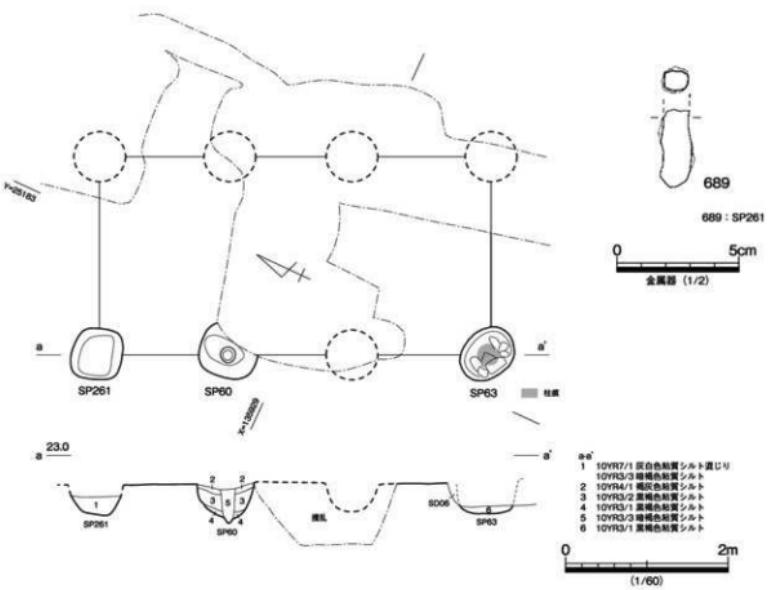
7-8 区北西部で検出された掘立柱建物である。北東部は攪乱のため、削平される。桁行2間 (3.9 m)、梁間1間 (2.4 m) で、桁行の方向は N105°W である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ~ 0.4 m である。桁行の中央部の柱穴はいずれも深さ 0.1 m と浅いが、その他の柱穴の深さは 0.3 ~ 0.5 m である。各柱穴からは土器・須恵器片・金属器などが少量出土した。SP68 からは鉄釘 (690) が出土した。出土土器はいずれも小片で詳細な年代は不明であるが、柱穴の埋土の色調から SB08 は中世のものと考えられる。

7-8 区 SB09 (図 106)

7-8 区西北部で検出された掘立柱建物である。南東部は攪乱のため削平されており、南東隅の柱穴跡は未検出である。桁行2間 (4.6 m)、梁間1間 (3.2 m) で、桁行の方向は N45°W である。柱穴の平面形はいずれも円形で、径 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.3 m である。各柱穴跡からは少量の弥生土器が出土した。SP329 から出土した弥生土器甕 (691) は弥生時代終末期に属することから、SB09 は弥生時代終末期のものと考えられる。

7-9 区 SB01 (図 107)

7-9 区北西部から 7-13 区南西部にかけて検出された掘立柱建物である。桁行3間 (6.5 m)、梁間1間



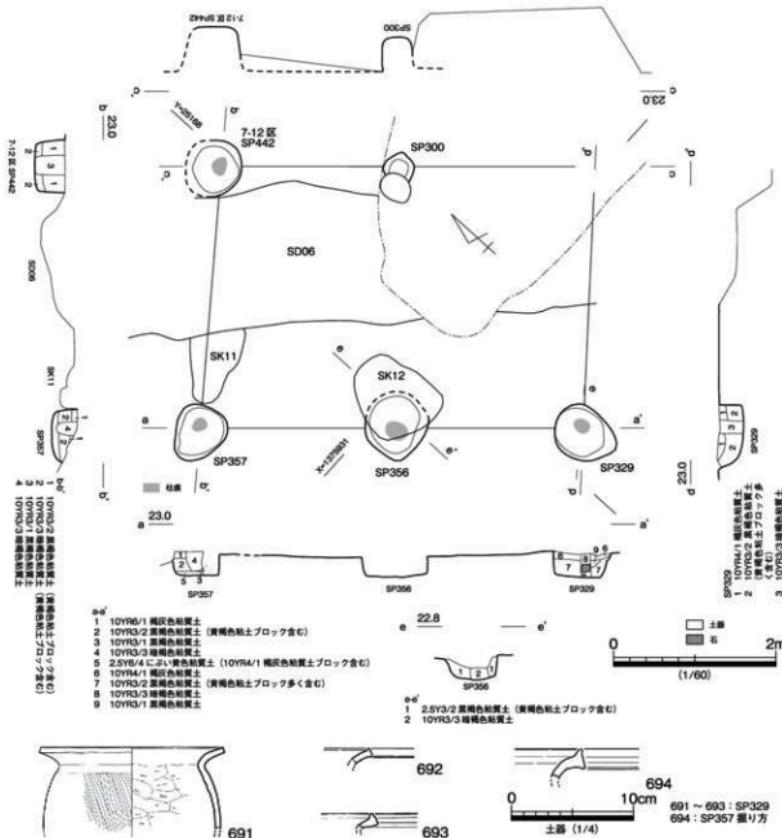


図 106 7-8 区 SB01

(2.0 m)で、桁行の方向は N30°W である。柱穴の平面形は隅丸方形または円形で、径 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.25 ~ 0.5 m である。各柱穴跡からは土器・須恵器が少量出土した。大半は弥生土器であったが、須恵器片が含まれていることから、古墳時代以降のものと考えられる。SB01 の東 5 m に位置する SB03 と建物方向がほぼ同じであることから、SB01 は SB03 と同様奈良時代のものである可能性が高い。

7-9 区 SB02 (図 108)

7-9 区南西部で検出された掘立柱建物である。建物の西側は調査区外に連続し、建物の南西部は擾乱によって削平されるため不明である。桁行 2 間 (4.2 m) 以上、梁間 2 間 (4.0 m) で、桁行の方向は N48°E である。柱穴の平面形はいびつな円形を呈し、径 0.7 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.25 m である。遺物は土器・須恵器片などが少量出土した。弥生土器や弥生時代の石器もみられるが、SP42 から出土した土師器鉢

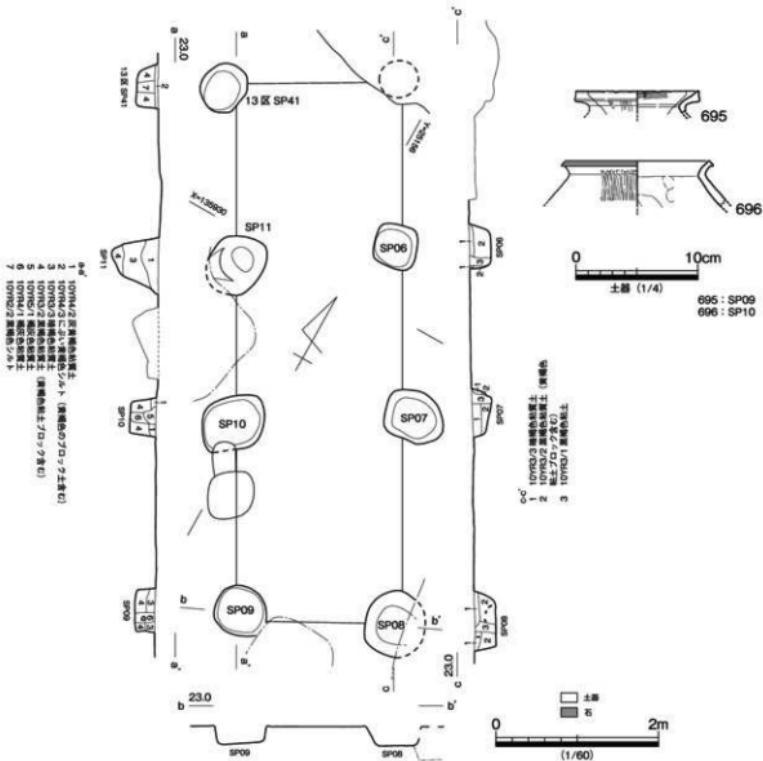


図 107 7-9 区 SB01

(697)・高杯（699）は7世紀前半から中葉に属することから、SB02は同時期のものと考えられる。

7-9 区 SB03 (図 109)

7-9 区北部で検出された掘立柱建物跡である。桁行 3 間 (4.5 m)、梁間 1 間 (2.0 m)、桁行の方向は N34° W である。柱穴の平面形はいびつな方形または円形で、径 0.4 ~ 1.0 m、深さ 0.3 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。弥生土器も含まれていたが、SP70 から須恵器蓋 (704) が出土した。704 は奈良時代に属することから、SB03 は奈良時代のものと考えられる。

7-9 区 SB04 (図 110)

7-9 区南西部で検出された掘立柱建物跡である。桁行 2 間 (4.5 m)、梁間 1 間 (2.2 m)、桁行の方位は N56° W を測る。攪乱のため削平されており、建物の南東隅の柱穴は未検出である。柱穴の平面形はいびつな円形で、径 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。各柱穴からは弥生土器などが少量出土した。SP52 から出土した 712 は弥生土器高杯の脚部である。外面には櫛描直線文が数条施される。吉備地方か

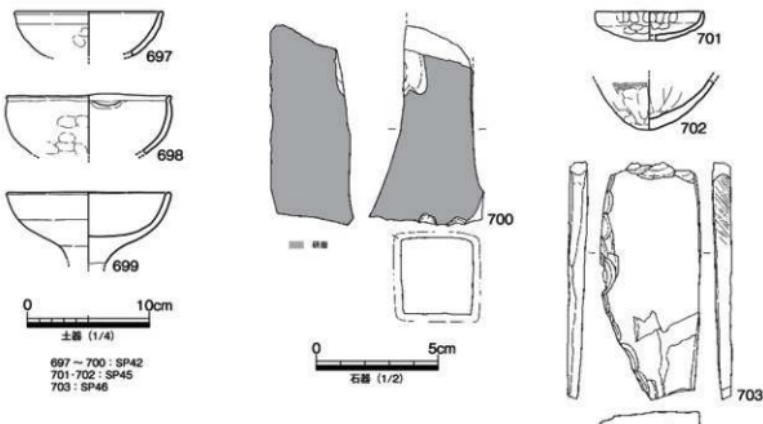
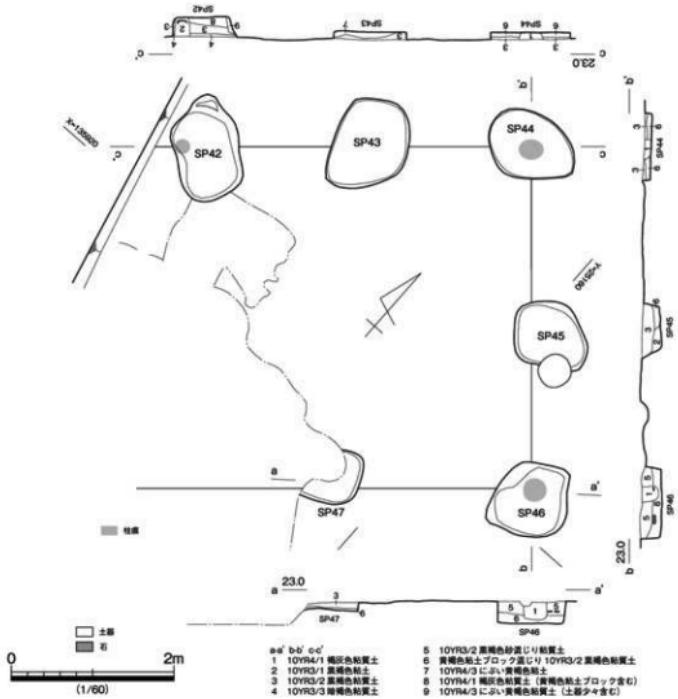


図 108 7-9 区 SB02

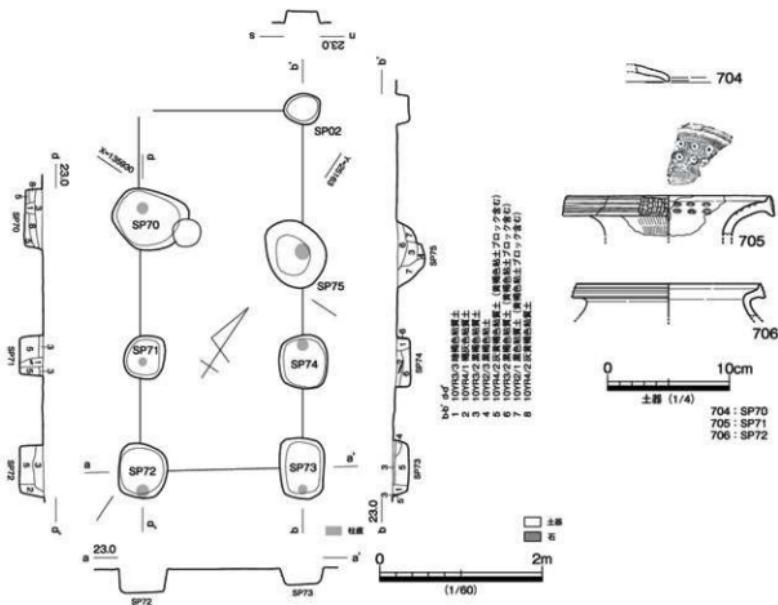


図 109 7-9 区 SB03

らの搬入品で、弥生時代後期前半のものである。SP49 と SP50 からは須恵器のほかに須恵器小片が 1 片ずつ出土したが、須恵器片は小片であることから、混入したものと考えられる。このほか、各柱穴からの出土土器には弥生時代後期前半の土器もみられるが、大部分の土器は弥生時代終末期に属するこ^トから、SB04 は弥生時代終末期のものと考えられる。

7-13 区 SB05 (図 111)

7-13 区南西部で検出された掘立柱建物跡である。柱穴の一部は古墳時代溝 SD03・SD1304 と重複し、削平される。北東部の柱穴は検出されなかったが、桁行 4 間 (4.5 m)、梁間 2 間 (3.5 m) で、桁行の方向は N65° E である。柱穴の平面形は円形または隅丸方形で、径 0.7 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m である。各柱穴からは土器・須恵器が少量出土した。大部分は弥生土器であるが、土師器・須恵器の小片も数点出土しており、SP45 出土の須恵器蓋 (717・718)・須恵器壺 (719)、SP43 出土の須恵器壺 (714) は陶邑須恵器編年 TK10 型式に属することから、SB05 は 6 世紀中葉のものと考えられる。

7-13 区 SB06 (図 112)

7-13 区中央部で検出された掘立柱建物跡である。桁行 2 間 (3.3 m)、梁間 1 間 (2.0 m) である。桁行の方向は N62° E である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.2 m である。柱穴からは弥生土器片が少量出土した。SP164 の柱痕から弥生土器高杯 (720) が出土した。720 は弥生時代後期後半に属し、出土遺物の中には須恵器片がみられないことから、SB06 は弥生時代後期のものと考えられる。

7-13 区 SB07 (図 113)

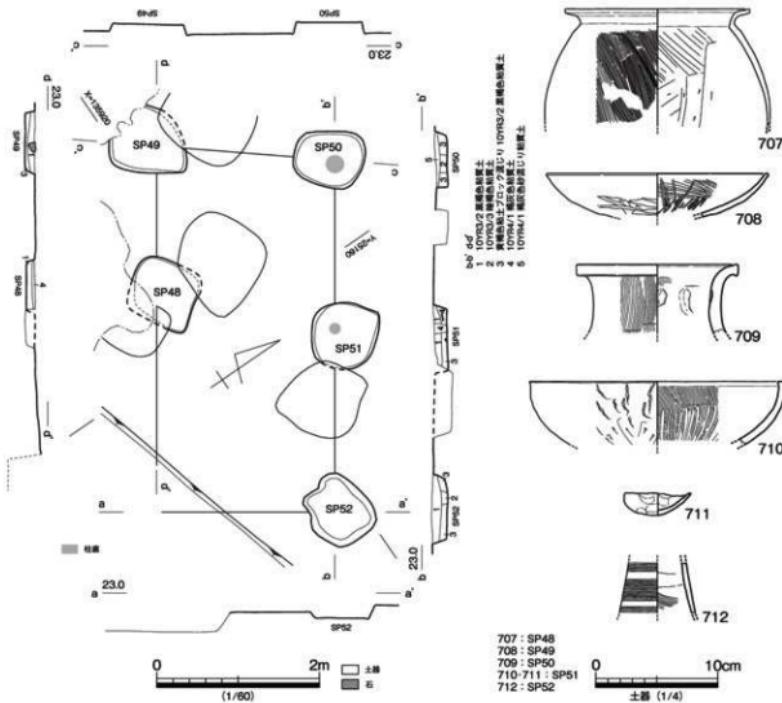


図 110 7-9 区 SB04

7-13 区北西部で検出された掘立柱建物跡である。古代の溝 SD15 と重複する。SB07 のほうが新しい。桁行 3 間 (5.7 ~ 6.0 m)、梁間 2 間 (3.4 ~ 3.7 m) である。桁行の方向は N26° W である。柱穴の平面形は隅丸方形で、長軸 (0.5 ~ 1.1 m)、短軸 (0.5 ~ 0.8 m)、深さ 0.15 ~ 0.4 m である。各柱穴からは土器・須恵器が少量出土した。弥生土器や古墳時代後期の須恵器も含まれるが、SP194・SP219・SP260 から 8 世紀の須恵器が出土していることから、SB07 は 8 世紀のものと考えられる。

7-13 区 SB10 (図 114)

7-13 区中央部で検出された掘立柱建物跡である。古墳時代後期の溝 SD18・SD19 と重複しているため、柱穴の上部は削平されているものが多い。桁行 2 間 (4.9 m)、梁間 1 間 (2.7 m) で、桁行の方向は N40° W である。柱穴の平面形は隅丸長方形で、長軸 1.1 ~ 1.5 m、短軸 0.6 ~ 1.0 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。四隅に当たる SP337・SP336・SP118・SP73 では柱痕の埋没土の堆積が検出された。柱痕の埋没土の堆積は径 0.3 ~ 0.5 m で、黒褐色土である。各柱穴からは弥生土器片が少量出土した。弥生時代中期後半に属するものも含まれるが、SP118 から出土した弥生土器甕 (729・730) は弥生時代後期前半古段階に属することから、SB10 は弥生時代後期前半古段階のものと考えられる。

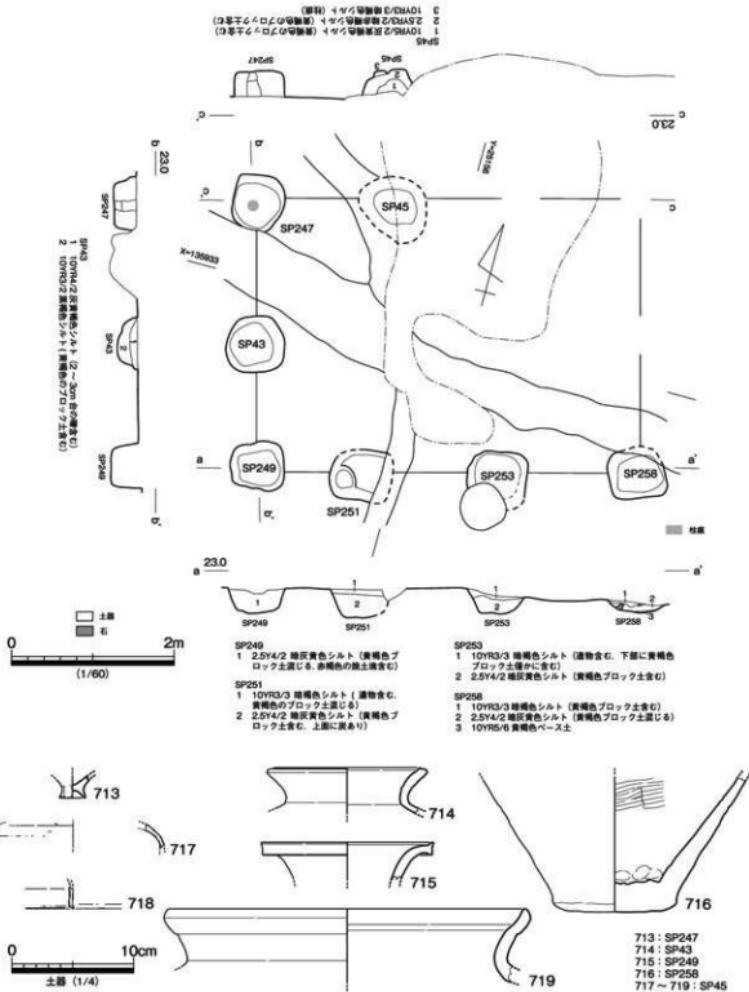


図 111 7-13 区 SB05

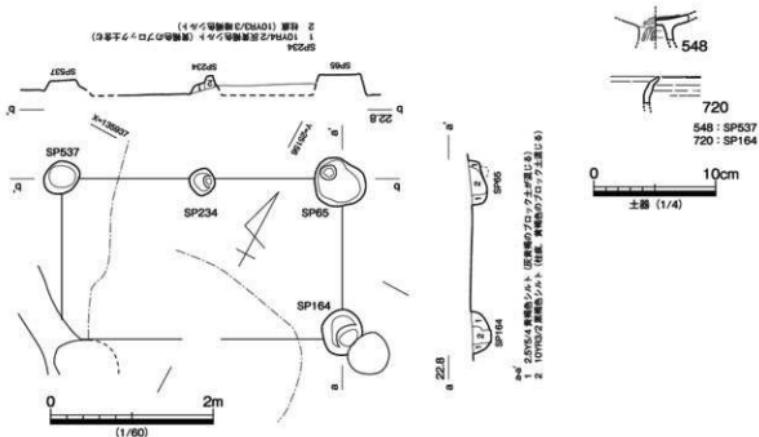


図 112 7-13 区 SB06

7-13 区 SB16 (図 115)

7-13 区北西部で検出された掘立柱建物跡である。桁行 3 間 (5.3 m)、梁間 1 間 (4.0 m) で、桁行の方向は N66° E である。柱穴の平面形は隅丸長方形またはほぼ円形で、長軸 0.6 ~ 0.8、短軸 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.15 ~ 0.5 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。弥生土器も含まれるが、SP64 からは土師器羽釜 (734)、SP315 は須恵器杯 (735) が出土した。735 は 8 世紀、734 は 11 世紀に属する。734 の時期から SB16 は 11 世紀のものと考えられる。

3. 柱穴・小穴出土遺物

7-2 区柱穴・小穴出土遺物 (図 116 ~ 118)

736 ~ 837 は 7-2 区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。これらは弥生時代中期後半から古墳時代初頭、古墳時代後期、8 ~ 14 世紀に属するものである。743 は SP142 から出土した土師器小皿で、13 世紀のものである。745 ~ 747 は SP164 から出土した。745 は 10 世紀の土師器杯、746 は 12 世紀の黒色土器、747 は 12 世紀の土師器杯である。749 は SP186 から出土した中国産白磁碗で、大宰府編年白磁 IV 類に当たり、11 世紀後半から 12 世紀前半に属するものである。752 は SP240 から出土した須恵器杯で 9 世紀後半から 10 世紀前半のものである。766 ~ 768 は SP333 から出土した。766 は 8 世紀の須恵器壺、767・768 は 9 世紀の須恵器杯である。782 は SP424 から出土したガラス製の小玉で、青色である。784 は SP436 から出土した 8 世紀の土師器杯で、内面に斜めの暗文がみられる。795 は SP516 から出土した。13 ~ 14 世紀の土師器土釜である。797 は SP557 から出土した。十瓶山付近で焼かれた須恵器鉢で、12 世紀後半から末のものである。798 は SP560 から出土した。十瓶山付近で焼かれた須恵器碗で、13 世紀のものである。799・800 は SP572 から出土した。799 は 弥生時代後期前半の壺で、頸部には竹管文と、ヒゲ状のヘラ書き文がある。807・808 は SP576 から出土した土師器杯で、14 ~ 15 世紀のものである。806

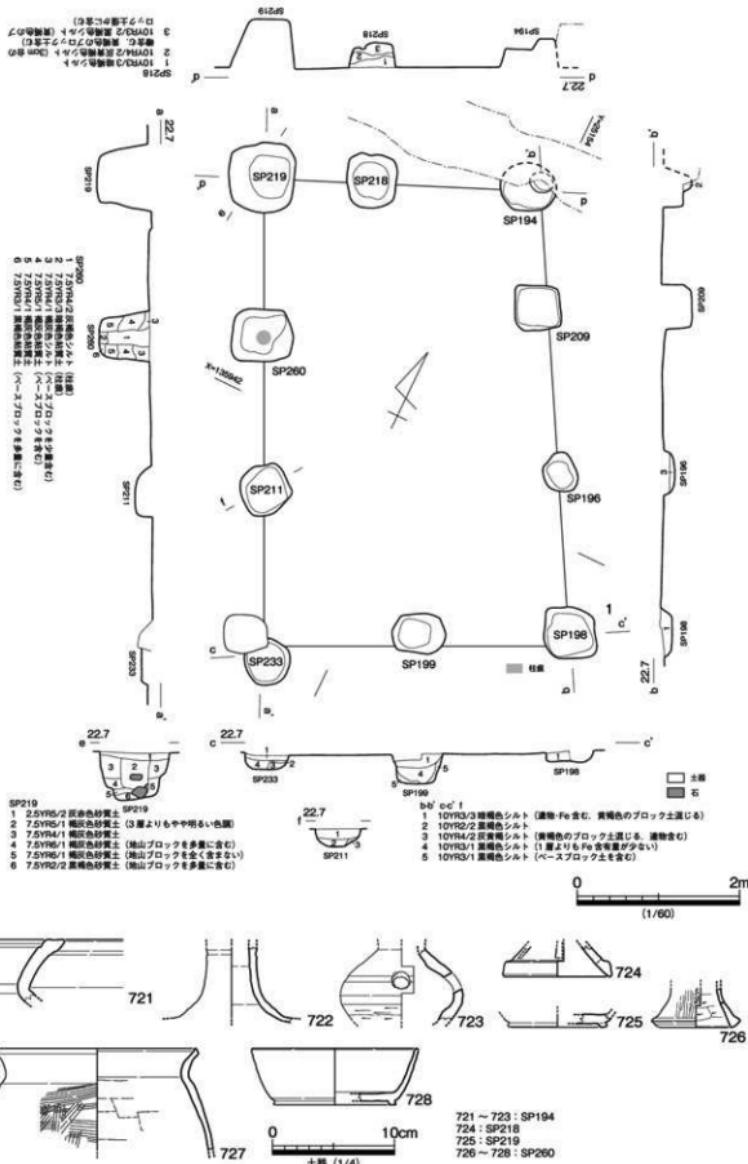


図 113 7-13 区 SB07

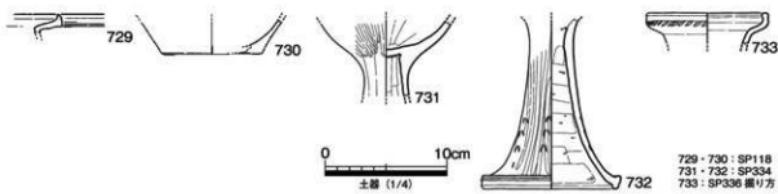
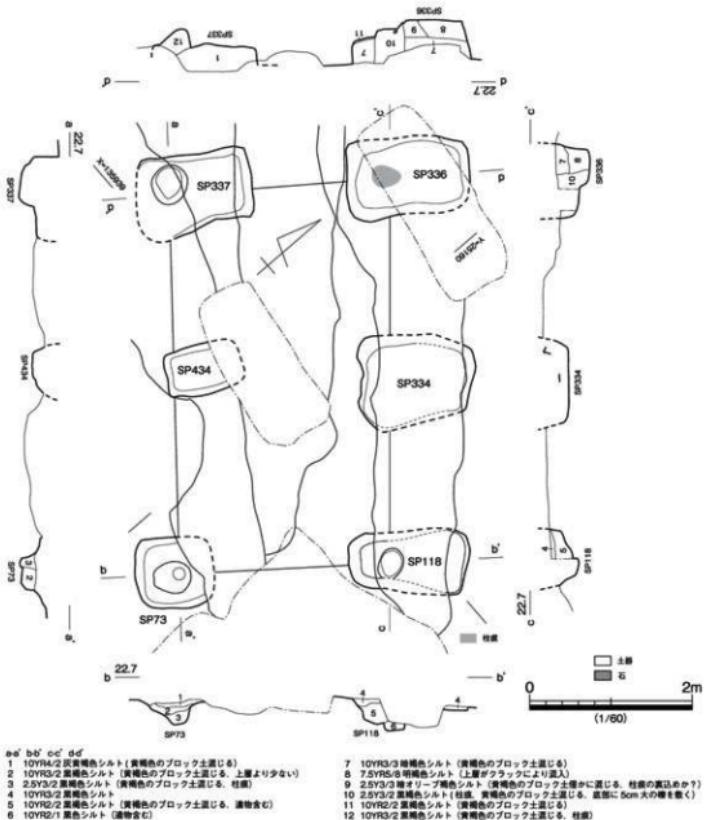


図 114 7-13 区 SB10

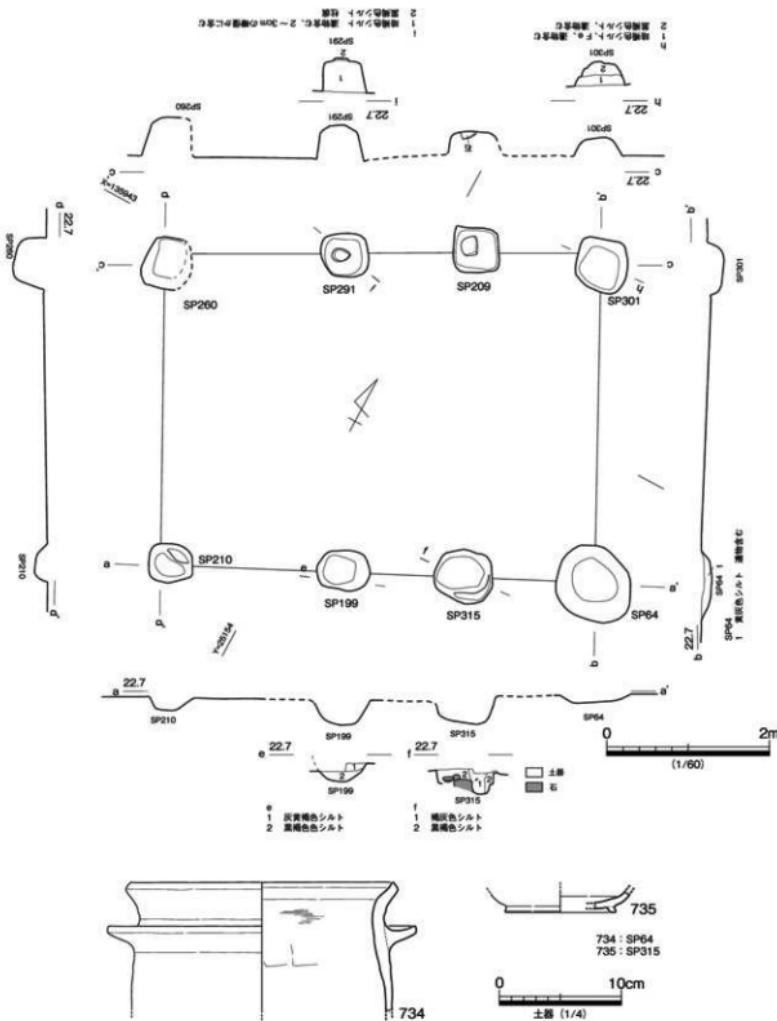


図 115 7-13区 SB16

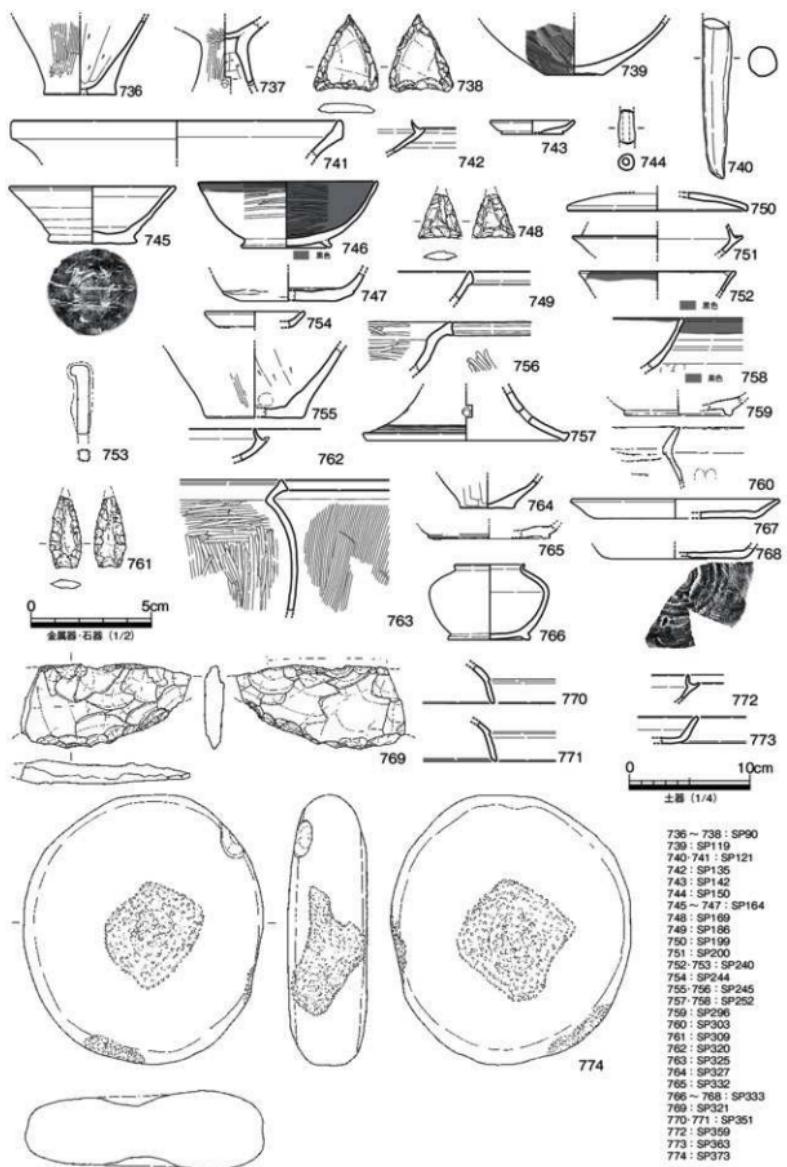


図 116 7-2 区柱穴・小穴 (1)

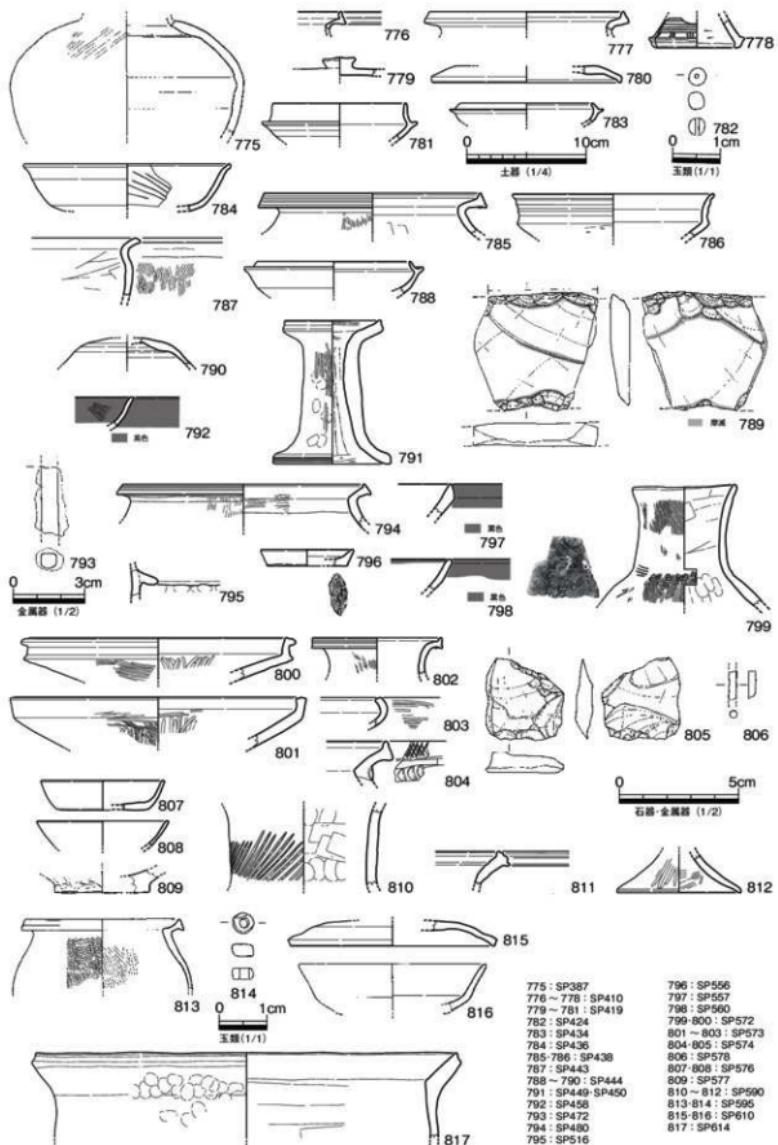


図 117 7-2 区柱穴・小穴 (2)

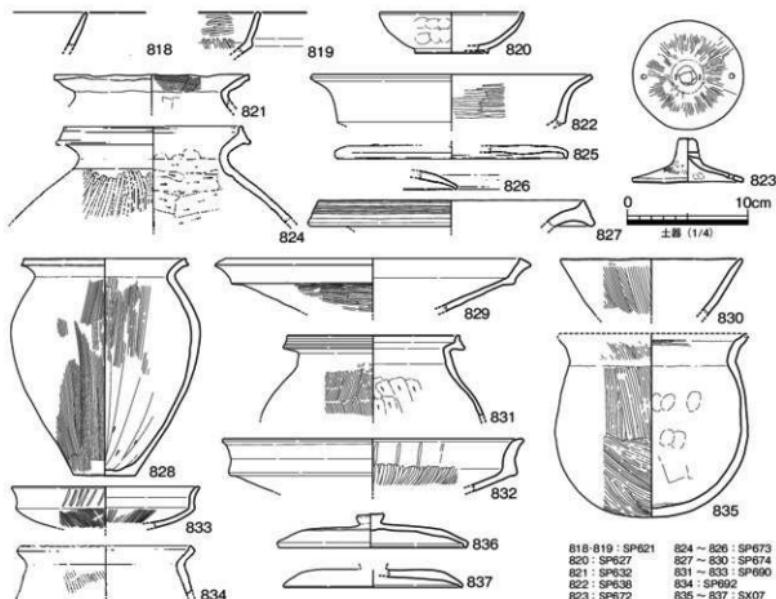


図 118 7-2 区柱穴・小穴(3)

は SP578 から出土した。銅鏡の茎である。813・814 は SP595 から出土した。814 は滑石製の白玉である。817 は SP614 から出土した。12世紀の土師器壺である。820 は SP627 から出土した。吉備系土師器碗で、14世紀のものである。835～837 は SX07 から出土した。いずれも 8世紀のものである。

7-7 区柱穴・小穴出土遺物(図 119)

838～841は7-7区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。これらは弥生時代中期後半から古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代から14世紀に属するものである。845はSP23から出土した須恵器碗の底部で、13世紀のものである。852はSP58から出土した土師器小皿である。器壁が薄く、14世紀のものである。853はSP61から出土した弥生土器の底部片である。内面には赤色顔料(ベンガラ)が付着する。857～861はSP84から出土した。857は弥生土器壺の口縁部片である。口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、刻み目を施す。高知県地方からの搬入品で、弥生時代後期前半のものである。858は弥生土器体部片で、外面にはヘラ描きによる円弧状の文様がある。861は須恵器杯の底部で、9世紀後半のものである。867はSP131から出土した。弥生土器高杯の口縁部で、内外面に赤彩が施される。胎土は茶褐色である。岡山県の備中地方からの搬入品で、弥生時代後期初頭のものである。869はSP137から出土した。弥生土器高杯の脚部で、外面には多条のヘラ描き沈線が施される。胎土は在地のもので、弥生時代後期中葉のものである。866はSP130から出土した須恵器蓋で、8世紀末から9世紀前半のものである。874はSP183から出土した弥生土器壺の口頸部である。胎土は茶褐色で、赤彩がある。これも

818-819 : SP621	824～826 : SP673
820 : SP627	827～830 : SP674
821 : SP632	831～833 : SP690
822 : SP638	834 : SP692
823 : SP672	835～837 : SX07

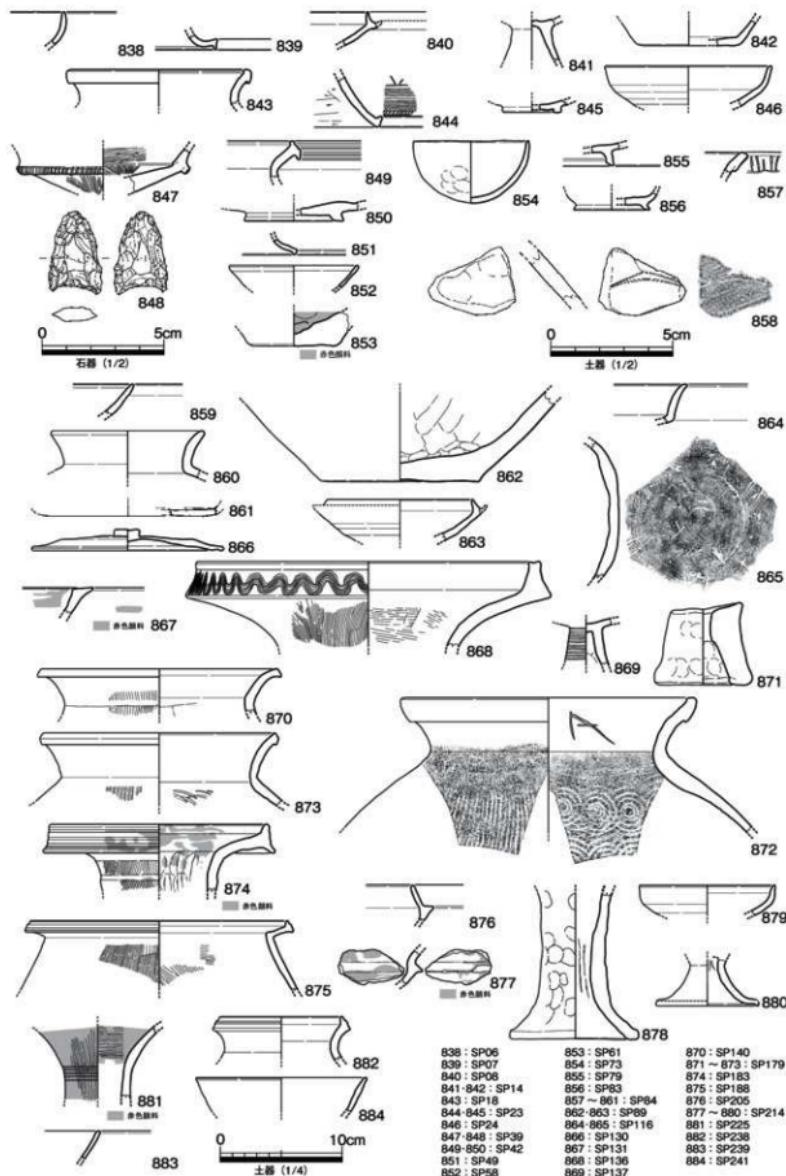


図 119 7-7 区柱穴・小穴

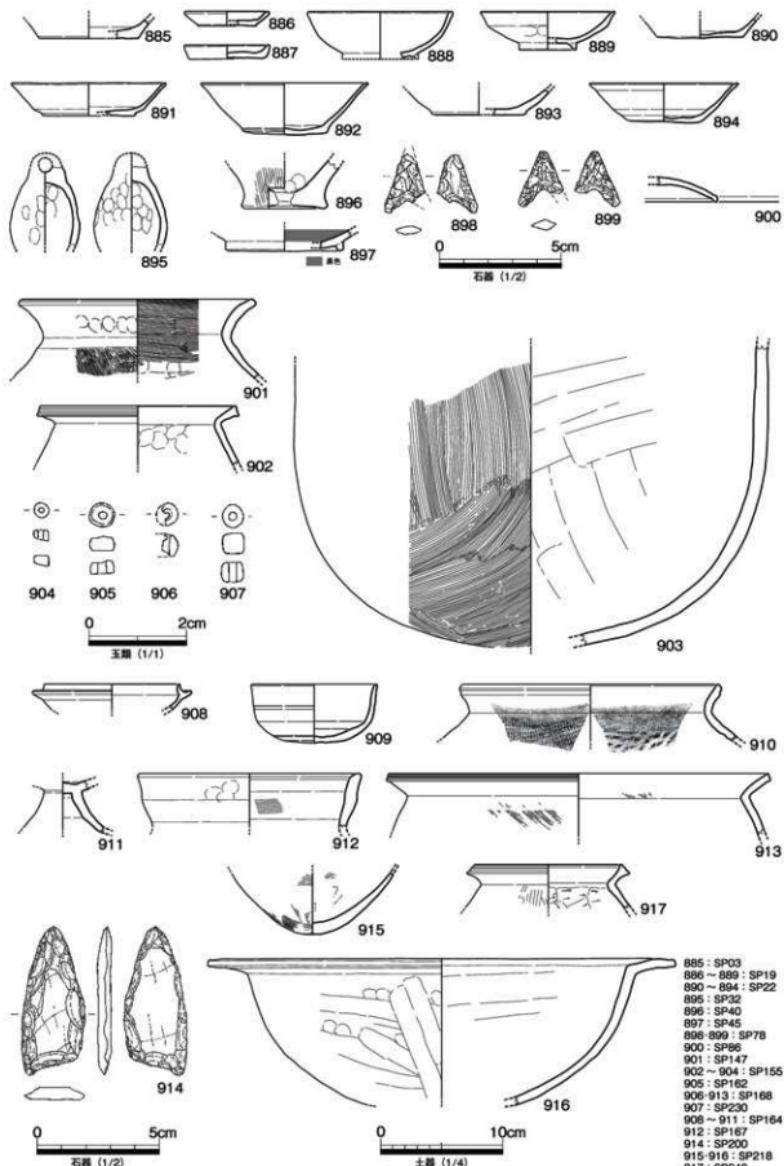


図 120 7-8 区柱穴・小穴 (1)

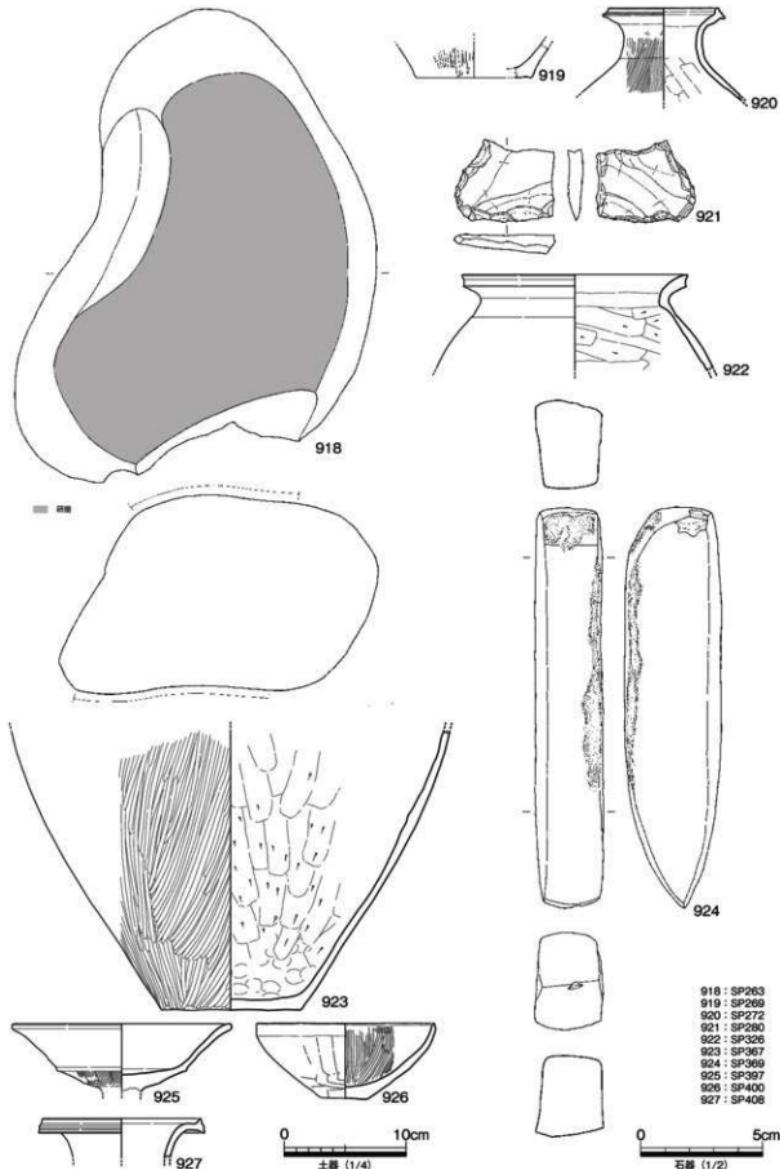


図 121 7-8 区柱穴・小穴 (2)

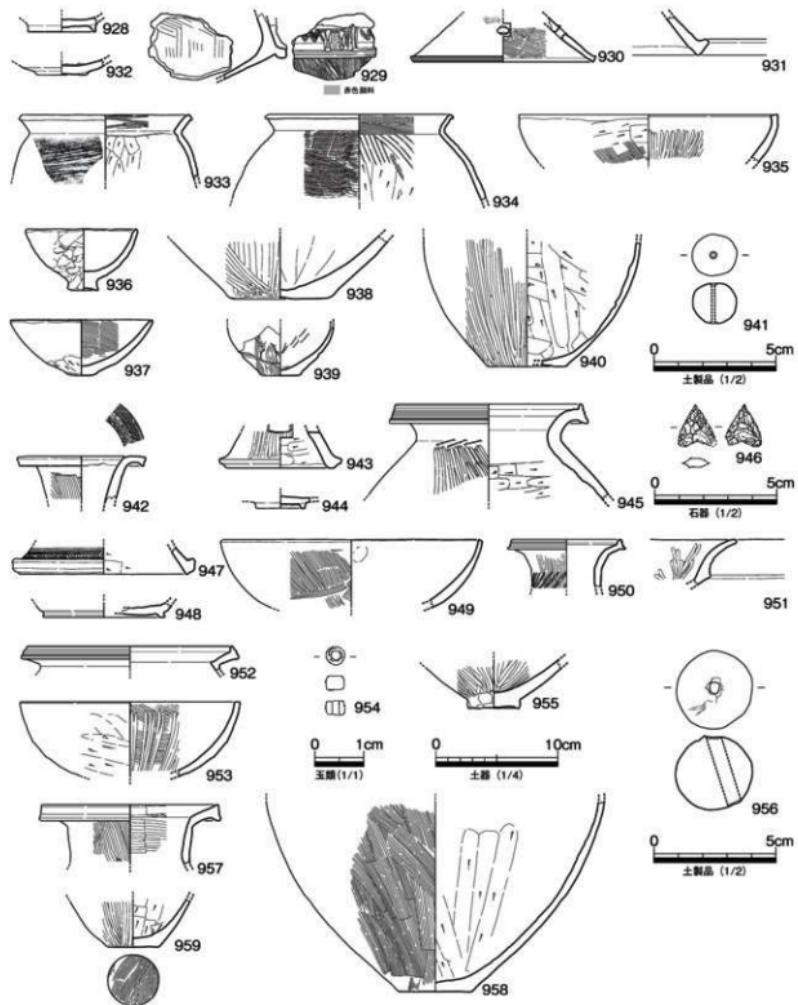


図 122 7-9 区柱穴・小穴

928 : SP01	942 : SP88	953 : SP274
929 : SP14	943 : SP98	954 : SP275
930 : SP17	944 : SP106	955 : SP276
931 : SP36	945 : SP110	956 : SP283
932 : SP38	946 : SP118	957 : SP287
933 ~ 935 : SP54	947 : SP121	958 : SP296
936 : SP55	948 : SP126	959 : SP302
937 : SP57	949 : SP147	
938-939 : SP58	950 : SP206	
940 : SP80	951 : SP214	
941 : SP86	952 : SP271	

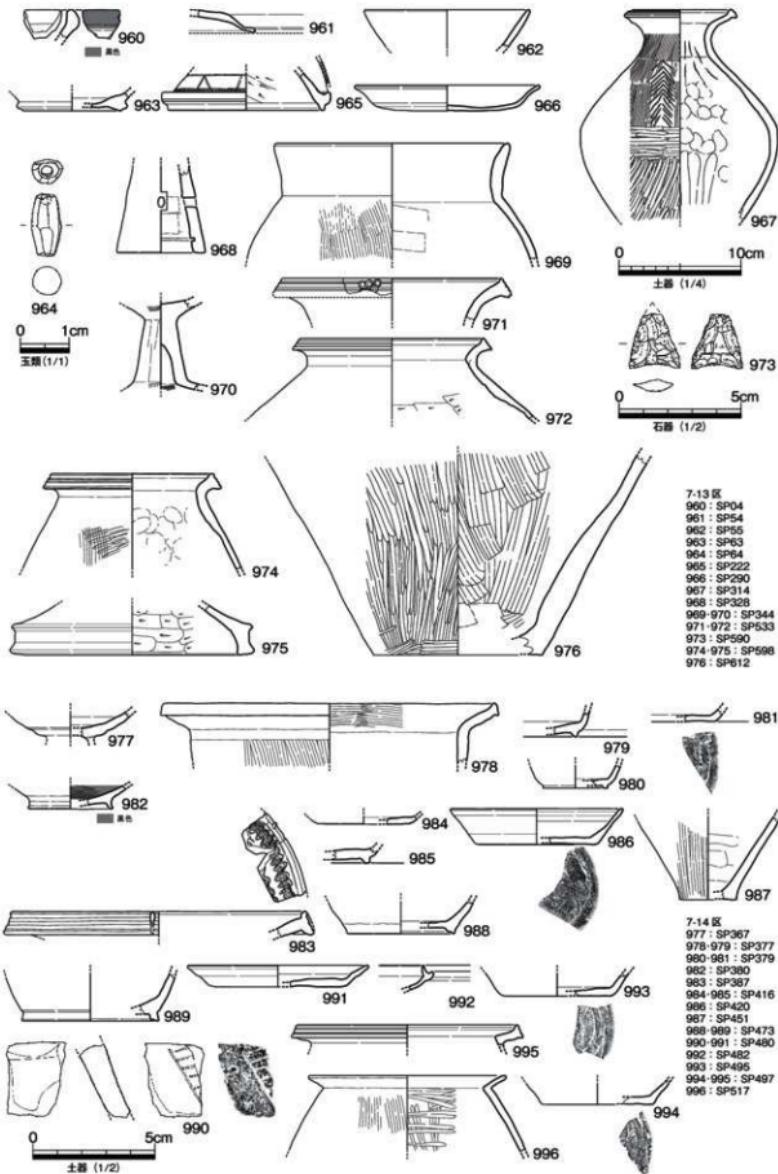


図 123 7-13・7-14 区柱穴・小穴

備中地方からの搬入品で、弥生時代後期前半のものである。867はSP131から出土した弥生土器高杯の口縁部片、877はSP214から出土した弥生土器高杯の杯部片である。867・877は内外面に赤彩（ベンガラ）がある。いずれも吉備地方からの搬入品で、弥生時代後期初頭に属する。881はSP225から出土した。外面にはヘラ描きの直線文が5条あり、内外面に赤彩（パイプ状ベンガラ）がある。弥生土器壺の頸部の可能性が高い。

7-8 区柱穴・小穴出土遺物（図120・121）

885～927は7-8区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。これらは弥生時代中期後半から古墳時代初頭、古墳時代後期、8～14世紀に属するものである。886～889はSP19から出土した。886・887は土師器小皿、888・889は吉備系土師器碗で、14世紀のものである。890～894はSP22から出土した。いずれも土師器杯で、10世紀に属する。897はSP45から出土した黒色土器碗である。内面が黒色の黒色土器A類碗で、10世紀に属する。902～904はSP155から出土した。902は弥生土器壺で、弥生時代後期前半のものである。903は土師器壺である。江戸時代のものと考えられる。904はガラス製の小玉で、青色である。905はSP162から出土した滑石製の白玉である。906はSP168、907はSP230から出土したガラス製の小玉である。いずれも青色である。908～911はSP164から出土した。908は須恵器杯、909は須恵器壺、910は須恵器壺、911は須恵器高杯である。これらは陶邑須恵器編年TK217型式で、7世紀前葉から中葉のものである。915・916はSP218から出土した。915は弥生時代終末期から古墳時代初頭の壺の底部であるが、916は14～15世紀の土師器土鍋である。924はSP369から出土した柱状片刃石斧で、結晶片岩製である。925はSP397から出土した。弥生時代終末期新段階から古墳時代前期前半古段階の高杯杯部である。

7-9 区柱穴・小穴出土遺物（図122）

928～958は7-9区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。弥生時代中期後半から古墳時代初頭、8世紀から13世紀のものである。928はSP01から出土した土師器碗の底部片で、13世紀の吉備系土師器碗である。929はSP14から出土した弥生土器壺の体部である。突帯を巡らし、棒状浮文を貼り付け、赤彩（ベンガラ）する。特殊壺で、弥生時代後期後半のものである。吉備地方からの搬入品であろう。932はSP38から出土した須恵器碗である。高台は形骸化しており、扁平である。13世紀に属する。941はSP86から出土した土製の土玉、954はSP275から出土したガラス製の小玉で、青色である。956はSP283から出土した土玉である。直径3.3～3.4cmで、941の2倍の大きさである。

7-13 区柱穴・小穴出土遺物（図123）

960～976は7-13区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。これらは弥生時代中期後半から古墳時代初頭、古墳時代後期、8～14世紀のものである。960はSP04から出土した東播系のこね鉢の口縁部で、14世紀に属する。966はSP290から出土した土師器皿で、9世紀に属する。964はSP64から出土した玉である。碧玉製で、外面には面取りがある。端面には深さ2mmの円孔がある。975はSP598から出土した弥生土器器台の脚部である。吉備地方からの搬入品であろう。

7-14 区柱穴・小穴出土遺物（図123）

7-14区で検出された柱穴・小穴から出土した遺物である。これらは弥生時代中期後半から11世紀に属する。978はSP377から出土した土師器壺で、10～11世紀のものである。982はSP380から出土した黒色土器碗で、11世紀のものである。981はSP379から出土した須恵器皿で、9世紀のものである。986はSP420から出土した土師器杯で、9世紀前半に属する。990・991はSP480から出土した。990は弥生

土器の体部片で、ヘラ描きによる斜線とその線に直行する直線が数条施される。絵画の一部であろうか。991は須恵器皿で、9世紀のものである。

4. 土坑

7-2区 SK02 (図124)

7-2区南西部で検出された土坑である。北部は攪乱によって削平を受けるが、僅かに残存する。平面形は隅丸長方形で、長さ1.6m前後、幅0.5m、断面形は箱形で、深さ0.2mである。遺物は土器・須恵器片少量出土した。須恵器は小片で少量しか出土していないが、陶邑須恵器編年TK217型式に属することから、SK02は7世紀前葉から中葉のものと考えられる。

7-2区 SK05 (図125)

7-2区北部で検出された土坑である。北部は攪乱によって削平される。平面形はややいびつな楕円形で、長軸1.4m前後、短軸0.5m以上、深さ0.4mである。断面形は途中にテラスをもつややいびつな逆三角形である。出土遺物は土器・須恵器・石器が少量出土した。999は須恵器蓋で、8~9世紀前半のものである。小片であるため、混入の可能性も高いが、SK05は8~9世紀前半のものと考えられる。

7-2区 SK07 (図126)

7-2区南東部で検出された土坑である。弥生時代後期前半の竪穴建物SH18、東部は古墳時代の溝SD0213、

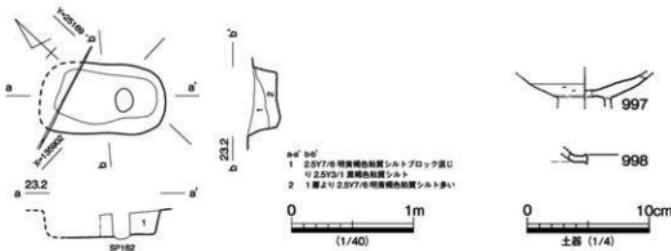


図124 7-2区 SK02

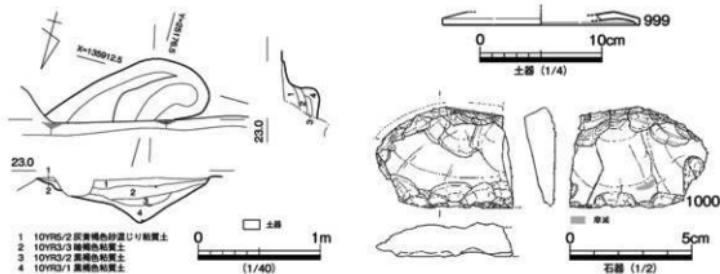


図125 7-2区 SK05

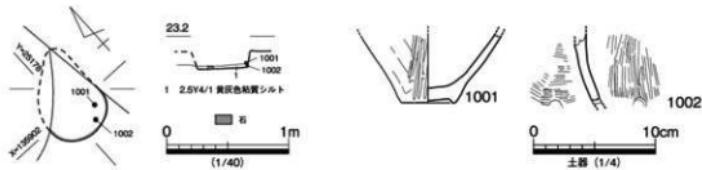


図 126 7-2 区 SK07

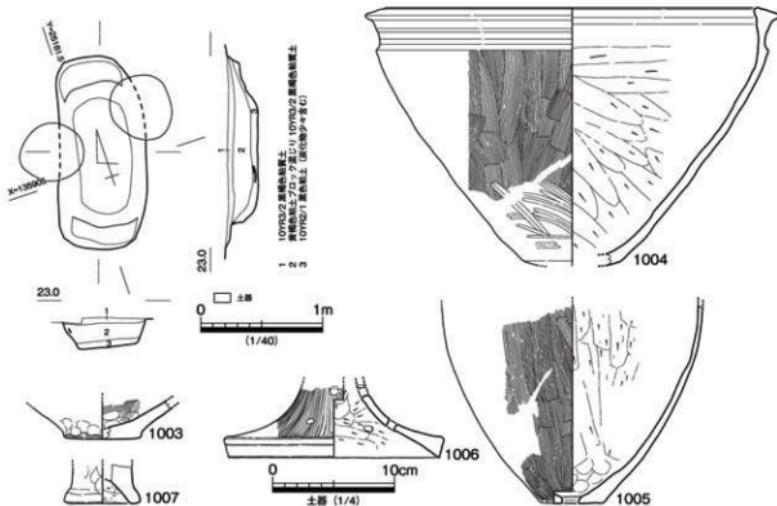


図 127 7-2 区 SK11

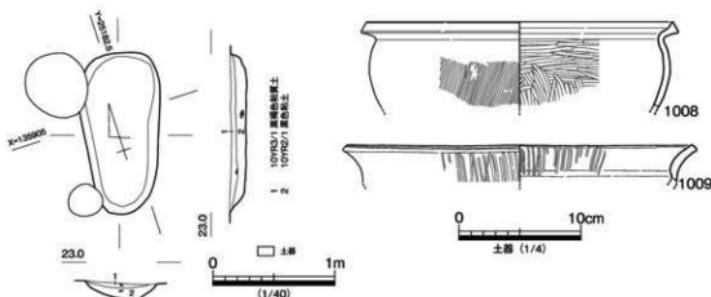


図 128 7-2 区 SK12

北部は弥生時代後期後半の竪穴建物SH17と重複し、削平される。平面形は楕円形と推定される。長軸0.7m、短軸0.5mで、断面形は浅い箱形、深さ0.05mである。底面付近から壺（1001）と高杯（1002）が出土した。いずれも弥生時代後期前半古段階に属することから、SK07は弥生時代後期前半古段階のものと考えられる。

7-2区 SK11（図127）

7-2区東部で検出された土坑である。古墳時代の竪穴建物SH13・SH16と重複し、SH16の床面の調査時に検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸0.7mである。長軸方向の断面形は二段掘りで箱形、短軸方向は逆台形で、底面はほぼ平坦である。深さは0.3mであるが、SH13・SH16により上部が削平されており、本来はもう少し深い。遺物は弥生土器が整理箱半分程度出土した。1004・1005は底面付近から破片の状態で出土した。1004は弥生土器鉢、1005は弥生土器壺である。これらの土器は弥生時代中期後半新段階から後期前半古段階に属することから、SK11は弥生時代中期後半新段階から後期前半古段階のものと考えられる。

7-2区 SK12（図128）

7-2区東部、SK11の東に隣接して検出された土坑である。長軸の方向はSK11とほぼ同じで、両土坑は平行する。SK11と同様SK12も古墳時代の竪穴建物SH13・SH16と重複し、SH16の床面の調査時に検出された。平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸1.3m、短軸0.5～0.7mである。長軸方向の断面形は浅い皿状である。遺物は弥生土器が少量出土した。1008・1009は弥生時代後期前半古段階から中段階に属することから、SK12は弥生時代後期前半古段階から中段階のものと考えられる。

7-2区 SK13（図129）

7-2区東部、SK11の西2mの地点で検出された土坑である。長軸の方向はSK11・SK12とほぼ同じである。弥生時代後期末の竪穴建物SH17と重複し、SH17の床面調査時に検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸1.0m、短軸0.6m、断面形は箱形である。上部はSH17に削平されており、現存の深さは0.15mである。遺物は弥生土器が少量出土した。小片であるが、弥生時代後期前半に属することから、SK13は弥生時代後期前半のものと考えられる。

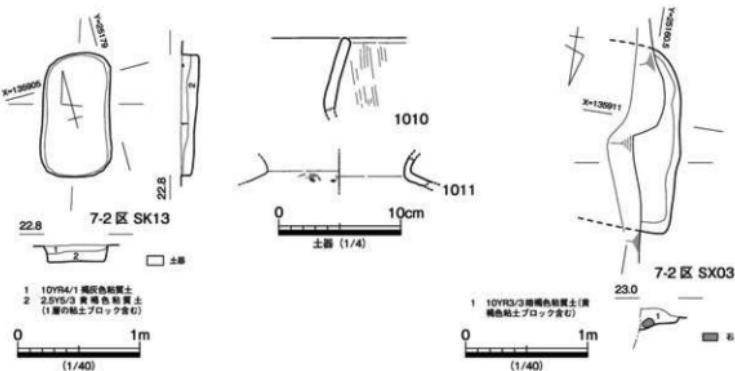


図129 7-2区 SK13・7-2区 SX03